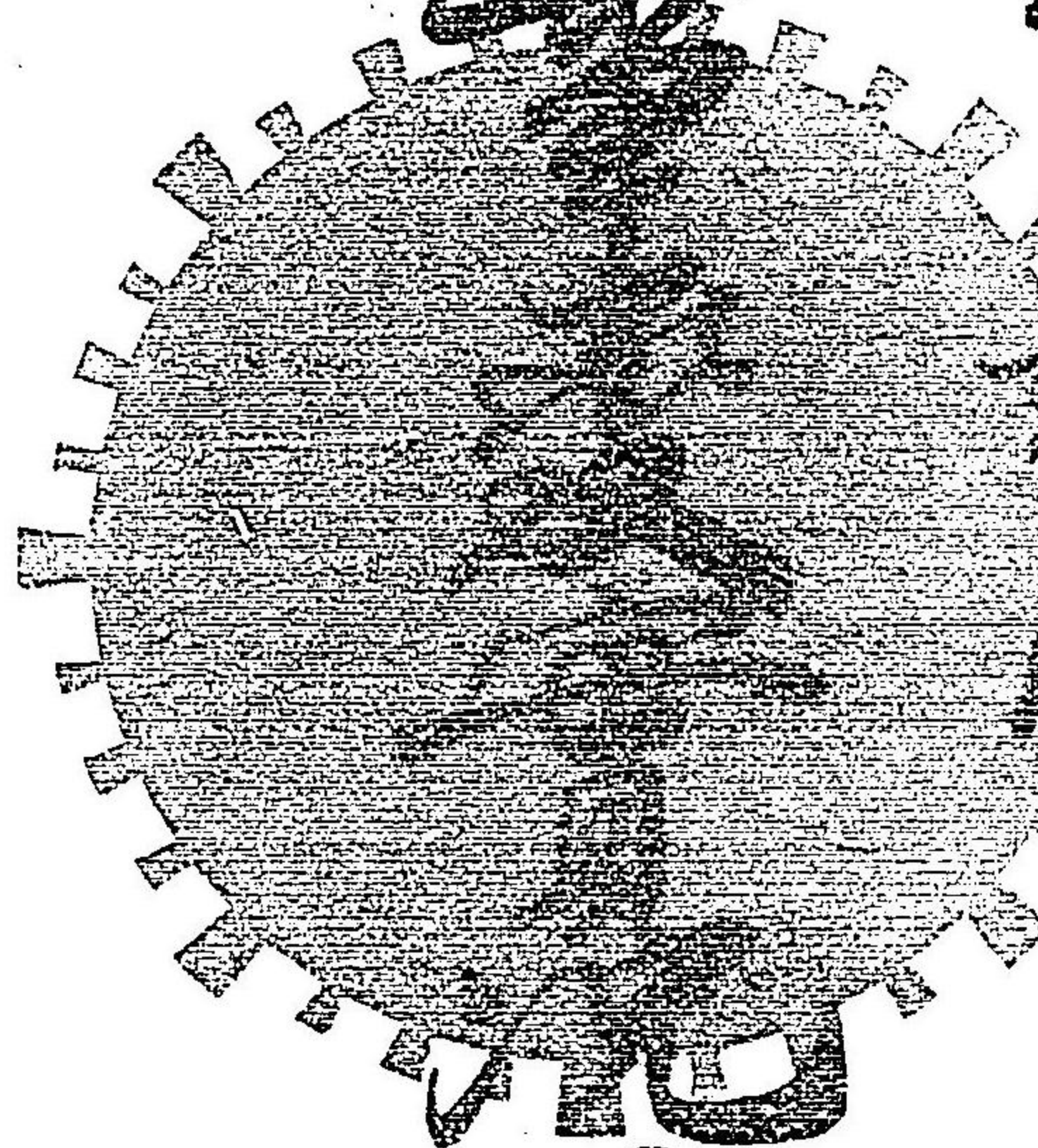


福岡集英堂發行

北清

美當一調氏講演



地談

新聞の資料

224
531

002927-000-6

特29-11

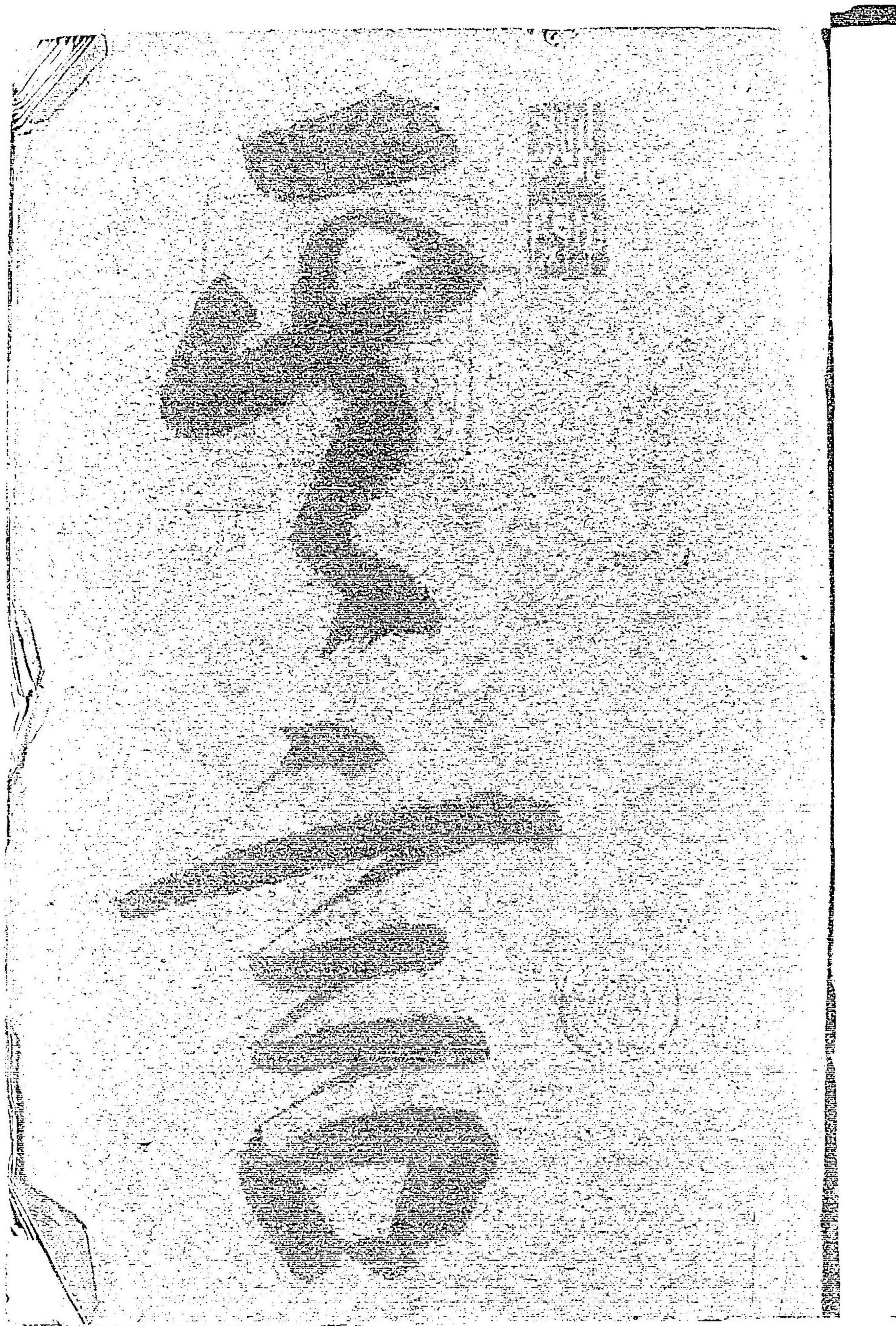
北清事変実況談 第2編

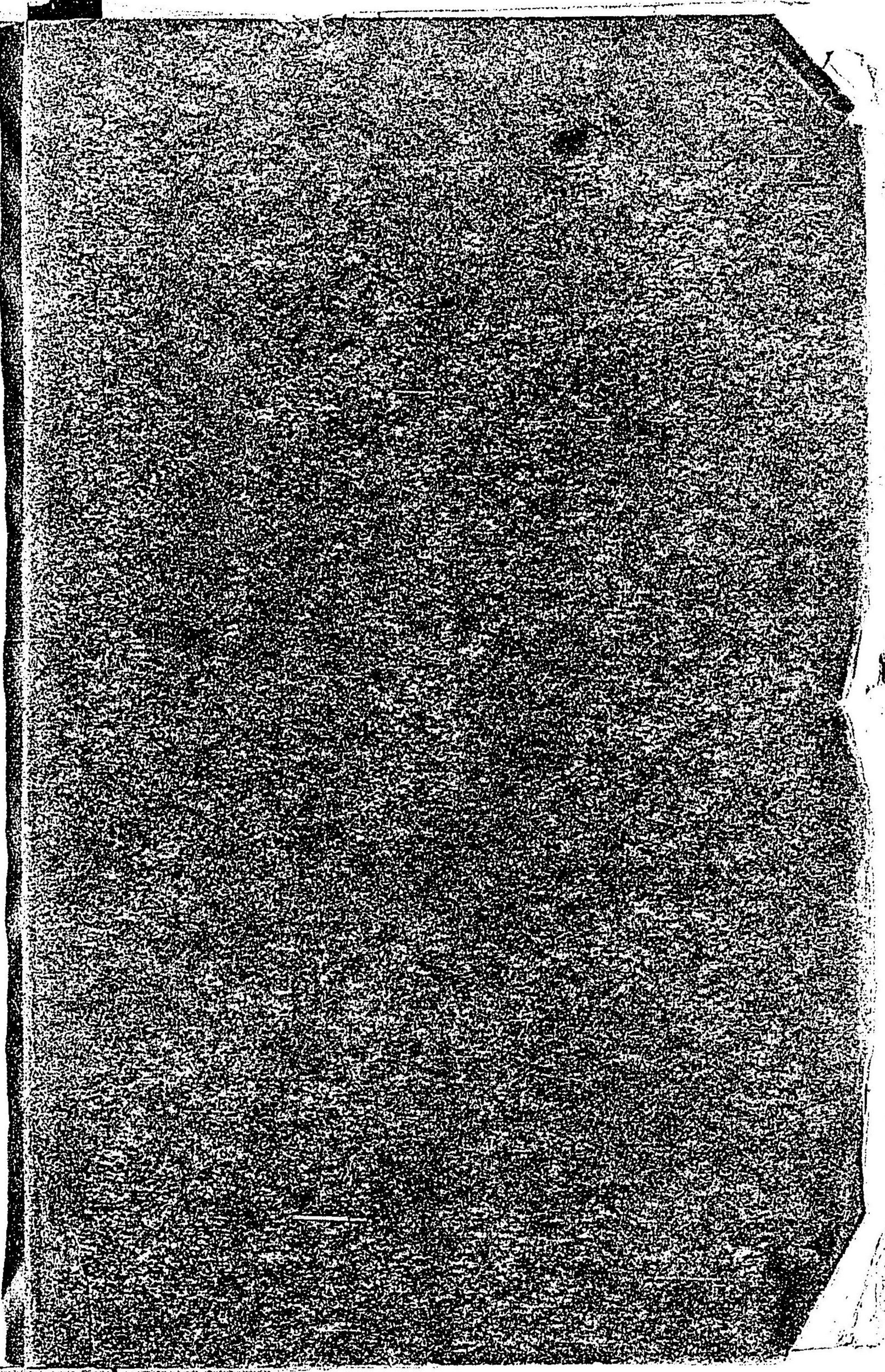
美當 一調/述

M36

ACB-6500







子
丑
寅



子
丑
寅



心
事

東
亞
書



特29
11

序

史を閲すれば、古來三千年、殃を滅し禍を亡し、義の爲め道の爲め、死を鴻毛の輕きに比して、毫も顧みるなきは、蓋し我が邦特有の品性に於て、所謂大和魂なるものゝ發展を、咲匂ふ櫻花の潔きに較らぶるに至る、豈に美はしくも亦た欽すべき風懷ならずや、
已に此の特性あり、日本帝國が、蕞爾たる一島國を以て、卓然列強の間位に位るす、良に故なしとせず、畢竟先天的性格の、自づから然らしむる所なるべしと雖も、抑も亦た史乘感化の大いなるものあるは、吾人の贅言を俟たざる所なり、
見よ、疾然颯發、一氣天に冲するの概は、渠等が國家の爲めに盡瘁する性情にあらずや、屍を異邦に曝して、草裏骨を枯すを顧みざるは、渠等に愛國てふ一片の士氣あるが爲めならずや、誰か之れを想ふ

毎に、花下朝の露を踏で、芳香に浴するの感なからんや、
回顧すれば、去る明治三十三年の初夏、怪雲翩綿、東亞の一角を罩め
て、北清の野に、聯合軍の砲駁を列ね、旌旗滿州の天を蔽ふて、端なく
鉄火相結ぶや、英佛獨露米伊の各國を凌駕して、先づ殊功を太沽の
砲臺に占め、進むで天津北京の要害に當り、以て異數の武勇を現は
したるが如き、誰か案を叩いて快哉を呼ぶるものぞ、旭章の翻る所
敵影なく、勁風一たび到つて萬草伏すと、吁亦た宜なるかな、
此書は北清事變の詳細を叙して、士氣振興に資せんとするもの、行
文平易流暢、婦女子尙ほ了解し得れども、事は即ち邦家休戚の上に
關し、延て東洋平和の如何に係る、或ひは驕陽鉄を溶す所、熱砂を踏
んで彈丸雨注の間を馳驅し、或ひは朔風肌を劈くの邊、雪を蹶つて
劔戟を揮ふ、一讀の間、正に是れ骨鳴り肉動くの感あり、所謂懦夫を

して起たしむるものは是、

句に曰く、散る花の中に一本櫻かな、嗚呼、日本の軍人にして、屍を北
清の野に曝したる幾人ぞ、生を國家に捧けて、血を忠義の刃に濺ぎ
たる幾人ぞ、苟も志ある者は讀め、義あるものは讀め、吾人は敢て斯
書を世に紹介するに吝ならざるものなり、一言以て序となす、

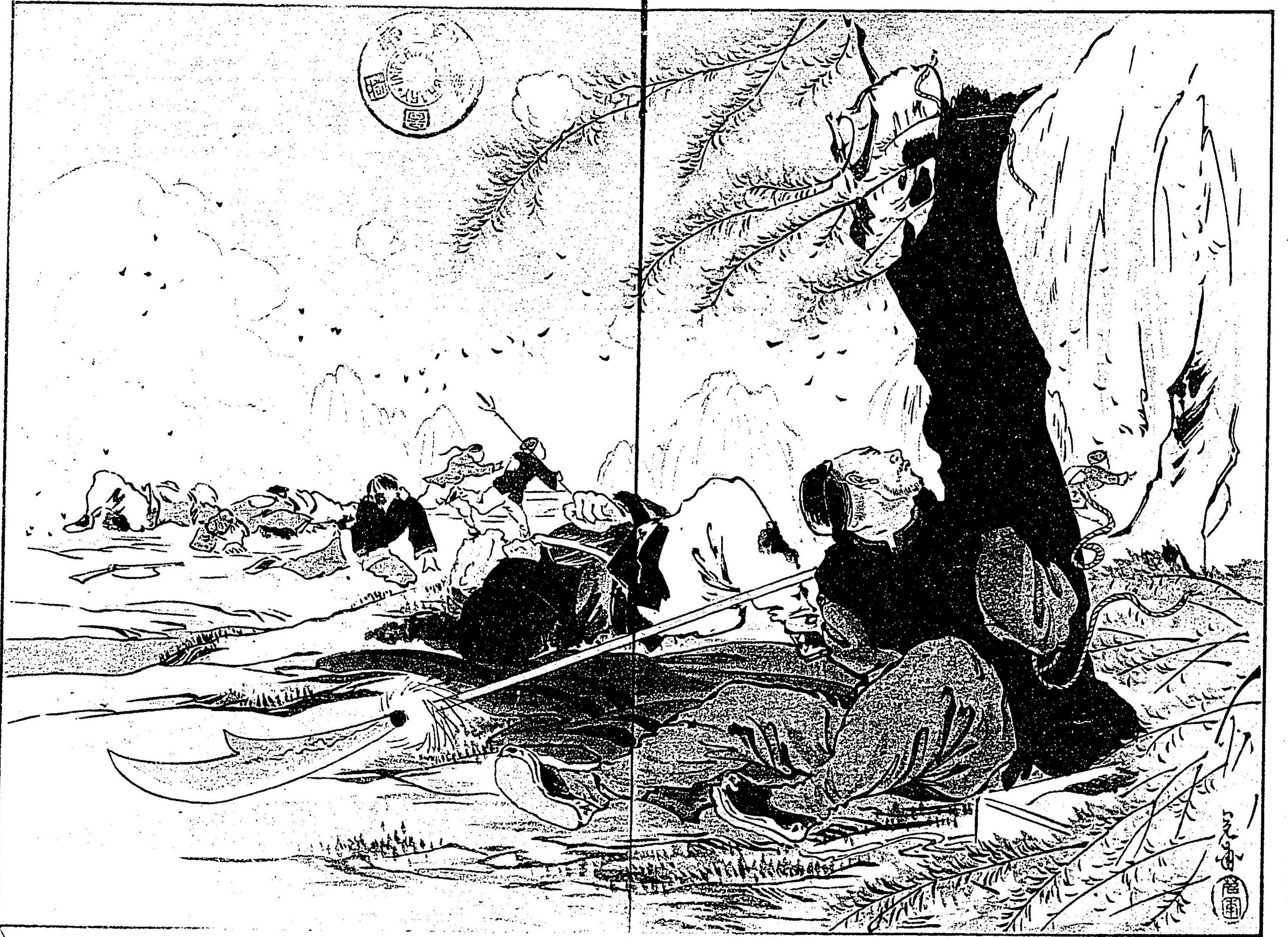
櫻花正に辭するの日竹裏郷の茅屋に於て

今 村 外 園

一寸北清事變のお話をすることに付て、一言茲に述べて置きたいことがございます、それは何かと云ふと、今日世間に種々北清事變に關する戦史やら、講談速記やら、随分澤山に出来て居ります、所が是等は皆講談と言ひ、戦史は勿論、餘程文章が高尙になつて居りますが、固より此の高尙と云ふのは、至極結構なことであるけれども、私の考では、此の講談と云ふものを、只だ高尙と云ふのは、平生餘り好みませぬ、何故かと云ふて見ると、高尙の文章に綴つたものを了解する人は、講談を聞せるの必要が餘程少なうございます、それで教育の餘り無い人、或は無教育の婦女子青年、或は幼年の人に聞かせるには、成べく分り易いことを主としなければ、講談の速記を普く世上に廣めると云ふことは出来ませぬ、
そこで私の講談は、少將とか聯隊長とか、或は參謀長なり、其他の將校なりのお互の話、且は他人に向つてのお話の語調と云ふても、皆至つて俗に流れて居ります、それで此の速記を、中流以上の方が見られると、實に是れは劣等の講談口調だ、實に見るに足らないと云ふ様な、御冷評を受くるかも知れませぬが、前申上ぐる通り、教育のある人には講談でなくとも、他の戦史などが却つて能くお分りになるので、講談速記を見るより、餘程簡短で讀むに倦もせぬ、早や分りが致しますから、宜しうございますけれども、中流以下の人は成べく話を俗に致さないと云ふと、分り悪いから、成るべく無教育の人に分り易いのを、本領として居りますから、どうぞ其のお積りで御覽を願ひます。

著 者 誌





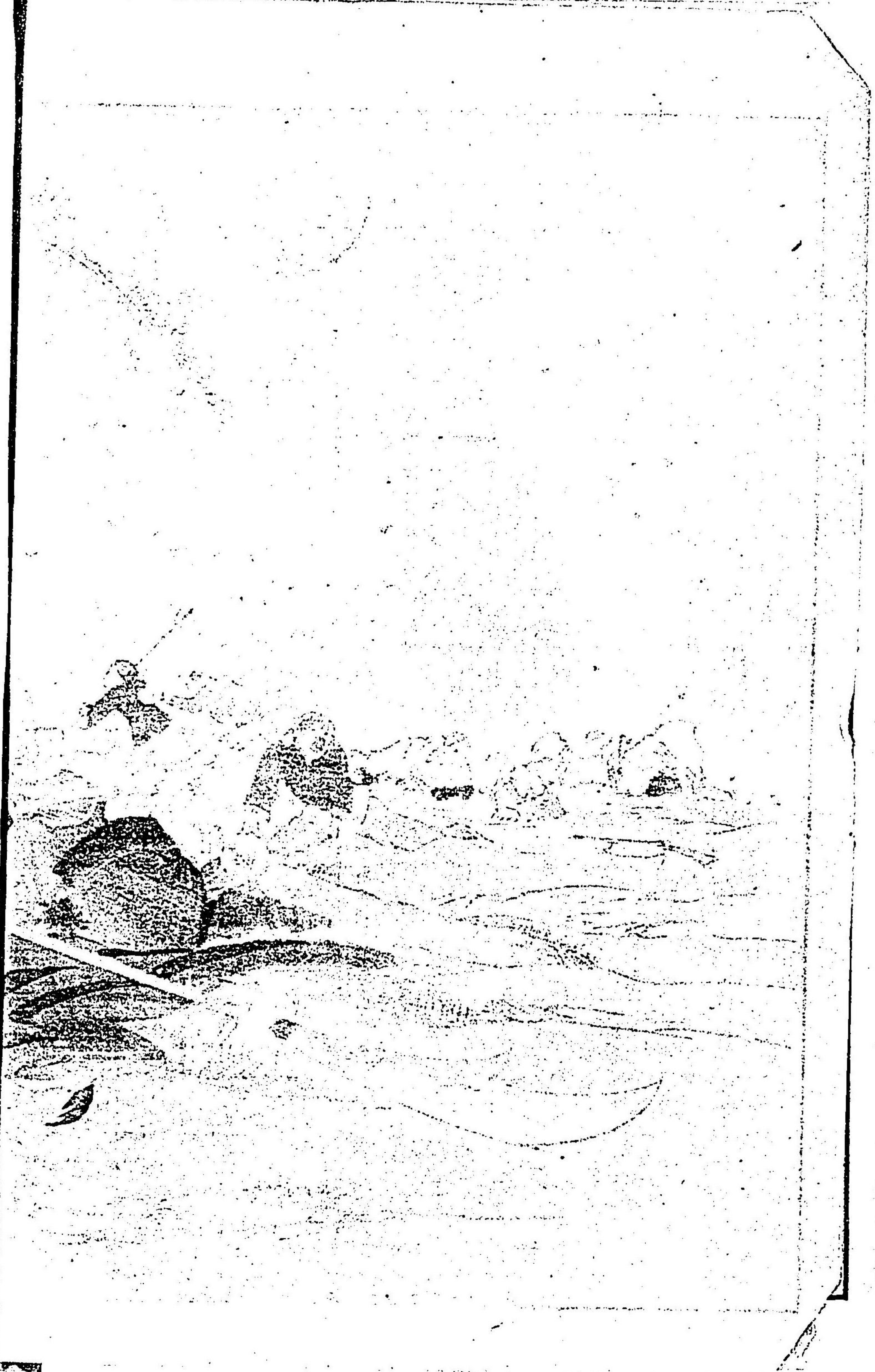
元承
管圃

北清事變實況談

(第一編)

美當一調講演

柿沼柳作速記



今度北清事變の戦争に關する講談を速記して、普く御愛讀を願ひたいと云ふ考へから、日清戦争の速記本に倣つて、又々講談を始ますが、此の度の北清事變と申しますのは、日清戦争のやうに、支那と日本とが、敵味方となつて、兩國の天皇陛下から、宣戰の詔勅を御降しになつて、互に戦ひを爲せと云ふやうな事を、仰付けられたものではなくして、彼の義和團匪が、支那國で暴動を起して、外國人と見れば、何れの國の人物とも構はず、追拂つて了う、若しそれを外國の人が、聞入れない時には、戦さを起して叩斬つて了うても、四百餘州の廣い、地内に一

人も、外國人は入れないと云ふことを思立つて、某國の領事館、公使館、或は居留民、何でも彼でも、外國人の家を立て居る所は、片端から焼捨て、遂には戦さを起して、取圍んで殺して了うと云ふやうな騒ぎになつたのだから、太沽沖に集つて居た所の、日、英、米、露、獨、佛、埃、伊、之を細く申上げますと、日本、露、西、亞、米、利、加、英、吉、利、佛、蘭、西、獨、逸、埃、太、利、伊、太、利、と、此の八ヶ國の軍艦から、支那の首府、即ち北京の公使館に、義和團匪が押寄せさうであるから、早く海軍兵を、幾らか送れと云つて、各國の公使から電報が來ました、そこで其の各國の海軍の水兵が、五十なり百なり、北京の都を指して参つて、公使館を守る爲に、入り込みました、其後天津も同様でございましたから、天津へも遣入し、そこでもう覺束なかつたので、北京の方へは英吉利の海軍中將サーエドワード、シーモアと云ふ人が、各國海軍兵を率ゐて、北京の方へ赴かれました、それに最も義和團が激昂して、遂に戦争を開始する事とはなりました、是が北清事變の始りなのでございますが、是に付いて少し御話が、面倒になりまするけれども、一寸支那皇帝の事から、御話を申したうございます、

全体只今の支那の天皇陛下と申しまするは、元と四百餘州の中の吉林烏拉の東南

に長白山と云ふ山がございす、昔は之を不咸山、又一には徒太山、今一は太白山と申してございす、其の山の高さが二百餘里、亘一千餘里、どうも誠に大きな山でございす、併し此の百餘里千餘里と申しますのは、支那國の里程で、日本里程に比べますと、オーツと縮つて居ると思召して下さらねばなりません、然るに此の山の東に布庫哩山と云ふのがございす、其の下に池がございす、此の池のある所の近傍を、布勒瑚里と申します、其家へ昔し天女が、天降りまして、其の池の水に浸つて浴しました、其の天女が三人で、一番頭の人を恩古倫と云ひ、其の次を正古倫と云ひ、末の人を佛庫倫と申しました、其の時鶴が参りまして、赤い菓物を含んで、其の一番襟の天女の衣服の袖に落しました、それを其の天女が口の中にくわへて見た所が、何となく腹に下つて了つて、それからお腹が大きくなつて來たと云ふのでございす、そこで其の末女が、兩人の姉に申しまするには、『私は妊娠になつて、どうも天に昇ることが出來ないが、何としたなら宜しうございませう』と申しました、所が兩人の姉さんが『お前はお腹が太きくなつたならば、今天に昇らないでも、何れ兒が産れるに相違はあらず、二人の天女は飛兒が産れた後に昇つても少しも差支はない筈だ』と言ひ遣して、二人の天女は飛

懸してしました、爾うすると其の末の天女は残つて、總て一人の男の子を持たれましたが、此の人が産れなからにして、物を言ひ且つ容貌が奇偉でございますから、暫く育てて見ると餘程珍らしい人物である、とところで其のお母さんに當たる天女が朕汝を生して以て、國乱を鎮めしむ、行いて之を治めよ、汝流れに従ふて行ば、即ち其の地あり、

斯様に申して、爾うして姓は愛親覺羅、名は布庫哩雍順天と心得よ、と言ひつゝ小舟を一ツ持て来て、それに乗らして、お母さんは遂に空中を指して、飛去つて了はれた、是れが彼の支那の天子さまの御先祖なさうでございます、伊し斯様な昔離見たやうなことは、我邦では、誰一人真正と思ふ者はございませんまいが、支那皇帝の御素性を、一寸御話するのは、是非昔の書物、或は近世支那に往つて、極く詳しい方に聞いたお話を、復た受賣するより他、仕様はございませぬから、要らぬこととは思ひますが、一寸と是丈け申し上げて置きます、其の初の子孫が、原皇帝と唱へ、それから直皇帝、翼皇帝、宣皇帝、高皇帝、文皇帝、章皇帝、仁皇帝、憲皇帝、純皇帝、仁宗皇帝、宣宗皇帝、文宗皇帝、穆

宗皇帝、爾うして唯今の皇帝と、斯う御時代がなつて居ります、

然るに此の前六代目の文皇帝と云ふお方の時分に、種々の改革が始つて、それから七代目、八代目迄にスツかり其の文物制度が改りました、けれども此の文物制度の改つたと云つて、今日日本の昔の風を一變して、文明國になつたと云ふやうな事とは正反對で、益々人民を愚にする方法で、ヤレ易とか、孝經とか、中庸とか、種々古い書物を集めて置て、それに六ヶしい理屈を付けて一應や二應讀だ位では、迎も解らぬ程のものを、教育するやうに改革をしたのでございますから、支那が今日老帝國になつて、モウ既に世界の國々の強い所から、分取りでもされさうな模様になつて来たのは、近頃始つたのではなくして、唯今申上げました通り、七八代の以前から、モウ其の摩はチャンと知れて居つたのでございます、斯う云ふ改革をされて、唯今まで十五代も、支那の天子様が續いて居られるから、其の年月を七代目から繰つても、餘程長い間でございましたが、其の長い間人民を愚にしやうと云ふ教訓、今日の支那人の商いでもする人は、政府はさう云ふもので立つて居るやら、税金と云ふものは、何の爲に出すものであるやら、爾んな事を細に知つて居る支那人は、日本に商ひにでも來て居るものの中には、餘

り知つて居るのは居りませぬ、横濱長崎邊に来て居る支那の商人に會ふと、何かの話の序に、役人はどうして彼んなに金を欲しがらうか、と云つて税金などを官吏が取りに来ると、其の税金は官吏が自分の物にする位に考へて居るので、實に驚いたものでございます、

是れと云ふのも人民を愚にしよう、と云ふ教から、斯うなつたものと察せられます、それで其の愚に成りすまして居るだけ、一旦斯うと思ひ込んだら非常なもので、日本國の日蓮宗や眞宗に、一生懸命にのぼせ上つて居る、田舎の爺さん婆さんの信心位ではない、一多信仰をし始めたならば、どう云ふ可笑な事を云ふて聞せても、それを一生懸命眞正だと思ふのでございます、

それで彼の義和團匪などと云ふ者は、其の迷信の信心者で、昔から支那に在る拳法と云ふものを頻りに信じて、其の拳法を學べば、敵の打出す彈丸は中ても通らない、水に這入つても溺れない、火に飛込んでも焼けない、食物にかつねた時は、二杯入れ位の釜に米を入れて炊き始めると、何千人集つて、それを喰べても一杯づつは一環下から出て来る、十杯づつは十杯分釜の底から殖ゑて来る、と云ふやうなことを、拳法の教師が教へると、それを心から本統と思ふて居る位の先生達、

實に我が日本國では、小學校生徒でも、斯んなことの出来やう筈は、ないと云ふ辨へはあつたけれども、支那人で拳法を學んだ、彼の義和團匪などと云ふ者は、其の之を眞實と一心不乱に信仰して居たものだからでございます、實に憐むべきも甚しいと言はなければ仕方がございませぬが、此の義和團匪のことに付て、マダ聊かお話を申して置きたうでございます、

元來義和團匪と云ふものが、素とどう云ふ所から起つたかと云ふて見ますと、露西亞のトルストイ伯の如き人は、今度義和團匪及び支那人が一緒になつて、八ヶ國に向つて戦ひを起したのは、是は西太后と端郡王の教唆に出たものだからでございます、其の實は歐洲人が、彼の支那國に渡つて長い年月、支那人を厭制して居たかはり斯う云ふとになつたと云ふ説もございませぬ、固よりそればかりではなく、初め申上げた通り彼の七八代目の、支那皇帝が人民を愚にしたから起つたのでもございませぬが、此の露西亞のトルストイ伯の言も亦決して過言とは思はれませぬ、何せかと云ふて見ると、支那國に各國の耶穌の宣教師が入込んでより以來、其處にも會堂を立て、彼處にも會堂を立て、段々支那人が其の耶穌教に這入りますると、此の宗旨に這入つたもの、這入つて居ない支那人との間に、

裁判事件でも起ると理否は構はせして、其の宣教師など自分の公使館に行つて、是非我が教徒の方へ勝を取らせて呉れ、なほ云つて迫りて、多く耶蘇教徒の方々が、裁判さい起ると非も理になつて、勝を占むることが始終あり勝であつた、それから以て来て外國人が居ればこそ斯んな事にもなれ、外人さい居らなければ、斯んな事はないと云ふ所から、此の義和團と云ふ一群が出来て、外國人打掃ひと云ふことだから、今度の戦争になつたのでございます、

「此の義和團の元とく」起りましたことを細くお話しすれば、大分長いのでございませぬけれども、是は却つて御退屈になりますから申上げませぬが、唯拳法と云ふことを、一寸一口御話申して置きます、義和團の守つた拳法と云ふものは、口に呪文を唱へて拳を揚げて、人を前に立てゝ打つ眞似をする、當りもしないのにコロリと其の人が倒れて、夢中のやうになつて了う、それが拳法で、是れには其呪文の唱へ方等も、一寸承つて居りまするが、さうも一定の極りと云ふものはございませぬから、モウ茲にはお話し致しませぬ、若し此の拳法のことについて聞きたいと云ふ御方がございましたら、種々の本に細く出て居りますから、それで御承知を願ひたうとございます、

然るに此の義和團が、初め戦を起した發端と云ふものは、さう云ふものかと云ふて見ますると、直隸省涿水縣と云ふ所に一ツの武舉人某なる者が居りました、此男が平生耶蘇教徒を見ると、唾でも其顔に吐かけて行かうと云ふ位の嫌ひな人物でございまして、だから途中で遭ふても耶蘇教徒と見れば、行なり撲り倒すと云ふ位でございまして、次第に耶蘇教徒が殖へて來ました爲に、さうも耶蘇教徒の方が勢が強くて、向ふから撲れば、此方も打殺すと云ふやうな勢ひになつたから、始終耶蘇教徒と此の武舉人どが、睨合になつて居りました、

所が丁度三十三年の前年、其の武舉人と教徒との間に、さう云ふことか、其の事柄は存じませぬが、裁判事件で訴訟が出來ました、其の訴訟の何方が曲、何方が直、是非は能く分りませぬけれども、前申しました通り宣教師等の働きで、遂に耶蘇教徒の方が、裁判に勝訴となりました、そこで仕方なしに立腹仰へて、此の舉人は數多の金を出し、或は酒とか肴とかを澤山出して、其の裁判も何うか斯うか、事を收むるやうになりましたが、それにしても此の舉人は非常の腹立ちで、

其の立場を抑へやうがない、夜は眠られず食は飯も食はき、丁度三四晝夜と云ふものは、鬱々として居りましたが、遂に決心を致しました、其の決心はどうかと云ふて見ると、宅にある所の財産は悉皆賣つて了うて、爾うして山東省と云ふ所に飛出してすひました、其の山東省が義和團のトントの本據でございましたから、義和團に行つて一ツ頼まうと云ふ所から、飛出して了つて、サウして義和團の頭領に面會を致しまして『私は元と涑水縣の者でございますが、此の度貴所方のお目に懸つて、義和團の組に入れて戴きたいと思ふて忝上致しましたが、若しお差支がない者でございましたら、どうか私も其の部下に入れて、下さることは出来ませうまいか』と申しました、すると此の涑水縣の舉人は、随分名高い者でございますから、段々頭領の面々打集つて、舉人の平生の事等を探偵して見ますると、如何にも味方にとつては、百人前も働きのあると云ふことが分りましたから、一ツも二もなく其の頭領の中の下役位の所に編入されました、此の頭領の下に大師兄、次師兄と云ふ者がございます、爾う云ふ者の一人となつたから、右の舉人は仕済したりと心の中に、大いに悦びまして、隙を見て細に耶蘇教徒と争ふた事を、訴へ出てやうと云ふことを考へて居つたが、或る日其の頭

領集會と云ふやうな席がございましたから、其處へ出て其の舉人が申しまするには『時に此の義和團と云ふものは、先達つてからのお話に、外國人が四百餘州の中に踏込んで居ればこそ、種々難多な迷惑な事が起るから、是非外國人は打拂つて了ふて、我邦の昔の政事通り、世を太平にして、我邦のみで事をやりたい、と云ふ思召ださうでございますが、無論左様でございませうネ『固よりの事である、外國人は我が此の義和團の盛んになると同時に打拂つて了ふの考へである』今申しましたから『それに就て私は一ツお話をしたいのは他ではございませぬが、先達つて耶蘇教徒の奴等と、聊かの争から訴訟を惹起しました、私の方が十分勝つ理があるのに、耶蘇の外國宣教師が働きで以て、トウ／＼私の方が其の訴訟も負けになつて了ひました、誠に是等の事を思ひ廻せば、残念で堪りませぬから、第一番に此の涑水縣近傍の耶蘇宣教師を始め、其の教徒の奴等から片付けては如何でございませうか、第一は私の復讐でございませうが、第二は耶蘇宣教師を打殺し、其の信徒を叩散したならば、我邦の人民が以來は耶蘇教に道入ることが止まるでございませう、爾うすれば自然外國の宣教師などは、信徒なしには立たないから歸つて行く道理でございませう、何と如何でございませうか』と、巧に辨を揮

つて申しますると、頭領の面々は膝を打つて、「此の謀事甚だ妙なり、實に左様
く」と大賛成を致しまして、一人も異議を言ふ者は無くなつて了ひました、
それでは兎も角も、其所に是から出發しやうと云ふて、其の數凡そ百四五十、此
の武舉人が道案内で以つて、涑水縣に遣つて參つて、涑水縣に行くが早い、直
ぐに道場を拵へまして、サウして例の通り拳法を學ぶと云ふて、毎日く香を焼
き神を祭り數多の人を集めて、拳法を修むる者には砲彈も身を害せなと云つ
て、西洋各國の如何なる精銳の機械も、此の拳法に及はぬと觸散らし、義和團徒
を頻りに集めて居りました、
教徒等は訴訟には打勝つたけれども、武舉人が涑水縣を立退いて、山東省に行つ
たと云ふことを聞きましたから、定めて何事か彼の武舉人が起すに相違はないと
思ふて居る、其の矢先さへ以て来て右の通り道場を築き、拳法を修むると云つて、
其處にも此處にも騒立てましたから、非常に耶穌教徒の面々は怖がつた、どうし
たら宜からうと心配の餘り、處の縣令祝台令に此の事を申立てまして、どうも近
日斯う云ふ義和團徒等、穩かならぬことを致しまするに依つて、私共の保護を願
ひます、と云ふことを頼みました、けれども此の祝縣令は教徒等が云ふ所は、風

聲に驚き無暗に騒動するものであらうと、一向心にも留めず、好しくと云つた
なりで、抛つて置きました、所がどうも四五日経つと毎日く教徒の面々が代
りくやつて来て、モウ今にも事が起りさうと云ふて、私等は出遣入も出来ないやうな有様で
の事は手を付けて下さらないと云ふと、私等は出遣入も出来ないやうな有様で
さいます、義和團の居る所の近傍を通行しますると、拳を擬して變なことをしま
すから、迎も唯では濟みますまい、なと云ふから、モウ縣令も仕方がない、そ
れでは多少の兵でも繰出して貰はうと云ふことを、上役に向つて願出でました、
所が其の兵が未だ其の土地に参りませぬ中に、三十三年五月十三日と云ふ日に、
教徒が教堂に集ると云ふことがございました、それを彼の義和團の面々が認めま
したので、サア此の機會は決して失ふてはならない、教徒が一緒に集ると云ふこ
とは、吾々の力では到底出來ないが、幸にして集つたのは天の與へたと云ふので、
武舉人が此の事を義和團の頭領に申込ますると「それでは好し、直ちに是から其
の教堂を取圍めよ」と云つて、突然四方より其教堂を五月十三日の日に取圍んで、
傍らに石炭油を注ぎ、それに火を付け、傍らには出て來る者を生捕らんと云ふ覺
悟をして居りましたが、借て火を付けるや否や、石炭油を注ぎかけてあります

から、忽ち焰々と燃上り、老若男女哀れの聲をあげて、一時に逃いでやうとは致しませんが何分にも火は焰々と盛んに燃上るから、教堂に居つたる多数は仕方なしに、其の義和團徒に向つて、根棒を持つて打かふる者もあり、少しは小銃の用意の爲に集めてあつたのもあるから、それを持つて撃出した者もありました。そこでサア向ふの方から敵對したぞと云ふので、行きなりに義和團が、押寄せましたから叶はぬものと、皆一同に覺悟して火の中をも厭はずに逃始めました、爾うすると云ふと、老人子供の隔てなく、片端から打殺して了ふ、誠に大騒動となりました、大概此處に集つた者は、過半義和團の爲に打殺され、火の中に飛込んで死ぬると云ふやうな騒動になつたから、サア大變だと、縣令は直様此の事を総理衙門に届を致しました、ところが其の時の總督は裕祿でございまして、裕祿之を聞くや否や大きに驚きまして、是こそ大變だと云ふので、縣令から前に頼みがありまして、既に出懸けて居つた、保定府よりの行軍中の馬隊衛分統楊福同に申し遣はしましたから、率ゆる所の七十五名に一生懸命走らせまして、涿水に参りました、所がモウ此の時は、義和團は何れに去たのか影も形も見えませぬ、楊福同は土地の者に段々様子を尋ねて見た所が、何れの邊に居ると云ふことが分りま

したから、十六日直ぐに其の方に向つて参りまして、種々様々に諭して、左様な乱暴なことをしないやうにと申聞けましたけれども、ナカ／＼どうも團徒の勢が強くて聞きませぬ、そこで仕方なしに楊福同が言ふて聞かぬならば、是れで打倒して了ふぞと小銃を差向けさせました、けれどもナカ／＼聞かない、却つて向ふの方から其の小銃を楊福同見かけて押出し、既に打たんとするから、モウ仕方がないと云ふので、直ちに楊福同は部下に命令を下して、サア撃て——と云つて、バラ／＼と撃ちましたから十八名の義和團を打倒しました、そこで團徒は一時バラ／＼と逃げましたが、逃なからも振返つて「汝れ楊分統見て居れ、貴様の首を取つて、此の返報をしてやる」と其の儘逃散つて了ひました、が、明る十七日も亦た福同は此の義和團を探して、十四五名を撃殺されました、それから一兩日は行衛が分らないから、頻りに探して居つたところ二十日の日又其の義和團の居る所が分りましたので、福同は兵を率ゐて、其の方面に進み、た、サウすると此の日は、皆義和團は金巾で帯を赤色にして、紫の衣服を着して打連れて居るから、直様兵を繰出して、それに向つて進み、一人も残さず打取らんと、既に打かけんとすると云ふと、義和團はバラ／＼と逃始めたから、夫れ逃

すな、一人も残らざ彼を打取つて了へ、と云ふて、追ッ駆る、其の途中に一つの村がございました、「何れ此の村に這入つて居るに相違はない」と言ひつゝ楊福同も共に其の村内に這入りましたが、サツパリ義和團の姿が見ぬない、是れは妙だ、何れに往つたであらうと、其の村の中で頻りに躊躇して、何方に行かうか、此方に行かうかと思つて居る處へ、思いがけなく前後左右より義和團の伏勢が、ワーツと云つて起りました、「借彼等が計畧に陥りしかど、馬の上に楊福同乗らんとする所、片端の茂みの藪中より、突出す槍先を誤たせ、楊福同の頭筋に、グツサとばかりに突込みました、ヤレ残念と剣を抜いて、突いたる槍を切拂つたが、又も突出す第二の槍は、右の胸より脊中へかけて、グツサとばかりに突通す、哀れや分統楊福同は、遂に馬より逆様に落ちたる儘に落命致しました、

三

そこで大將が撃たれたからと云つて、一隊七十五名、十分な働は致しましたけれども多勢に無勢、此の時義和團匪は、凡そ二百に近くなつて参りましたから、實に氣の毒なことには、此七十五名唯一人も残らざに殺され了てひました、其の勢

に乗して義和團の徒は、大に乱暴を働き、其處此處に火をかけて焼拂ふとか、附近の鐵道を打毀すやら、電信線を切斷するやら、少しでも西洋風に形取つた物は何も彼も打毀し、耶穌教徒と見れば、老若男女を問はず、片端から打殺すと云ふやうな大騒ぎになつて参りました、爾うして北京保定間の交通は、之れが爲めスツパリ絶て了ひました、所が長辛店と云ふ所には、三十餘の外國鐵道技師及び其の家族もございましたが、又白牙義シンケートの本局もございまして、一寸外國人の一廓を構へて住居をして居ると云ふやうな所がございまして、そこで之を見當に、又彼の義和團の輩がワイ、と押寄せて來ました、仕方がないから此の白耳義などの外國人が、連も一通りで之を止めると云ふことは出來ないと云ふ考へから、保護の爲に持つて居つた所の小銃をハチ、と打出し、忽ち義和團を三四名打倒しました、サツするど益々彼の義和團の輩は憤り出して「サア片端から一人も残らざ打取つて了へ」と云ふので、槍太刀を提げて、其の外國人に向つて、既に大戦争を始めやうと云ふ景色になつて來ましたが、何分外國人は人數が少なうございまして、連も此の義和團の數百人を相手にして、勝たれやう筈がないから、此の難義は暫くの

間違えなければならぬと云ふので、直ぐに我が家は捨て了ふて、後ろに少し山がございませぬから、それへ指して逃げて了ひました、爾うすると後とは乱暴狼藉で、團匪の面々から打毀されて了ひましたが、幸にして翌の日支那の官軍が少々やつて来ました、それが爲にヤツとの事、命丈は助かつて、外國人も其の場所を引揚ぐることになりました、此の騒動が一旦寶台と云ふ所に聞かされたので、其處の停車場から汽車を發して、其の外國人の難儀を助けやうと云ふて、出掛けましてございませぬけれども、何分途中にも澤山の義和團徒が集合して居るから、トウ／＼其の目的も達せせして、引返したさうでございませぬ、

恰度是と前後に天津の方へも、義和團が起りまして、其の月日は能く覚えて居るが、何でも五月十七八日のことと覚えて居ります、天津の土根王某と云ふ城内の三義廟と云ふ所に、義和團が旗を押立てまして、其處へ祭壇見たりやうなるのを拵へました、サウして段々無頼の輩を集めて、何か騒動を起しさうの模様になりましてから、其の地の役人が直隸總督裕祿に此の事を届出でまして、何分穩かならぬ義和團の有様でございませぬから、速かに官兵を出して、此の無頼の輩を、團ん

で取押へて了ひたいものでございませぬと云ふことを、願つて見たけれども、どう云ふ譯でございませぬか、其の裕祿から許す所ではなくして、保甲局と云ふ所に居る兵を、三四名其の義和團の集つて居る方面に出して、却て義和團に妨げをせぬやうに保護を致されました、そこで義和團は、益々勢ひ烈しくなつて、是から先きと云ふものは、モウ此の義和團は官兵から保護される程の大事なものであると云はぬばかりの勢で、非常に集つて参りました、以前は斯様なことは禁せられてございませぬけれども、右申上げます通り、總督から官兵を出して、其の祭壇を保護してやると云ふやうな都合になつて参りましたから、二三日すると云ふと天津城の中には、十餘ヶ所の祭壇を設け、城の外には亦た二三十ヶ所も拵へました、サウして其の一ヶ所にどの位の義和團が集るかど云ふて見ますと、二百人集つて居る所もあれば、或は百人或は五十人と云ふやうに、毎日／＼頻りに殖へて参りました、

それで最初は立派な義和團と云ふ組織をして居つて、先づ無頼の中でも、可なり的人物でございませぬが、モウ斯うなつて來ると云ふと、渡世の出來ないやうな者は皆集つて、義和團／＼となつて参りました、サウして其の一ヶ所／＼には首

領見たやうな者が居つて、常に云ふには、前にも申上げました通り、義和團の拳法を三日學べば、必き戦争に出られる、其の戦争に出て戦ふ時には、必き敵の砲弾も身を傷け、渴ねんとする時には二件ばかり焚かるゝ釜に、初め米を入れて焚き始めると云ふと、食ふても、其の米は減らない、取れば下から次第に殖むて来ると云ふ法がある、又山東省の深山の中に、拳法の大先生の老師が居られる、曾つて一度山を降つて數多の人に道を教へた人であるが、此の人が千里を隔て居つて、願ひ事をして一々其の事が耳に達し、何事も其の深山中より御指圖をなさる、此の老師大師兄は一步あるれば六十里を行く、それで數萬里の遠い所と雖も、僅か十分間かそこらで、来やうと思へば、直ぐに來られるものであるなぞ、徒法途轍もないことを言始めまして愚民を迷はせ、それに持て来て祭壇が出來れば、出來るに従つて官兵の方から保護をしてやる、斯う云ふことになつて來たから、愚民は益々之を信じて暫時の間に數千の多きに及びました、初め此の祭壇を立てる時分には、先づおとなしくして餘り普通の人民に妨げをしなかつたが、官兵が保護して呉れて、此の義和團に力を添へ、人數は次第に殖むて來ると云ふと、第一之を賄ふ米、薪、先づ味噌醬油と云ふ物に至るまで足りない云

ふ騒になつて來たから、モウ其の祭壇を立て終ると、二三日過ぎて其處ら近傍の家毎に、餅とか或は麵類とか、一月に付て位の位と云ふものを、此の祭壇に供へよと云ふことを申付けまして、片端から腕力で取上ると云ふやうな風になつて來り、又少しく資産でもある者には、米或は金銀の類を義捐せよとか、寄附せよとか迫つて來ます、若し之を否と云つて拒むと云ふやうな事があれば、保護をしてやらぬぞ、保護をしてやらぬと云ふばかりではなくして、片端から打殺しかけると云ふやうな都合になつて來りました、夫れにも矢張り總督裕祿を首めとして、其の義和團を助けはするけれども、之を禁むると云ふことはしないやうになつたから、言はれ總督裕祿はモウ義和團の大將見たりやうになつて了つて、丁度其處此處へ總督が参りまするにも、俄拔兵など云ふ者は連れて行かして、此の義和團が自衛兵と云ふやうな都合になつて來りました、だから遂には愈々義和團が圖に乗つて、天津近傍に西洋風の家でもあれば、其の家に飛込んで何でも彼でも手當り次第奪取り、西洋店でも出して品物でもあれば、其の家に飛込んで何でも手了ふ、其の打毀して了ふと云ふのを、爾うさせないですれば、巨額の金を出さないで云ふと、許かぬと云ふやうな騒ぎになつて來て、實に天津城内非常の混雜を

極めました、
 所が此の義和團と云ふものは、度々申上げましたる通り所謂島台の人類であつて、兵器などを持つて居やう筈はございませぬから、斯うなる以上は戦争に相違はないが、兵器なしでは六ヶしいと云ふ考へから、其の首領の面々が、數多の者を引連れて、総理衙門に参りまして、サウして總督の裕祿と云ふ人に、「私共斯様に拳法を練り、數多の人を集めましたのは、疾に御承知の通り外國人を打拂つて了つて、我が大清國の四百餘州を、西洋人なしにして昔のやうな太平を見たいと云ふ所から、家も捨て妻子も捨て一命も捨つる覺悟で居りますので、何卒馬及び兵器等を御渡し下さることは叶ひますまいか、どうぞ斯うなつた以上は外國人を相手に、戦争をする」と云ふことは、免れますまいと存じますから、スワ合戦と云ふ時に此儘では逆も、彼等に勝つことは出来ませぬ、どうか此の儀を御許し下されたい」と願ひました所が、總督は「尤の事である、オ―好し」と云つて、直ぐに機器局と云ふ所に行つて、小銃やら大砲やら渡されました、それからこちら諸所の役場にある所の馬、或は其處らあつたりの有志者が持つて居る馬、ソノなものを取上げて、サア之を持つて行けど云つてやりました、

そこで此の義和團の輩は大抵びで、我が總督裕祿は我が爲には大恩人、我が爲の大總督であると云ふて、裕祿が出入りには必百餘人の人が警護をして、行くとき云ふやうな風になつて参りました、どうして裕祿は斯んな馬鹿なことをするだらうと云ふて見ますと、其の實此の裕祿と云ふのが端群王やら、且は剛毅など最も頑固な外人嫌ひの、支那では有力家の人々と互に相結んで、義和團徒の者は、決して國に不忠の者ではない、國家を思ふの大忠臣なるものであると云ふことを語り、一般にも左様に評判をさせて、其の實此の義和團を使ふて戦争の埋草にしてやらうと云ふの考へがあつたらしうございませぬ、そこで固より八ヶ國の聯合軍が天津に攻めて來るとか、北京に攻めて來るとか云ふことは、モウ此の時分からチヤと直ぐ支那政府の方では、覺悟をして居つたものと言はなければなりません、何うが、西洋各國及び我が日本國などを相手にして戦争しやうと思立つたのは、何うも馬鹿げきつた了簡でお話にもなりませぬが、是には又先生達に、種々考のあつた事なので、其の事實はイザ知らせ或る確かな筋から聞いて見ますと、全体支那が二十七八年に我が日本國と戦争をした、それで其の後先づ彼の國にしては、練兵等のことも十分改革をした積り、また西洋新式の小銃或は大砲等も、難儀の

中に大分集めて居りました、そこへ持つて来て日清戦争後露西亞國は、旅順大連
 灣と云ふ二ヶ所を占領したやうにし、英吉利國はどうかと云ふて見ると、威海衛
 と云ふ所を同様占領のやうな形になり、獨逸は膠州灣を取ると云ふやうな風で、
 先づ支那は此の獨逸英吉利露西亞から、少しづつ分捕りにあつたと云ふやうな有
 様になつて居りますから、支那の政府の大連中では非常に憤つて居りまするけ
 れども、戦争後金は無し兵は整はせ、機械も固より十分ならぬと云ふ所から恨を
 呑んで、露西亞及び獨逸の爲すが儘にして居りました、

四

所が丁度三十二年の事でござりましたか、能く覺なませぬけれども、伊太利國か
 ら露西亞、英吉利、獨逸國が膠州灣なり威海衛なり旅順口なりを借受けた、其例
 があるからそれに倣ふて三門灣と云ふ所を、伊太利國が占領しやうと出懸けまし
 た、サウして総理衙門に向つて我が伊太利國の便利の爲に、貴國の三門灣と云ふ
 港を、暫くの間借用したいと、全ヒ露西亞、英吉利等の筆法で申込みました、所
 が支那政府の総理衙門においては軍機大臣と云ふのが直ぐに會議をひらいて、各

大臣打寄りの席で、何と各々どうお考へでござるか、此の度伊國から我が三門灣
 を借受けたいと云ふことを申して來たが、日清戦争後、大連灣、威海衛、膠州灣
 等露國英國獨逸に占領されたと云ふではないけれども、先づ年限なしに借られた
 と云ふやうな都合、彼の時は日本と戦争後何事も混雜の最中で、其處らに手が及
 ばないから、マアどうでも後はならうと云うて、抛つて置いて、彼の通りにした
 事であつたが、モウ日清戦争の後と云ふものは、先づ我が邦の瘡も一寸癒たとい
 ふやうなものである、且又西洋各國より買入れたる所の小銃或は大砲のやうなも
 のも、大分集つて是丈けあれば戦争は十分やれると云ふ今日になつたのではござ
 らぬか、其處へ持つて來て伊太利國から又彼の三ヶ國の眞似をして借りたいと申
 込んで來たが、之をウンと返事したならば限りはあるまい、其處からも貸して呉
 れ、彼處からも貸して呉れと云つて、我邦慶しと雖も外國人の爲に分取りをさる
 るやうな事になつては、實に我邦の高祖に對しても相濟ぬことである、苟もお互
 に大臣の地位に居つて、之を思はざれば不忠此の上もなしと思ひますから、願く
 は一ツ大奮發をして此の度は刎付けて了ふて見ては如何でござるか』と申します
 ると、何れも至極御尤の事であると、一も二もなく賛成をいたしましたから、それで

は一ツ勿切つてやらうと云ふて、其の伊太利國から三門灣を貸して呉れいと云ふたのは、其の儘勿切つて了ひました、それで此の勿切つて了ふと云ふのは、三門灣の港は我邦に有用の港であるから、貴國の請を容るゝことは出来ないと云ふやうな返事を致しました、所が伊太利國はどう考へましたか、左様ならと云つたさうして、其の後再び貸せとも何とも言はずに、其の事は泣寝入りになつて了ひました、そこで三十三年の年になると、各大臣が集會して『どうだ、伊太利國から彼の三ヶ國の筆法を以て申込んだければ、我邦も稍々前途の準備も整ひ、精銳なる銃砲其の他の機械も揃ふたから、奴等も二十七八年に日本と戦争した時のやうに、支那は往かないと云ふことを、屹度考へ付いたに相違ない、眼が覺めたに相違ない、此の一例を以て外國人が、我が此の大國の勢に多少の恐れを抱いて居ると云ふことは分つたのでござらぬかと、第一是が此の度の聯合軍を相手にして戦ふと云ふ近因であつたらしう承つて居ります、斯う云ふ都合なので、北京政府の各大臣重なる役人は、総て外國を相手にして戦争しても、打負くるやうなことは容易にあるまいと云ふ考がへの所へ持つて来て、

裕祿總督から義和團と云ふものは賊に忠義なものである、國を思ふの念暫くも絶へず、外國人が居ればこそ此の四百餘洲も始終穩かならぬ有様になつて居るから、是れさへ打拂へば我が邦は天下太平であると云ふことのみ考へて、他に少しも野心はない、立派な忠義者であると云ふことを、屢々政府部内へも持込み、遂には西太后首め天皇陛下へも、此の事を奏上致しましたから、頑固なる端群王側らに居つて、此の裕祿が奏上せしことを、種々様々に辨を添へて宜きやうに申立てられましたから、天皇陛下はイザ知らせ、西太后は之を眞の忠義者と思ひ込まれて、不日王城守備にも此の義和團を召さるゝと云ふやうな有様になつて参りました、所で義和團の勢は愈々猖獗を極めて、日に／＼盛んになつて参りましたから、初めは左までの大勢でもなかつたけれども、非常に殖むて其處にも義和團、彼處にも義和團、此の總數早や幾萬と云ふ數を知らぬ程になつて参りました、所が裕祿が奏上したのは大反對で、義和團には今日の渡世も出来兼ねるやうな惡漢も、餘程澤山這入り込んで居りますから、其處には強盜を始め、彼處には火をかけて良民を嚇して、金を取るに云ふやうな騒ぎになつて来て、四百餘洲は此の義和團の爲に、稍々乱れんとするやうな有様になつて参りました、尤も四百

餘洲乱れんとすると一口に申しますけれども、或る方面には絶て義和團の居ない所も多かつたさうですが、先づ太沽から天津北京の方へは、非常なものであつたさうでございます、
 餘り斯様に暴行を働きましたから、支那では有名なる彼の總統武術前軍聶士成、と云ふは皆さん日清戦争でも、お聴になつたのでございませうが、是は提督と云つて、日本で申しますると中將でございませう、而して餘程豪傑でもあるし、支那人としては立派な人物、日本の武將にも餘り耻ぢないと思ふやうな品格を備へて居る者で、其の志も普通支那人とは餘程違つて居る者でございませうから、此の義和團が日々に暴行を働くのを見て、誠に義和團と云ふものは、我邦を害する賊に均しきものである、取りも直さず匪徒である、此の匪徒の輩を此の儘抛つて置くと思ふことは決して宜しくない、彼等は國を害するものと見た以上は、吾は軍人だに依つて是非之を打拂つて、良民を助けねばならぬのは、吾々の役目の當然であると思ふ所から、此の聶士成は義和團匪討伐と云ふことに決心をして居りました、
 そこで此の義和團の輩は、聶士成は外國人から餘計の賄賂を貰ふて、外國人に多

少心を寄せて居るなど、トンでもない事を言ひ始めました、そこで聶士成の部下に居る兵と云ふものは、強將の下に弱卒なしとは能く言ふたものでございまして、一同兵卒に至るまで餘程優れて、支那人の中としては豪傑が多うございませう、又志も素直でございませう、それで是等義和團の詔る所を、チヨイ／＼聴取りましたから、非常に腹を立て、我が將軍聶士成の人となりも知つて居らうに、外國人から賄賂を貰うて、外人と心を協せて我が朝廷に敵意を挟むなど、云ふは實に怪しからんことだ、全く是等は彼の義和團の徒から出たことに相違はない、聶將軍の言はれる通り此の義和團と云ふのは、表に忠義の名を見せて其の實は盜賊である、盜賊に類する國の害物を、此の儘抛つて置くと思ふは、全く總督裕祿の治め方が好くないと思ふので、此の總督までも一同恨みて居ると云ふやうな有様になりました、其の中に義和團の輩は、聶士成のことを悪ざまに云ふばかりではなくして、聶士成の部下にさへ會へば、既に打懸からんとするやうな勢でございませう、そこで遂に聶士成の部下と義和團と、端なくも黄村と云ふ所の附近で、ツタり出會ひました、所で義和團からボン／＼と打始めましたから、モウ斯うなる以上は、ヤア片端より此の國を害する盜賊に等しき義和團匪を打取つて了へ、

之を懲して良民に安堵させやうと云ふので、咄嗟の間に聶將軍は命令を下しました、そこでソラと云つて、待ちに待つたる聶士成の部下、忽ち進んで歩調を揃へ、彼處や此處に群がり居たる其の義和團徒に、頭も振らせ一直線に進み行き、ハッハッハッとして打かけたが、固より相手は鳥合の輩、彼の聶士成が率ゐる部下は、練りに練つたる真正の官兵、暫しも團匪は支へ得ず、ホウハの跡で逃始めました、ソラ逃すなど云ふので一命を下せば、此處をど數多の官兵、追駈け打立てましたから、僅か一時の間経たない中に、彼の義和團匪には一千有餘の死傷者が出来ました、此の時聶士成の部下にも多少の死傷は出来ましたが、是れはモウ僅か十人足らぬのでございましてから、提團をわけて聶士成の部下は、楊村附近まで引歸されました、此の楊村と云ふ所は、天津から五六里離れて居る所でございまして、然るに西太后には此の事を、誰が申込んだか聴かれました、聶士成は外國人に内通して、我邦の忠良なる義和團を討伐したとは、以ての外のことである

と云つて、思ひ懸けなくお叱りを頂戴いたしました、そこで聶士成は甚だ不快を感じて居りましたが、總統武術全軍榮祿と云ふ者が、聶士成に手紙を送り越ししました、其の寄越したる手紙を開いて見ますと、支那の俗文でございましてから、

私が不調法ながら日本人が見て分り易いやうにお話にして置きます、其の手紙の趣は

聶士成の部下に居る所の兵隊は、皆西洋各國の風を學んで居るのであるから、我が支那國の人民の見るところでは、外國兵ではないかと云ふ位に、チヨイハ見誤る所もある、それが爲に隙を開くに至り易いのである、義和團徒の者は報國と云ふの志にして、一同忠義の者である、そこで此の後義和團を討伐させると云ふことは、止められたが宜からう

と云ふやうな文章であつたさうでございまして、そこで聶士成は其の榮祿から送つて來た書面を見ると、フト大きな溜息を吐きまして「偕てハ總統武術全軍と言はれた榮祿は、既に簡様になつたか、彼の榮祿にして斯の如き考とすれば、我邦はモウ是れ切りだ、唯一人の榮祿であれば兎も角も、西太后よりお叱りを頂戴いたした所、彼れ是れ考へ合すれば、モウ我が政府は總て義和團匪を、忠義者と思ふて居るものと察せられる、聶士成が死する時は來れりと云つて、涙をホロロと流して、其の手紙を抛り棄て仕舞ました、暫し黙然として居られました、聶士成も大に決心する所があつたと見えて、直ぐに硯を引寄せてサッハと一封

の返書を認めました、其の返書も全しく支那の文章で、御婦人方にはチヨツとお
 分り悪うございますから、適はせながら私が翻譯を致して置きます、
 義和團匪は國を害ひ、民を害ふものにして大局を誤るものなり、小生不肖なり
 と雖も任を中將に受く、我が管内に匪徒あらば之を討伐するは、理の當然なる
 所なり、事定まるの後に縦令酷刑体制を受くるとも、之を避る所にあらせ、
 と斯様に書面を認めて榮祿の手許へ差返したさうでございます、而して聶士成は
 楊村と云ふ所を守つて、其の楊村近傍に右義和團の輩が出て来たならば、一人も
 餘さざるを打取つて仕舞う決心で居りました、それが爲に義和團は此の楊村近傍
 には、餘り集つても来なかつたさうでございます、六月十四日頃に英吉利の
 海軍中將シーモアと云ふ人が、聯合軍を引連れて、此の楊村まで進んで来られま
 した、此のシーモア中將が聯合軍を引連れて、北京の都會に進んで来るお話しは、
 又別項に悉しく申し上げまするけれども、聶士成のことに付いて一寸一日申し上げな
 いと云ふと、話の極りが付きませぬから、此處で一口申上げて置きます、其の聯
 合軍が天津から楊村に行かうとする道で聶士成の軍に出會ひました、聶士成は
 外國軍が無暗に北京を指して、此處を通ると云ふは甚だ穩かならぬ致方であると

云ふ所から、此處通行は相成らぬと云ふて留めました、それは何せ聶士成が、サ
 ヲ止めたかど云ふて見ますと、外國の兵が無暗に通行をするなれば、それを拒め
 よと云ふことは、即ち總理衙門から達が廻つて居ります、彼の總督裕祿からも申
 して參つて居ります、そこで聶士成は武装をしたる多數の外國兵は、無暗に此處
 を通すことはならないと云つて押止めました、けれども聯合軍は固より北京の公
 使館から非常の催促を受けて、モウ北京の各國公使館、十日とは持てないから早
 く接護をして呉れいと云ふことを頻りに云ふて来て居りますから、各國の兵を率
 ひて、其の公使なり或は居留民なりを助けねばならぬ任務があるから、急いで參
 る途中で、如何に聶士成が留むると雖も、打破つても往かねばならぬが當然の事
 であるから、シーモア中將は此の聶士成が止むるのを耳にも入れず、踏通らんと
 しましたから端なく合戦となりました、

五

そこで聶士成も直ぐに電報を飛ばして總督裕祿に此の事を知らせ、聯合軍に敵し
 戦ひを爲すのは宜しくないから、此處で退却をするものであらうか、此の儘戦争

をするのであらうかと云ふことを、申送りしました處が此の總督裕祿と云ふ人は、一向役に立たぬ人物でございますから、此の聶士成の電報を見て、何だか曖昧な返答をして、戦争をして宜いか悪いか分らないやうな返事が参りました、そこで聶士成も此の外國軍、聯合軍を打拂ふのは左まで六ヶしい事でもないが、此處で戦端を開けば、相手は八ヶ國、此の戦争には打勝てども、後には多數の聯合軍が進んで来るは、申送らないことであるから、今ハチ／＼と打出しはしたものの僅かの小競合であるから、此の儘此處を引上げて蘆台の方面まで、引上げるが宜からうと決心をして、既に蘆台に歸らうとばかりしましたけれども、如何にも蘆台にも行くに行かれぬやうな事柄が出来ました、そこで仕方なしに其の楊村を守つて、聯合軍が退けば之を追駆けて、此方から戦ひを挑むでもなく、進んで踏通らんとすれば、之を纏々と云ふ位にして、唯其の楊村の守護を嚴重にして居りました、前申上げました通り聶士成の率ゐる部下は、一同兵隊の訓練も二十七八年に我が日本との戦争後は餘程變つて、可なり日本明治七八年頃の兵隊位には出来て居りますから、ツイ聯合軍も之を打破つて通ることが出来て、天津を指して引返すことになりました、所が存じかけ

もないお話で、朝廷の方では此の聯合軍が楊村まで、進んで参つたけれども、北京の方へ進んで来る事が出来て、天津の方まで追返されて了ふた、其の追返したものは、彼の忠心なる義和團の輩であると云ふことに、誰が申込みましたか聞かしまして、朝廷から此の團匪一統に向つて、非常の功を奏したと云ふので、御褒美として十萬圓餘の金を賜はり、以後努めて外國兵を打拂へど云ふ、お褒めのお言葉まで下つて参りました、サウして十分功を爲したる聶士成には、お金どころの騒ぎぢやない、褒め言葉も賜りませぬ、而してトウ／＼六月二十日の日になつて、朝廷の方では義和團が此の位強いなればモウ大丈夫だ、我邦の官軍を是れに合して戦ひを交ゆれば、幾百萬の外國兵が攻めて掛かるとも大丈夫である、愈よ是から外國兵を打拂つて了ふと云ふことに、決心いたしましたが宜しからうと云ふので、忽ち二十日の會議にて、外國を相手に全く戦争をすると云ふことが、決して了ひました、それが爲に聶士成は、愈よ聯合軍に向つて戦はねばならぬと云ふことになつたが、前申上げました通り楊村の守備は、聶士成が十分にした爲に、聯合軍が踏通ることが出来なかつたのに、聶士成の方にはお褒めのお詞さい下さらせに、義和團の方

には非常の功を奏した、國家の忠義者であると言ふ褒め詞ばかりではなくして、十萬圓に超ゆるお金まで賜はりました位の事でございますから、聶士成の心中如何ばかり悔しかつたか、心中鬱々として唯一日も樂ませ、部下の面々も非常に恨みを含んで居りました、

所が此の會議が済んで聶士成に、外國兵に向つて戦ひを交わると言ふ朝廷からの遣は、どうして来たかと言ふて見ますと、愈々外國人を打拂ふと言ふ會議が済んで、既に其の會議の場所から、思ひ／＼に歸らうとする所へ持つて来て、太沽砲台は既に八ヶ國の聯合軍から、攻落されたと言ふことが朝廷の方へ聴かされた、此の太沽砲台の陥落のお話は、全しく別項に申上げまするけれども、是も聶士成に關するお話を一寸申上げないと云ふと、理が約りませぬから、斯様に一口申上げて置きます、

此の太沽が陥落したと云ふことが聴けたから、朝廷に於ても非常に驚いて、是は大變だと言ふ所から、何分外國兵は侮れない、先づ之を面の當り防ぐには、聶士成が居る所が一番近いから、之を第一に進めなくてはならぬ、其の上聶士成は有名の大傑であるからと云ふので、此の聶士成に外國軍に向つて戦へと言ふことを

申達しになりました、心に快らざる聶士成は、外國兵と戦争をなせよと言ふお達しが来たから、一層落膽しまして聯合軍と戦ふのは決して宜しくないと言ふことを屢々上官の人にも申し、既に榮祿にも紙面を與へて義和團は國を害するの徒、之を討伐せねばならぬと云ふことも申送つて、聯合軍に敵對するは國の爲に、宜しくないと言ふことは屢々申したのに、遂に斯う云ふことになつて来たか、泰山の覆らんとする時に一木を以て支ゆべからと云ふ語がある、此の聶士成が如何に一人志を別にして、我が朝廷に向つて諫言するとも、モウ今日に至つては益ないことである、我が死するの日は將に近くなつた、モウ是れ迄だと、此の時から聶士成は即ち戦死の決心を致しました、

而して朝廷の達であれば、拒む譯にはいかぬから「委細承知いたしましたと畏つて楊村を踏出し、天津の方へ向うと云ふことになりましたが、實に此の聶士成は不幸な人はありませぬ、聞くも涙の種子でございます、其の實聶士成は大忠臣で、支那の全國を思ふの心深く、我が此の支那國も一變して、西洋各國の風を學ばされば可けないと云ふ所から、日清戦争後は頻りに兵隊訓練等も、西洋風に倣ふて居つたのに、毎度も朝廷に向つて言ふ所が容れられず、頑固黨の面々か

ら、押付けられてイヤながらも、聯合軍と戦はなければならぬやうな事になりました、其の聯合軍と戦ふのは、マダしもの事、楊村を出發して翌日の事、聶士成の家には彼の義和團の楊村で聶士成から擧られた輩が、數百人押寄せて聶士成の家を、滅茶くくに叩潰しました、而して家にある品々は何でも彼でも手當り次第に奪取り、あらう事か妻子家族等が残つて居りましたのは、どうなしたのか先きは分りませぬが、其の儘縛めて此の義和團匪が、無理無残に引立てました、聶士成の母親は八十三歳にして、其の折病氣に罹つて、モウ今日の命も覺束ないと云ふやうな有様であつた、其の人までも縛めて、歩行が出来ないから手を引摺つて往つたさうでございます、

そこで此の事を聶士成に誰か「大變でございます、貴所のお家には、義和團の輩が這入り込んで、お家は滅茶くくに叩潰し、奥さんや和子様、お母さんまで縛めて引摺つて参りました、早くどうか爲さらないと云ふと大變だ」と云つて注進を致しましたから、其れは實に大變だと云ふので、聶士成の率ゐる所の部下は、大に驚きまして、此の乱匪の奴等を撫斬にしやうと云ふ有様で、聶士成自からは進まないが、部下が堪り兼ねて飛出し、其の義和團徒を追撃すると云ふことになり

ました、丁度此の傍らに練軍の兵が居りました、此の練軍と申しますのは、聶士成の部下ではなくして、彼地には兵隊に種々の名があつて、練軍とか奉天軍盛宇衛とか、種々の名が付いて居ります、其の一の名ある、聶士成部下ではない他の一群の兵隊でございました、

其の練軍の兵が、聶士成の率ゐる軍隊は反逆を起した、外國人に心を協せて居るから、我が義和團の忠臣を討伐に掛つたなどと言立てました、ワーワーと騒立つてた所は宜かつたが、其の中此の練軍の兵の中から「チ」と二三發小銃を打出した、サア二三發打出したから「チ」と云ふので、漸う「此の義和團徒の盜賊に均しき奴を擧擲はんとして居る聶士成の部下の軍の横側から、此の練軍の兵がワー」と一同に打立てて攻立てましたから、是に氣を得て今逃げんと致した、聶士成の家を荒したる義和團が餘つて、又打始めましたから、遂に聶士成の軍は内外前後から、敵を引受くることになりました、サア思ひがけなく意外の戦ひになつたから、聶士成も仕方がなく、自から僅かの部下を引連れて、其の方面に進んで戦争を始めましたけれども、此の時にはどうも練軍の兵も殖えて来るし、義和團は彌が上に集つて参りましたから、聶士成の方は非常に死傷者が

出来ました、そこで必死となつて働きましたけれども、遂に聶士成其の身も十餘ヶ所と云ふ創を受けました、尤も此の十餘ヶ所と云ふ創は、多く槍創のやうなものが多かつたので、命には別條はなかつたけれども、斯様な有様になりましたから、聶士成は十分の勝を制せしめて、其處を引上げなければならぬことになりました、

六

斯様な譯でございしますから、聶士成は形勢日に非を加へると云ふ今日になつた以上は、モウ早や是までの話である、内には朝廷に我を眞事とせられ、外には義和團の爲に讒言され、天地廣しと雖も早や我身を容れる所なきに及んだ、嗚呼と云つて幾度か大息をされました、實に此の聶士成の事を考へますると云ふと、残念の至りでございします、聶士成も既に戦死をするると云ふ位の覺悟を極めた程の内乱でございしますから一通りのことでなく、モウ天津と北京との汽車も往復せぬやうになつて了ひました、そのみならず各停車場は焼拂ひ、或は役人を打殺すと云ふやうな騒ぎになつて來たから、如何なる西太后も是には少し首を傾け

られました、どうも義和團と云ふものは一同國の忠義者と思ひの外、左様な事があれば眞正の忠義者とは言はれない、速かに兵を繰出して、其の怪しきと認むる者は悉く生捕り、若し其の証據が得難いと云ふものであれば、家宅搜索でもして見よ、家宅搜索をして停車場内にある品物でも隠し居るものがあれば、それを証據として悉く處刑に決してよろしからうとの仰せでございしましたから、軍機大臣の榮祿は直ぐに數百名の兵を繰出し、馬家堡より豊台の方へ遣はしまして、何處も彼處も村一杯家宅搜索を致しました、所がヤツと八名の犯罪人がございしましたので、直様斬罪に處せられました、然るに琉璃河と云ふ所に又義和團の輩が、非常に暴行を働くと云ふことでもございしましたから、其の方面にも段々兵を繰出して見ました所が、成程大分の義和團が群つて居ります、此處に居りました者は皆紅布を腰に懸けまして、年のころは先づ二十歳前後でございします、それに棍棒や太刀のやうなものを持つて、其處には火を放ち、彼處には人を殺し、汽車を打毀す等、言語同断の有様、琉璃河の上に架つて居つた鉄橋も半ばは、打毀はして居ると云ふやうな工合でございしましたから、是等を生捕らんと致しましたけれども、此の義和團の輩は取られる暇もなく、八方に逃散つて行術が知れなくなりまして

から、直ぐに歸つて此の事を西太后に奏上致しました、
 そこで半ばは義和團徒は國を害するの賊と言ひ、半ばは義和團徒は矢張り國の忠
 義者と云ふ議論區々になりました、其の中に敬親王と云ふお方が、進んで言ひま
 するには、斯様な義和團徒の暴動を働くことが、西洋人に及んで、耶穌教徒とか
 何とか云ふ者も殺されたと云ふことで、近日外國兵が、當北京の都を指して押寄
 せ来らんとする有様になりました、萬一是が事實として現はると日には、由々敷
 大事と思はれますから、一時も早く此の義和團徒を取鎮めないと云ふと、恐れ
 ながら陛下の御身の上も、如何であらうかと考へます、如何に我邦廣くして兵
 數多しと雖も、世界各國の兵を引受けては道理に於て勝たれぬことと思ふ、若し
 戰つて破れを取るやうな事になれば、それこそ取返しのならぬ話であるから、
 是非一ツ此處ではどうあつても、義和團徒なる者は鎮定するやうに致したい、穩
 かに之を鎮めて彼等が肯かない時には、モウ止を得る兵馬を繰出して片端より討
 伐するの他はあるまいと考へます、何れもどうであらうかと、申されますと云
 ふと、暫くの間誰一人も口を開くものはなかつたが剛毅と云ふのが、元と榮祿の
 片腕と頼む人物であるが、名が剛毅でございしますから矢張り非常などうも強情

な者、のみならず頑固でございします、最も西洋人などは嫌ひな男でございしますか
 ら、其の敬親王の申されました言葉に反對を唱へて、何と仰せになりましたも義
 和團徒は忠臣者に相違はない、彼等が頭には國家を重んじ、外人を打拂ふと云ふ
 の外には何にもないので、是れが我邦の真正の忠臣と言はねば、他に忠臣と云ふ
 者はあるまいと考へます、と申立てますと云ふと、軍機大臣榮祿の片腕と頼ま
 れた剛毅でございしますから、随分此の方には加擔者が多うございしました、それ
 からは何と申しても一口も敬親王の意が立たないやうな有様になりました、併し
 西太后も熟くお考へになりますと云ふと、何分どうも是まで義和團を忠臣と
 とは言て居たが、其の彼等が爲したる痕跡を見れば、立派に分つて皆暴擧の模様
 でございしますから、是非とも一度は鎮壓する方が宜からうと云ふので、遂に義
 和團徒は総て剿討すると云ふことが議決になつて、愈よ義和團徒は悉く打拂つて
 仕舞うと云ふの上諭が出るやうになりました、所が直様兵を繰出して此の義和團
 徒を打拂つて了ふであらうと思ひの外、又四五日経つと云ふと乃ち御所の便殿に
 於て會議を開くと云ふことになりました、
 其處で各々其の便殿に集り、會議を始められました、一旦義和團徒は國を害す

るの賊であるから之を剿討する、外國人に暴行を加へて、外人の兵が北京に這入つて來るの虞があるから、一時も早く鎮壓すると云つて上諭まであつたのに、如何なる事か又決して彼等は國を害するの賊と云ふものではない、其の實忠君愛國の徒である、此の間敬親王の申されたのは、唯外國人の兵が都を指して這入つて來る虞があるからと云ふので、一旦彼れ義和團徒を剿討すると云ふことに、決議は致したかなれども、今や我が此の大清國は二十七八年の戦争後は、機械も揃へ兵勇も能く訓練し、世界廣しと雖も我が清國の兵數に較ぶれば外國は皆地狭ふして人少なし、然らば五ヶ國や六ヶ國聯合して、我に敵するとも決して適ふの理にあらざ、然つて見れば彼等が都を指して攻寄するを虞るゝなどと云ふのは、所謂杞憂と云ふものである、要らぬ心配と云ふものである、そこで是非此の義和團徒と云ふ者には朝廷から力を與へて、或は銃砲機械を與へ、其の他彼等の便利になることを出來得る限り與へなば、他日は賊に有要の兵となるであらうなど、其處からも此處からも義和團徒を助けると云ふ方ばかりの議論で、此の日の會議には敬親王は遂に口を出されぬやうな有様になりました、併し敬親王と云ふお方は、凡そ今日の世上を見通して居られる方でございました、是非此の大清國も大改革

をしたいと云ふ議論を、一二度は持出された程の人でございますから、此の大多數の人が義和團徒を忠臣と云ふにも拘らざ、決して忠義の者ではない、宜しからぬ一時烏合の暴徒であるといふことを述べられました、何分過半数どころではなく、會議の席にありあふ人は、大概義和團徒は忠臣と云ふ方に賛成を致しましたので、トウ、敬親王の御意見は水の泡となつて了りました、水の泡となつたばかりならばセメテもでございしますが、遂に敬親王は總理衙門を御退きにならねばならぬやうな事になつて退いて了りました、其の跡にはどう云ふ人が這入つて來たかと言ふて見ますと、敬親王が總理衙門をお退になると、當時一番頑固黨の張本、義和團最負の統領とも言はれる端群王が敬親王に代つて這入りました、そこで此の端群王が總理衙門に這入られて後と云ふものは、總て一人も此の義和團徒を悪く言ふ者はなく、愛國忠君此の四字より他に知らないといふ義和團徒なりと云ふて、徒法塗轍もないことを言出して、遂に義和團徒は王城に這入り込んで、西太后教師をお招きになり宮中に於て、例の拳法を練修せしむると云ふやうな騒ぎで、西太后のお側付の面々、太子までも之をお學びになると云ふやうな譯になりました。

實に是等は皆軍機大臣榮祿、此奴が初から義和團徒を操つて已の便利にしました、抑も是が初りなのでございませぬ、此の端群王が還入られた後は、モウ義和團徒は清國官兵と、同一体と云つて差支ないやうになりました、それ等の証據は董福祥と榮祿と其の者の往復した書面やら何やら、他に段々ございませぬ、是等は餘り諒うなりませぬから、マア抛つて置ませぬが、先づ是までが義和團の起因、且彼が暴行を致しました荒増のお話でございませぬ、そこで是れから又一寸お話を變つて参りまして、愈々各國の水兵が北京の都に還入る所からお話を致します、

七

借て前申上げましたる通り頗冥不靈の團徒は、斯様なる勢になりましたに依つて、モウ次第く川合から都を指して参つて、遂に皇城の在る北京迄大分餘計に這入つて参りました、這入つて來ればかりなら宜しうございませぬが、相變らば亂暴狼籍をやりませぬ、そこで列國の公使は支那の政府に向つて、義和團徒が餘り暴行を働くに依つて、是非是が鎮定をして貰ひたいと云ふことを迫られましたけれども、何分此の支那の政府と云ふものは西太后が仰せになる儘にやつて居ります

るから、西太后が義和團徒を宮中にお招きになつて、教師として拳法を絶え宮人までもお母ませになることと云ふ位のこととございませぬから、其の他政府の重なる役々までも此の義和團徒の面々、其の主義が大概同じ事になつて居りましたので、却つて其の義和團徒の暴行を悦んで居るやうな有様でございませぬ、そこで却々列國の公使が幾ら迫つて見た所が、其の列國から申込んだことを何とも云ふ模様はございませぬ、そこで列國の公使は堪り兼ねて、其後一向に政府に向つて非常の意氣込みで申込まれました、是には如何なる頑固の支那政府も、お前方の要求は拒絶しますとは、申すことも出來ないやうな模様になりました、そこで仕方なく巡視五城御史と云ふ役の一人に言付けて、サウして禁令と云ふものを出しましたけれども、此の禁令と云ふのは文字は立派なものを列べてございませぬけれども、唯それを書いて方々に貼出したと云ふやうな事だけ、其の禁令の通りに實行すると云ふことは一寸もないのでございませぬから、其の義和團の輩は其の貼出しを尻とも思ふては居りませぬ、そこで益々義和團の勢は盛んになつて、モウ五月の月末頃になつて來ますと云ふと北京近傍の電信線を打切るとか、或は人を撲るとか、偶には叩殺すとか云ふやうな工合で、資産でもある家には、

行きなり飛込んで唯食ひをすると云ふやうな、實に何ともお話にならぬ言語同断の振舞になつて來ました、唯それ丈の事なれば兎も角も、追々外國の人が北京の町へでも彼處此處歩くと云ふと、拳を擬して拳法で叩殺して見るとか、何とか云ふやうな變な真似をして見せる、と云ふやうな勢で、どうも穩かならぬ有様になつて参りました、

そこで外國の公使は又集會を致されました、是は逆もどうも此の儘にしては置かれぬ、何れ遠らき此の義和團徒は、北京でも事を起すに相違はない、天津の方はどうなつて居るかと思ふて、此の中から人を出して段々様子を探して見ると云ふと、愈々天津の方も穩かならぬ有様、先達ては大に戦争をやつたと云ふ噂だが、此の戦争は未だ列國の兵と戦うたのではないさうだが、何にしるどうも穩かならぬ事であるから、用心に國亡びせと云ふこともあるから、兎も角も此の北京にある所の公使館には、若干の水兵でも公使館守備の爲に、早く呼んで置く方が得策ではあるまいか、と云ふことで或る公使が申出しますと、固より是に同意をせぬ人は一人もない、滿場一致で直ぐに其の事に決しました、然らば一通り、此の北京に各國の水兵を呼入れると云ふこと丈の交渉談判を致さねばなるまいと云ふ

ので、而して支那の政府に向つて、義和團徒暴行を働らくから鎮定をして呉れと云ふことを要求した所が、禁令を出されたのみで一向其の禁令の通り、支那の政府は實行をしない、幾ら書附を出した所が書附の通りに行はれなければ、貼出した所で何の効もないから、モウ逆も支那の政府から此の暴動を鎮めると云ふことは出来ぬものと認むるので、吾々共の公使館及居留民等を守護の爲に、外國公使館に水兵を呼寄する筈であるから、此の段をどうぞ承諾して貰ひたいと云ふことを持込みました、

サウした所が支那の政府は之を聞いて俄に驚き、是は大變な事である、若し此の都へ指して外國の兵が澤山這入つて來るやうなことになるれば、此の義和團徒と戦争を始むるは申す迄もないことで、して見ると云ふと敬親王の言はれた通り山々敷大事と相成る、是れては大變だから一時も早く多少の兵を出して、公使館を守ることにしてやらうと云ふ大膽きになつて來て、サウして列國の公使に返事を致しました、其の返事をする時には、モウ僅かばかりの支那の兵隊を繰出して、各國の公使館に守護見やうにさせて置いて、サウして支那の政府から云つて來たのには、此の北京にある所の外國人の守護は朝廷より督つて其の任務に當り

ます、そこでどうぞ列國の兵を此の北京に入れられると云ふこと、是は、氣の毒なからお許しが出来ませぬと、斯う云ふて参りました、けれどもモウ各國の公使は全く兵を呼入れると云ふことに、電報を飛ばしてございますから、ナカクソソな事では各國の公使の意思は動かない、是非呼ぶと云ふことになりました、サッするど色々様々な事を申して、決して御心配には及ばぬ、御心配になるやうなことはならぬ、杯言ひましたけれども、モウ此の時に及んでは各國の公使は耳の許にも寄付けを切切つて了うて、トウ／＼向ふの方へ斯様な返答を致されましたさうでありませぬ、其の返答は

吾等は自國の兵士を以て、自國民を守るべし、敢て總督の勢を煩はさるるなり是丈の返答を致されました、そこで支那政府は初の勢とは打つて變つて、非常に驚慌でバク／＼騒ぎ出しましたけれども、此の時になつて幾ら騒いでも仕方はございませぬ、此處にも議論彼處にも議論、百方議論が始まりましたけれども、仕方なしに詰りは各國の兵が北京に入ることを、承諾すると云ふことの返事を支那の政府から送つて参りました、

サウするとモウチャンと其の前に電報を飛ばしてございましたに依つて、直標北京

を指して太沽沖の軍艦から、各國の兵が北京を指して這入つて参りました、此時太沽沖に来て居りました各國の軍艦と云ふものは、大分餘計でございましたけれども日本では砲艦の愛宕艦と云ふ船が、一艘来て居りました、此の日本の愛宕艦と云ふ艦は、二等砲艦で噸数が六百十五噸、速力が十二海里、馬力が七百と云ふので至つて軍艦としては小さいものでございました、小さいから其の乗組員も少ない、そこで日本の方は餘計の兵を北京に送ることが出来ませぬ、尤も愛宕艦乗組員を悉皆やれば大分居られますが、愛宕艦を開放しては置かれぬことは分り切つた話でございますから、ヤツと海軍大尉の原種雄と云ふ人に二十四名の水兵を付けて、それにモウ一人將校が付いて、都合二十六名行かれることになりました、

所が英國の軍艦は二隻来て居りました、米國の軍艦が一隻、それから伊太利の軍艦が一隻、それから獨逸國も一隻、それから露西亞は六隻来て居りました、佛蘭西國が二隻来て居りました、そこで此の艦の多い所は割合に兵が餘計に行くことになつて、英國が士官が三名に兵が七十九名、米國が士官が三名に兵が五十三名、それと大砲二門、それから獨逸國が士官が一名に兵が五十一名、伊太利國が士官

が二名で兵が三十九名、露西亞國が士官が二名で兵が七十二名、それに砲が二門、佛蘭西國が士官が三名に兵が七十五名、埃太利は士官が五名で兵が三十名と、斯云ふ割合になつて、之を合計しますると、士官ばかりが二十人で、水兵の数は四百二十三人と斯うなります、

そこで是れ丈の兵を直ぐに北京に送ることにはしまして、鐵道局に往つて特別に列車を出して呉れと云ふことを相談しましたけれども、北洋總督の命令のない以上は特別に列車を出さぬとか何とか云ふて、どうしても唐沽から出させぬから、止を得ず白河と云ふ河、九十九曲りあると云ふ河でございます、其の河に船を浮べて、それからやつと上つて天津に上陸しました、サウして天津で特別列車を出して呉れと相談したが、是も全しく總督の命令がないから列車を出すことは出来ないと云つて、グツ／＼しました、非常に迫つた爲にトツ／＼五月三十一日の午後四時に始めて、向から出すと云ふ返事をしたから、其の午後の四時三十分と云ふに天津を乗出して、サウして例の馬家堡に着して、總て公使館に這入つて一同護衛をすることになりました、丁度此の天津に降りました時に、天津にも幾らかの水兵を留めねばなりません、どうも日本は僅か二十四名の水兵、八

八

ヶ國の中で一番兵数が少ない、それでどうも北京にやるのでも不足位のことであるから、之を分けて天津に置くことば萬々六ヶしい、仕方がないから天津の騒動は眼に見えて居りますすけれども、抛つて置いて往かねばならぬから、天津には兵を留めまして、一同北京を指して這入つて了ひました、

所が此の水兵が這入ると同時に、天津と北京の交通は立どころに一切絶れて了ひました、固より初から汽車の往復は出来ないうやうになつて居りましたけれども、其の時分に義和團匪が打毀したと云ふ鐵道線路は、僅かに少部分でございましたから直ぐに修繕を加へて、日に二三次は通ふやうになつて居りましたけれども、モウ此の水兵が這入つて了ふと同時に、モウ悉皆方々を打毀はしたから全く通はない、電信も餘程遠廻はりをしないと云ふと、天津にも太沽にも通信が出来ぬやうな有様になりました、そこでモウ此の事が直ぐに日本の陸軍省、海軍省にも通じになりましたから、陸海軍の兩相には、即ち彼の重要命令と云ふものが降りまして、事体愈々容易ならせと云ふことで、又軍艦が出ることになつて、其の後日本

では笠置艦、吉野艦、高砂艦、須磨艦、常盤艦、鎮中艦、鎮遠艦、陽炎艦、發雲艦、不知火艦、隼艦、龍田艦、是等の船艦が出るやうなことになる、陸軍の方も繰出すと云ふことになつて参りました、然るに此水兵が北京に参りました後、段々事体切迫になつて、モウ今にも戦争が始つた、イヤ天津は破れた、北京の公使館は壓しにあつたなど、種々様々の所謂瑩語が聞かされて参りました、容易ならぬ有様でございませうから、此の太沽沖に来て合せて居つた各國の艦隊では會議が始りました、其の會議の模様はどうかと思つて見ますると、六月五日のこととてございませうが、午後の三時三十分を以て英吉利の軍艦モンチエリオンのシーモアと云ふ中將、其の人から音狀を列國の艦長に返りました、其の書面は左の通りでございませう、

議啓、北京天津間の總ての通信は義和團に依りて絶れたり、列國公使は爲に孤立の位置に陥り、各其の本國政府若くは此の錨地(太沽)に於ける、艦隊と通信すること能はざり、而して余等當時列國軍艦專任將校は、公使と連絡の途なきを以て共に會同をして、此の事件に關し議せんと思ふ、

予は現在の海軍專任將校たるを以て、以上の事件を諸君と共に議せんとするの

望す

議案を提出す、各位賛成せられれば本日午後四時本艦に來艦せられんことを希望す

マア一寸斯様なことでございませう、序ながら一寸申して置きますが、此の書面とか文通とか云ふのは、多少私のお話に文字の足らない所やら、或は少しく簡單にして御婦人方に分り悪いやうな所には、多少の文字を加へてある所もありません、大体の事實に於ては決して間違はない積りなのでございませう、どうぞ其の邊は悪からせ思召を願ひます、

そこで斯う云ふ事を云ふて参りましたが、何れも同意でございませうから、其の通りにモンチエリオンに集りました、其の集られた人々は、英國海軍中將サーエドワード、シーモア、それから佛國の海軍少將クルヴォール、露國の海軍少將ウエツシヨラエー、米國の海軍少將ノエケムフ、それから獨國の海軍大佐グーリヒ、日本國海軍大佐永岸光季、それから伊國の海軍大佐フリガトーガセリヤ、奥國の海軍大佐、此の奥國の大佐はトーマンフオンモンマルと云ふ人でございませう、

ましたけれども、此の日は少し差支があつて代理に海軍少佐の方が参りました、そこでシーモア中將は原案を提出致されました、其の原案を會議に提出して、此

の人々の賛否を問はれました所が、其の原案通り滿場一致を以て、左記各項を決議致されました、

- 一 吾々は同胞の生命及び財産を保護するを以て目的とす、平和的防禦状態を取らざるものなり
- 二 吾々の本國は目下清國政府と平和を保つが故に、決して清國政府に對して進軍するものにあらざ
- 三 今回進軍の目的は通稱義和團の名稱を以て、清國政府を轉覆せんとする有力なる反徒を討伐せんとするにあり
- 四 反徒の勢力にして政府よりも強きに於ては生命財産を保護せんが爲め左の策に出でざるを得
- 一 清國政府に知照して反乱を鎮定すること
- 二 清國政府にして反徒を討伐せざる時は列國自ら討伐すべし
- 五 吾々の行動は左の如くなるべし
 - 一 各國公使の希望に従ひ、或は其の同意あるべきこと
 - 二 今や外國一般の利害に關する場合なるに依り、共同一致事に従ふこと

六 前條第一項は列國公使北京間遮断せられ吾々と交通し得ざる場合にあらざれば違反すべから

七 此場合に於ては吾々専任將校は時間あらば、本國海軍上官に諮るべし

八 事体切迫し本國に知照するの暇あらざる時は、吾々協議して策を決すべし

九 吾々は明日午後十時再び集會すべし

是が條目でございましたが、丁度此の會議が斯様に纏りました時に米國の海軍少將が又進出でられました「一寸一言申置たうございませう、必要の場合に於ては各國幾千の兵數を出すべきを定むること、之を私は原案の中に提出致したうございませう、如何でございませう」と申されました所が、是れ又滿場一致を以て愈よ議決になりました、

然るに此の時分前申上げました八ヶ國の兵と云ふものは、迄の位は出されると云ふことを、先づ面の當り極めて置かないとならぬから段々と其の後討議になつて、北京の方にも四百二十八と云ふ兵が出て居る、天津に四百四十一人出て居る、併し此の天津に出て居りますのは、日本兵は加つて居りませぬ、けれども其の後北京に往つた後是非と云つて、天津から申して参りましたから、幸ひ笠置艦が

着ましたので、其の笠置艦の中から七十二人程出してございます、それを合計して四百四十一人となりました、けれども埃太利は此の天津の方には、一人も出して居りませぬ、それから又必要があれば上陸をさせても宜しいと云ふので、所謂陸戦隊を以て戦はせるのでございませぬ、それは先づ米國を除いて七ヶ國の兵で九百六十一人丈は、何時でも上陸をさせられるやうなことにになりました、サウすると佛蘭西國は、又一週間以内に三十八人位は其の方に増して出すことが出来る、獨逸國も軍艦の所在地に電報を打てば、是も亦二百人位は出されると云ふ、露西亞も旅順口からやつて来る積りと云ふやうな風になつて居りました、米國も一週間以内には二十五人位は出されると、マア斯んなことで、逆もどうも艦の數が少なうございませぬから、一同集めて見た所で兵は至つて少なうございませぬ、そこで其の日は退散をして、又翌の日昨日の會議の決議通り、集られました、サウして其の昨日の會議の事項に一同連署を致されました、サウして又シーモア中将の言はれまするには

本官は北京駐劄英國公使より、更に七十五人の分遣を要求するの電報に接したり、然れども此の電文の意味は、實に七十五人を北京へ送り越せよとの要求な

りや、將又必要起らば之を送るべきやを確め見る迄のことなるや、シカと判然せせ、之を問合するには長時間を要するが故に、取り敢て七十五人の海兵を天津に派し、更に公使の訓令を俟つこととせり

斯様なことを申されました、サウして夫れて諸事纏りが付きました、それから又埃太利の艦長が申されますには、其の兵員を天津に上陸せしむるの準備既になりたれば、希くは艦内に留めしめて上陸せしめたり

斯様な事を申立てられました、サウしてどうぞ之を許可せられたいと云ふことを、言はれましたので、是にシーモア中将から許可を致されました、シーモア中将から許可せられたと云ふて見ると、列國は英國の部下のやうに見えますが、それは御婦人方に一寸お分り悪うございませぬから申述べますが、全体的に此の聯合軍と云ふものになつて見ますと、大將、中將、少將、大佐、中佐と居られますと、先づ大將が其の聯合軍の總大將になり、大將が居らなければ中將が總指揮官になる、併し中將が列國の中に三人も居ると云ふと、一番早く中將に任ぜられた其の年月の古い人が、其の時の大將軍になると云ふのが、世界萬國の

極りてございますから、此の時はシーモア中将が一番先任の將校でございますから、何も彼も此の人が指揮をすることになりました、是れとても自から好んでなつたのではなくして、総て各國から之を推して総大將にしたのでございます、是は餘計な御話でございましたが、又亞米利加國の海軍少將のケモックと云ふ人が、又申立てました事は、各國海軍將校は、其の同胞を保護するに必要と認むるならば、他國の將校に謀らせして其の兵員を上陸し得べきことにせん、又斯様な事を一ツ申立てました、所が是れ以て何の異議もなく、全しく滿場一致で決議になりました、其の他に又獨國の海軍大佐も出られまして報告して申しまするに

太沽附近の河にあるイルチスは諸艦の將校等全体を援助し且つ及ぶべき限り其の請求に應じ、水兵を上陸するの準備を爲し居れり、斯様に獨逸國からは申されました、そこで何れも大悦びて異議なく此の會議はスツバリ纏つて了ひました、それから英國の海軍中將彼のシーモア、此の人が天津にある所の英國領事から電報が悉りましたから、一寸之を朗讀致しますと云つて

讀まれました其の電報が

昨日人民護術法を製する爲め會議を開けり、護術の爲め強勢の援隊派遣請求の決議通過せり、本官は之に以て極めて必要の議決と認む、然して自働的敵對の手段を執るの許可を得ることを強請す、我等の自働的地位は此處一時は一時より、危険の地位に至らしむ、本官は公使に發電せるも、其の連絡の相通ざる迄は何時間俟つべきやを知らせ、

斯様な譯であるから本官が更に兵を、天津に派遣せしは、此の電報の結果であると云ふことを申されました、此の事は前に七十何名兵を出された其の事を此處で明かに述べられた譯でございます、

九

そこでシーモア中将はモウ不日北京に向つて、一部の海軍兵を率ゐて往かねはならぬと云ふことは、此の時からモウ覺悟をして居られました、彼れ是れする中に愈よ北京の方にも、義和團徒が澤山やつて来て、モウ各外國人の家屋でもあると、打毀すとか火を放るとか、モウ取圍んで戦争を始めるとか云ふ、種々雑多の評判

をして参りました、而已ならず太沽からは直接に電信はございませぬが、大變起
 廻りの電報から、愈よ北京も事体切迫と云ふことの報知がございまして、各國公
 使館も危ういと云ふことであるから、各國の兵をシーモア中將が率ゐて、北京を
 救ひの爲に出發致さうと云ふことは畧々極りました、就ては此の北京各國公使館
 及び義和團徒の模様を、是から又お話し申上げますから、一寸お話が二筋にな
 るやうでございまするけれども、是れは日にちの順序を追ふてお話しせば、此の
 北京の方を是れからお話申して、それからシーモア中將の北京に向はれる途中の
 戦争と云ふ方になりませぬと、餘程お分り悪いだらうと存じまするから、是から
 北京のお話懸ります、
 北京と言へは固より申す迄もない支那の首府、即ち王城のある所でございまする
 が、前々申上げました通り、義和團徒日に北京の方へ集つて参りまして、モ
 ウ殆ど満員になりました、サウして各國公使館のある所の近傍へ、最も多く集つ
 て来て、種々の暴行を働きますから、迎も唯ては濟まない、兎も角も奴等と云う
 せ少々の戦争をやることはモウ明かである、分り切つて居る、して見れば此の二
 十四名の海軍兵ばかりでは、如何に團匪の奴等とは言ひながら、賊に飢呑である

から、兎も角も此の公使館に居る所の者は、一同集つて海軍兵と一緒に軍人とな
 つて、働かねばなるまいと云ふ議が起りました、尤も此の前六月の七日であつた
 か八日であつたか、何れ両日の中には相違ございませぬが、各國の公使館の會議
 と云ふものがございまして、其の公使會議にはどう云ふことがあつたかと云ふて
 見ますると、萬一の場合には公使館に立籠つて、其の義和團徒を防ぐと云ふこと、
 且は其の指揮官を誰にしやうか、と云ふこととございまして、英國公使のヤク
 トナルド氏に其の指揮を頼まうと云ふことが極つて、北京の各國公使館は一同籠
 城と云ふことに極まりました、籠城と云へば城があるやうだが、城ではございま
 せぬ、所謂公使館を假りに城とするのでございまして、此の會議の翌日であつたか、
 又各國公使館守備隊武官の方々も會議がございまして、それはどうかと云ふて見
 ますると、戦争をするには兎角武官の計畫でないかと云ふと可けないから、其の籠
 城に付ての計畫等の會議でございまして、日本の方では砲兵中佐の柴五郎と云ふ
 お方が一人と、それから前申上げました海軍大尉の原胤雄と云ふ人、此の二人が
 其の武官會議に列席を致されまして、段々と意見をお述べになりましたが、此の
 日本武官二人の意見通りに定つたさうでございませぬ、

そこで愈々萬一義和團匪が攻めて来る時には、此方から打つて出るのではなくして、公使館の家に閉籠つて彼等を相手に戦うと云ふことに極りましたけれども、今にも申上げました通り城にはないから、戦争をする爲の防禦線と云ふものは、固よりございませぬ、そこで種々様々の物を持つて来て、其處にも立てる此處も鎖ぐと云ふやうなことで、マア小銃の弾位は一寸避けられる位のことになりました、た、所で義勇隊を組織されたのが、即ち左の通りの人員でございまして、

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|--------|------|-----|-----|-----|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|-------|------|
| 中根師人 | 川上季藏 | 若杉彌平 | 大和久義太郎 | 小川量平 | 林良茂 | 杉山彬 | 鄭永邦 | 西徳次郎 | 石井菊次郎 | 徳丸作藏 | 野口多内 | 西郡宗三郎 | 岡正一郎 | 大西平吉 | 大野直喜 | 狩野直喜 | 竹田菊五郎 | 村井啓太郎 | 山本七郎 | 中村秀次郎 | 川上貞信 | 渡邊友吉 | 大迫半熊 | 小貫慶治 | 服部宇之吉 | 兒島正一郎 | 檜原陳政 |
|------|------|------|--------|------|-----|-----|-----|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|-------|------|-------|------|------|------|------|-------|-------|------|

義勇隊と云ふと成程立派な名義ではあるけれども、軍人の方から見れば、餘程さうも不完全な義勇隊、何せかと云ふて見れば、ホーイ取締と云ふ人もあれば、留學生もあり或は植木師も居れば、寫真屋も居る、且つ理髮師も居れば、電燈會社の工夫と云ふやうな人も這入つて居る、それに語學教習と云ふやうな方、好い所では文學士とか法學士とか云ふやうな人も這入つて居りますけれども、之を軍人とするには、餘り法學士だとか文學士だとか云ふ者は適當とは言はれませぬ、そんな人の皆集りてございますから、マア号令と云ふものは、軍隊の原則通りに悉く行はれたものでもないから、先づ銃と云ふものは斯う云ふ工合にして打つ、遠ければ之を斯うして狙ふ、近かければ之を斯うするとか云ふ位の、ホンの簡單なる小銃の打方位のこと丈を教へさせて、而して陸軍大尉の安藤辰五郎と云ふ人を、其の義勇隊の隊長に致されました、此の安藤歩兵大尉は、さうして此處に来て居られたかと云ふて見ますと、此の義勇隊の出来る一週間ばかり前に、フトヤ

- | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|-------|------|
| 松本幸八 | 小寺梅吉 | 杉幾太郎 | 古城貞吉 | 平野守信 | 木村徳次郎 | 望月東涯 |
|------|------|------|------|------|-------|------|

つて来られました、此の人は前途有望の人で、其の抱負もナカ／＼大きな方でございまして、自分の費用を擲つて支那に参つて、サウして支那の事情を探り、少しく支那語の研究でもしやうと云ふ趣意のことに付て、願つて自費で来て居られた人でございまして、そこで普通の陸軍大尉位で、サア休職になると云ふやうなお方とは、餘程違つて何事も能く出来る人でございましてから、幸ひの事に之を隊長と致されました譯でございす、この義勇隊の出来ましたのは、何でも八日か九日かのことでございまして、他に歩兵大尉の守田利遠、陸軍一等軍醫の醫學士中川十全と云ふ人も居られました、

そこで義勇隊の中から川上貞信、山本謙七郎、此の二人の人は中川軍醫の手傳人即ち助手と定められ、守田大尉は水兵の指揮官でございすから、柴中佐は水兵、義勇隊此の両方を合せた、全体を指揮されると云ふことになりました、それで中川小川此の両氏の夫人等も居られました、其の夫人は同じく中川軍醫の助手或は炊事の世話をすると云ふやうなことはなつて、大概是れで籠城の手續も揃へました、

ところで皆々打寄つて「サア、モウ斯う出来上つた以上は、何時たりともやつて

来い、折角斯うやつて何事もなかつたら、馬鹿／＼しいから、一戦争でもやりた

い』など側で申されますと「イヤ是れが水泡に屬するやうだつたら、是れに過ぎたる幸福なしだネ」など云つて、戦争をしたいと云ふ人もあり、願うならば戦争にならなければ宜いと云ふやうな人もあり、一時は随分どうも城内も賑か

ございまして、所がモウ九日頃になつて来ますと云ふと、此の義和團徒の輩も、邊の日に劍を提げて居る奴もあり、銃を持つて居る者もあり、其處らわたりの街路を勝手次第に徘徊致しますすけれども、支那の官兵——王城附近の門を守つて居る支那兵は、義和團徒の輩には、神變不思議の術があるとか、何とか云ふて、それを恐れて居るのであるか、一寸も其の晝日中に武器を携へるどころではなく、劍を抜身で持つてゐるものも、之を咎める景色はございませぬ、そこで益々義和團の輩は勢ひ烈しくなつて、誰れ憚る景色もなく非常な勢ひで居りました、然るに萬一のことがあれば、籠城と云ふことには極まりましたけれども、何分日本公使館の内と云ふものは、餘程手狭でございすから、此の海軍水兵、義勇隊一同を容れると云ふことは餘程難儀でございす、それで我が日本の公使館と、程近い所に筑紫辨館と云ふものがございす、それと台基殿と云ふ所に、森海軍中佐の

大丈夫、居ながら水兵の来るのを待つて居ると云ふことがあるものか、是非行つて来やうと云ふので、杉山君は直ぐに馬車に打乗つて、從僕を連れて立出でられました。

十

而して北京外城の南の方にある永寶門と云ふ所を通らうとしますと、門を守る兵が『待て』と云つて、其の杉山君が乗つて居られました。馬を引止めんと致しました、そこで此れは不可いと云ふので從僕は『是れはどうも旦那危険でございます、斯うな處をお通りになつては宜しうございませぬから、サア御引返しなさい』と申しますと杉山君は『馬鹿なことを言ふな、上官の命令山より重しだ、何程の事やあらん、是非此處を通らう』と云つて馬に鞭打つて其處を通り過さんと致しますと、全く門は出て了ひました、偕て其の門の外に出ると云ふと前に申上げました甘軍の馬隊、バラ／＼と十名ばかりもやつて参りました、サウして何とも言はせ行成りに杉山君を其の馬車の上から引卸し、門外の石橋のある所に左に道がございしました、其の方に引張つて行くが早い、どうも無

二無三にと斬かけました、ヤレ残念と杉山君は、必死となつて之を防かんとすれども、何を云ても唯一人、何うも仕様がございませぬから、遂に彼等が爲に哀むべし杉山君は、殺されて了ひました、サウすると從僕は、其の殺される様子は認めませぬけれども、何れどうも旦那は殺されるに違ひないと云ふことまで認めましたので、彼れは其の場所を飛で引返して、此の事を公使館へ『サア大變でございませぬ、私の旦那は斯様、斯う／＼云々でございませぬ』と息急き切つて報告致しましたから、スワ大變だ何れも色を失ひ暫く爲す所を知らせ、何としたなら宜からうかと云ふ中に、依田と云ふ人が一人居りました、此の依田と云ふ人は、元々何でも三井銀行あたりに従事して居られた人らしうございませぬが、其の人は支那語が出来ますから『ドリヤ、乃公が一ツ往つて様子を見て来やう』と云ふもので、支那服を着してサウして例の支那人の様子に身を交し、偵察旁々行つて見られました所が、モウ全く殺されて永定門と云ふ所の外の道端に、杉山君は深くもあらせ、埋めてあるのを確かに認め指して這入つて来る時には、之を是非拒め、之を打取れと云ふことは、支那の朝

廷から董福祥に命令が下つて居つたさうでございます、そこで董福祥は彼の甘軍に申付けて、永定門を守らせて居つたのであつて、全く此の杉山君の殺されまし
たのは、支那政府から殺されたも同様と云ふことが分りました、
斯様な有様になりましたから全く義和團匪ばかりではなくして、官兵も外人打拂
ひと云ふことに同意いたして、官兵と團匪との混合隊で以て戦争を始むるに相違
ないといふことを、各國公使館は決心を致しました、さう云ふ決心を致したから
には、防禦線と云ふものがなくてはならぬ、此方から打つて出ることには無論出来
ないから、攻め来る時の用心に、防禦工事を始められました、併し防禦工事と云
つた所で工兵が居るでもなく、俄かに支那の工夫を雇ふとした所で、斯う云ふ騒
ぎに来る者は無論ないから、水兵諸君義勇隊諸君、それに其の義勇隊の妻君連中
も、一緒に手傳をして、在合ふ所の種々の障礙物を持出して、それで俄かに敵の
攻入らないやうに致されました、固より公使館内に之をしたのではなくして、公
使館の外に肅親王府かございしました、それと東交民巷が、前申上げましたる通り、
公使館のある所でございしますから、其の肅親王府とそれから東交民巷と、我が公
使館の前適當の場所に、敵を防ぐの用意を致して、サウして晝夜怠りなく、それ

を守つて居ることになりましたが、十一日から十二日にかけて、其處にも火が起
り、此處にも火が起り、是等は皆義和團の輩が、耶蘇教堂とか何とかを焼くので
ございしますが、其の耶蘇教堂ばかりでなくして、金満家の家にも火を放け或は銀
行などにも火が移つて、實に此の北京の町は非常な迷惑な事になりました、平生
の火事なら之を消しもしまするけれども、斯う云ふ有様で、モウ戦争半ば同様で
あるから、誰一人此の火を消す者がなく、十三日と云ふ日になつて来ますと、
モウ愈々形勢が切迫になりました、今にも戦争を始めさうになりました、丁度此
の夜は舊曆の十七日に當つて、月夜で明かでございますましたが東單背牌と云ふ北燈
市口兒と云ふ方面から焼始めて、火の手益々盛んに相成りました、それが爲に其
處らあたりは一面の火事となつて、誠に物凄く有様でございます、而して埃太利
の公使館方面に當つて、パチ／＼モウ銃聲が聞え始めました、そら此方にも攻め
て来るぞと云つて嚴重に構へて居つたが、此の夜までは我が防禦線までは、敵が
攻めて来る模様もなくして、トウ／＼其の夜を明しました、
所が支那の政府から、杉山書記生の死骸を渡すから受取りに来いと云ふことを言
つて参りました、それで此方の方から鄧君と今一人外に参ることになつて居りま

したか、其の他の一人の人は至急に用事が起つて、鄭君一人行くことになりました。所がモウ其の日の時刻が通いから、どうしても死骸受取りに出て行きます。其の夜はどうしても其の永定門外に一泊しないと云ふと、歸れない都合でございませぬから、一同が打集つて「オイ鄭君、君一人死骸受取りと云ふことは實に窮乏だネ、彼ら云ふ有様だから——又君も油断をされると、杉山君同様なことになりはしまいか、是れ丈は止めにしてはどうだ」と云ふて勸める人がございまして、現任杉山君の死骸を渡すと云つて居るのに、受取りに行かぬと云ふ譯にも往かぬから鄭君は「何に構ふものか、殺されたら夫れまでの話、是非行かなくては死したる杉山君に對して、吾輩は相濟まぬ、是非行く」と云つて決心をして既に出かけやうとする所に、又総理衙門の方から使者が参りまして、先刻彼の通りに御通知を致したけれども、何分義和團徒が大勢集つて、死骸を渡すことはならぬなと云つて、拒みまするから、此方の方で其の杉山君を収めた其の棺は、或る廟の中に葬るからお受取りのを見合せて下さい、と云つて参りました、そこで數多の人々も「是りやア鄭君、却つて君の爲には仕合せであつた、迎も斯う云ふ有様だから、往つたら歸れまいと思ふて、非常に心配して居つたが、

マア好い捕梅だ」と云つて此の時は何れも大悦びを致されました、實に鄭君は幸運なことでもございました、其れから十四日十五日となつて來ますと云ふと、其處にも戦争が始り、此處にも戦争が始る、それに例の通り團匪が石炭油を以て晝日中に、彼方此方を徘徊するど云ふやうな工合で、耶穌教徒の面々と見たならば、片端より打殺す、モウ實に何とも申しやうのない騷動になりました、所が十六七日になりまして、我が防禦線の方面にも迫つて來たから、そら來た打て——と云ふてバチ——と打出す、米國公使館の方は大砲をズドン——と打放し、快砲をズン——と打出し、白牙義國の公使館の方にも始つた、彼れ是れする中に埃太利の公使館に火が付き、白牙義國の公使館にも火が移りました、サア大變だと密つてかゝつて、之を消し止め懸つたけれども、ナカ——どうも消止むる譯には行きませぬ、トウ——其處らは焼けて了つたから已を得せ、是等は米國內英國内の公使館の中に、引揚げて這入らなければならぬと云ふことになりました、斯様な騒ぎになりましたので、モウ天津と北京との間の通信と云ふものは、何も彼もサツパリ絶て了うて、汽車の往復は申す迄もなく、天津迄も通ひませぬから、

郵便などの通ふ筈もなし、支那人と雖も漫りに通行は出来ぬと云ふやうな有様に
なつたから、天津がどうなつて居るやら、北京の方ではサツパリ分らぬ、天津の
方では北京の様子が一寸も分らぬ、天津の方では北京はモウ早や一同殺られて了
ふだらうと頻りに心配をして居る、北京の方では天津の方が若し悉皆やられて了
ふて、或る方面に敵が澤山繰出して居れば、此方へ聯合軍の進んで来ることは、
逆も十日や二十日のことではない、サウすれば縦ひ此處で敵を防ぎ止めまして居
つても、モウ今から數十日の日を経過すれば食物がない、所謂糧食が欠乏だ、サ
ウすればモウ逆も吾々火を懸けて了つて、妻子は殺して自殺をするより外仕方が
ない、實に此の時の北京城内にある所の人々は、生きて居る心地は致しませぬ、
何ともお話の例へやうはない苦しい場合になつて居りました、然るに此の騒動の
少し前中島と云ふ書記官が、日本に歸られるに付て林良茂と云ふ人が、天津の方
へ送つて往つて居られました、サウして天津に暫く留つて居られたが、流石に林
良茂と云ふ人は、年久しく支那に遊んで居つて餘程の支那通、どうしても初めて
遭ふて居ると日本人と見る者は一人もない、風采容貌一体の舉動に至るまで丸で
支那人でございませす、そこで支那人でも決して日本人と見る者はなく、北京の附

近にある所の者は、一同林良茂と云ふ人は日本公使館に、支那人が使はれて居る
ものと言嘯して居る位の人物で、未だ四十歳にならぬ若い人だが、妻君は支那人
を迎へて、何でもモウ十歳以上の男子まで産んで居られる位の人であるから、首
尾よく天津から歸つて來られました、
そこで始めて天津の方では、英國の海軍中將のシーモアと云ふ人が二千ばかりの
兵を率ゐて北京の方へ、鐵道の毀はれた所を修理しつゝ進んで來られる方針であ
つたけれども、ナカ／＼それが思ふ儘に行かぬ、日數が大分長くなつたから、汽
車のない爲め歩兵大尉の橋口勇馬と云ふ人が、糧食欠乏して居るから其の糧食を
持つて來やうと言つて、天津から引返されたけれども、鐵道も其處此處毀れて居
る爲に、それ等の事も十分出來上らぬに、途中は賊にシーモア中將の率かれた軍
兵、非常の難儀で居ると云ふことも大畧分りました、

十一

此の林良茂と云ふ人が探偵に付て、一寸お話が後戻りをするやうでございませす
れども、一口お話を申上りますが、元と鄭領事が天津に居る其の天津の家は中島書

記官を送つて往つて、暫く滞在をして居られました。此の時分依田と云ふ人が、杉山書記生が殺された後、北京を出て、サウして天津に行つて、北京が斯うな事になつたが、何分水兵は少なし、義勇隊と云つても僅かなものであるから、長くは持てない、一同國の爲に戦死をする、と云ふ決心で居る、義和團匪の今日の振舞は斯うな事だ、支那の政府の方針は斯う云ふ都合になつて、義和團匪と一緒になつたなど、細なことを話しましたから、林君は杉山君が殺された「そりやア大變だ、君の話を聞けば一々どうも驚くの外はない、斯うなつた以上は吾輩一ツ意を決して、是れから北京に往つて見やう」と申されます。依田君が「イヤ、ナカ、往けるものか、幾ら君が支那通と言つても、何を言ふても日本公使館に居つたから、純粹の支那人と奴等は見て居つても、日本公使館に使はれて居つた者と云ふことを、萬一一人でも見知つた者が居つたならば、決して君は其の儘に通しはせぬ、通さぬばかりならどうでも宜いが、殺されるぞ」と言はれます。林君は「何の構ふものか、何處へどうして居つても死ぬ時は死ぬ、死生命ありぢやアないか、死生命ありと云ふことを知つて居る以上は、男子たる者がヒクシヤ

クして居られるものか、其の上に北京公使館がサウ云ふ窮境に陥つて居るのを知りながら、是非之を救はざれば他人はどうでも可いと云ふ考へを有つて居る林君も君が知つて居る通り、どうか斯うか支那語が出来るから、北京を出て是までやつて来たが、途中で二度ばかり酷いめに會つた、併し幸に團匪が少數であつたから、蹴散してやつと逃げて来ることは来たが、今度は僕の來た時分より、モウ事体餘程切迫になつて居るから、到底行かれまいと思ふ、けれどもサウ云ふ決心なら行きたまい」と云つて互に前夜酒などを酌んで、お別れを致しました。サウすると此事を鄭領事が聞いて「それでは此方の様子を彼方へ行つたらば、必老細かに申して呉れ斯う云々」と、天津の事柄を細かに語られました。天津のことば、一寸お話申して置きましたが、猶ほ精しいことは天津戦争の方で、お話し申上げます。

愈よ林君が其の天津を出立いたして、北京を指して立たれましたのは、何でも十三日頃でもございませうか、風呂敷包に一寸した着替のやうな物を包んで、支那の或る町の町名と、それから住所と、自分の姓名を支那人にあるやうな、宜

い加減に書いて、サウして出立を致されましたが、天津から北倉を経て揚村と云ふ邊に來られますと、忽ち義和團匪にボックリ出會はれた、義和團匪が「オイ是ら、一寸待て——」と言ひましたので、「何を御用でございますか」「知れたことだ、用がなくて誰が留めるか、一体貴様は何れの者で、何處に行くのだ」とお極りの通りに尋ねかけました、固より覺悟をした林君であるから、一向恐るゝ景色もなく「私は北京でございます、北京の東交民巷近傍に居る者でございしますが、天津の方へ米を買ひに参りました、唯今歸りがけでございます、何だ、天津に往つて米を買つた、天津で米が買へたか」「イヤ、モウ往つて見ました所が、どうも大變な騒ぎで、外國人が大分入込んで居る、それには我邦の兵隊さん方が、澤山出て居つて、今にも戦争が始りさうの模様でしたから、米買ひ所の騒ぎぢやアなく、自家のことも氣に懸りますから、今急いで歸る途中でございます」と例の北京口調で語られますと云ふと、「どうも此奴、おかしいな、何だかあんなことを云ふけれども、斯う云ふ騒動になつて居る所を、米買ひに往つたなと云ふからして、餘程怪しい、それに大膽不敵に、吾々共の斯うして居る所を、ノコノコやつて來るのは、ひよつとすると外國人の間者かも知れない」と囁きながら、「と

うも貴様は、姿は我邦の者に相違はないが、どうしても二帽子のやうだ、大帽子から使はれてる者ぢやないか」と言て詰問します、此の大帽子と云ふ事は外國人の帽子が大きいから、外國人一般を指して支那人は大帽子と申します、二帽子と云ふのは日本人も外國人の帽子を真似して冠つて居ると云ふ意味から、奴等が言出したものぢやうでございす、斯様に問題けられますと云ふと、林君は、ニコニコと笑つて「何にソソな事があるものでございますか、私を眺めて二帽子とは、貴所方も眼が開いて居りながら酷いことを仰しやるナアハ、ハア」と云つて笑ひますると云ふと「兎も角も暫く待て」と云つて三四人居つた中の一人が、少し離れて家がございしました、其の家の中を指して這入つて、二兄師に「斯様くゝな者が通りかゝりまして、斯様な返事を致しましたが、どう致しませう」と尋ねました所が其の二兄師、即ち副統領とも云ふやうな人が出て参つて「貴様は唯今北京の者で、天津に米買ひに往つたと申したさうだが、愈よそれに相違がないならば、一通り何も彼も検査するか其處へ出せ」と云うて、其の風呂敷包から何から開いて見て、検査ましたけれども、別に怪しいやうなものもなく、固より手紙等を持つて居やう筈はない、初

から斯んな事はわらうと思ふて居つたから林君一寸もぬかりませぬ、其の中に林君は『どうてございますか、此の風呂敷に書いてある文字が、斯様く〜でございませぬ、是でも私は二帽子でない、全く北京の者と云ふことは、お分りになりはしませぬか』と申しますると、流石どうも副統領次で、旨く行きませぬ、『馬鹿なことを言ふな、貴様が日本人であるから、斯んなことをして居るだらう、文字は誰でも書けるのだ、是れで疑を晴らせと云ふことがあるか、ソんな馬鹿なことは出来ない、其處に財布がある、それを此處へ出せ』と云つて金を入れて居る物を調べました、

そこでそれをバラ〜と引ッ繰返して在る丈の金を出すと、何でも五六十圓這入つて居りました、其の中に日本銀貨が大分這入つて居りました、是れはどうも林君氣が付かなかつたものと見えて、それをどうかして居つたら宜しうございませぬ、其の日本銀貨が這入つて居つたから、それを指して『ソラ、どうだ、此の日本銀貨の這入つて居る所を見れば、全く貴様は二帽子だ、日本人だ、汝れ人を今迄馬鹿にして、此處を通らんとした曲者である、サア縛め——』と云うてバラ〜と押寄せて、繩を懸けやうとするから林君、お待ちなさい、私は逃げ

も隠れもしやさせぬ、一通り謬を聞いて下さいませ、私は日本人でないから、斯んな金も持つて居るのちやアございませぬか、日本人なら斯う云ふ物を持つて居りませぬ、縦ひ持つて居つても、どうかして來るのが當り前でございませぬ、米を買ふには一寸日本人を相手にして買ひますから、日本銀貨は始終取りやりますと云ふことは、貴所方も御承知でございませう、それに之を持つて居るから二帽子だ、日本人だとは、それは餘り酷いぢやございませぬか、若し御不審でございませぬ、私の所まで何方か付て來て見て下さいませと云ふと、明かに分ります、就いて下さつたら其の旅費から一切のことを私が致しますから、どうか御疑でございませぬ、御苦勞ながら一緒に來て下さいませ、『何に、勝手なことを吐かす奴だ、貴様が尻に付いて行く馬鹿が、何處の國に居るものか、どうあつても此奴二帽子に違ひない、日本人でなかつたらならば日本人の間者だ、幾ら何と云ふても決して此處通すことはならぬ』と言ひつゝ其の金を皆取上て了ひました、取上げて了つたばかりなら宜しうございませぬ、夫れぎり何とも言はせに、其の横にあつた大きな柳の木に持つて往つて、括付けて了ひました、サウして其の副統領見たやうな奴は『追付け沙汰をするから、其處へサウして繋いで置けよ』と

云つて往つて了りました、さしもの林君も「モウ是れ迄だ、斯うなつた以上は仕様がな、成程今にして思ひ合すれば、依田君が云ふたのは間違がなかつた、固より自分も死ぬると云ふ決心をして来た、死生命ありと云ふことは知つて来て居るから、是れが自分の命數と見ゆる、斯様な所で縛められて、奴等が爲に殺されるのも天命だ、併ながらどうも女房子供は定めて、此の事を聞いたなら、非常に歎くであらう」とさしものに悟つて居られた林君も、女房子供と云ふことには、餘程心を残されたと思ひ、縛められながら思はせホロ／＼と涙を溢して、實に哀れの有様となりました、

彼れ是れする中に、モウ日暮れ近くなつて参りましたから、モウ日の暮れるのを待つて、奴等は已を殺すたらうと決心はしたものと、どうかして此處一ツ免れたい、此處免れて北京に歸つて、天津の様子を報じた後なれば死んでも厭はぬが、志を達せぬ中途にして殺されると云ふは、如何にも残念なことであると、思ふて居られまする中に、遙かにブローンと一發砲聲が聞えました、サウすると此の林君を警護して居る二人の團匪が「ヤー、砲聲が聞へた、大帽子の奴等が此方にやつて来たかネ、外國人が彼りやア打出したのかネ」「何に味方だ、味方が打つ

のである、外國人が打たれるのだ」と互に話をして居りましたが、其の砲聲が一發聞けたと思ふと、續けざまにブローン／＼と鳴り始り、纏てすると云ふとバツバツ／＼と小銃の音が聞えました、近ければボン／＼と言ひまするけれど、距離が遠ければバツバツ／＼と聞えます、そこで其の側に居た二人の奴等が「ア小銃の音が聞けた、併し大分彼りやア遠いぞ、餘り近いことはないぞ」と云つて居る中に、纏て其の小銃の音がバチ／＼と聞ゆるやうになつて「ハテナ、大分近くなつたぞ、彼のバツ／＼と遠方に聞ゆる奴は、大帽子の方で、バチ／＼と云ふのが味方から打つのであらう」「成程さうであらう」と二人の奴が頻りに語つて居るから林君は「どうぞ彼の音の近い方が聯合軍の方であれば宜いが、若し聯合軍が此處へ迫つて来るやうであつたなら、萬に一は我が一命助かるかも知れぬ」と神に願かけて、どうか一命を助けて下さいと、此の時ばかりは一心不乱に念じて居られました、

所が纏て大砲の音がブローン／＼と至つて近から聴けたから、是りやア大變だと二

人の奴も少し周章たやうな景色でございましたが、其の向ふから支那の馬隊が三人でツツツと馳を一生懸命に飛してやつて参りました、やつて来て其の統領の居る家の方に来るが早い、大きな聲を張上げまして「唯今外國の聯合軍が、我が軍の方へ迫つて参りました、之を打拂はんと致しますけれども、聯合軍の兵數が餘程餘計でございますから、唯今あり合ふ所の我が人數では、逆も之を防ぎ止むると云ふことは、餘程難儀と見えます、或は防止むることが出来まいと思ひます、それで一時も早く此處に集まられたる、方々は一人も残らぬお出で下されと云ふことでございます」と息させき切つて申しますと、其の家にありはう副統領も云ふやうな者が、「スワ大變だ、片時も猶豫はならぬ、サア来い」と何か喇叭見たやうな物を吹いて、數多の者を呼出しますると云ふと、其處からも現はれ、此處からも現はれ、総勢三四百ヤラと揃ふて参りましたのは、皆義和團匪ばかりでございまして、そこで人數が揃ふと直様、馬隊に向つて「汝我軍の居る所に案内をせよ、サア何れも行け」と言ひさまに、其の大將らしき者が、數多の者を引連れて行かんとする其の時に、柳の木に繋がれたる林長茂君を眺めまして、其の警衛をして居る二人の奴等が「お大將、此處に繋止めまし

たる者は如何致しませう、此の儘投つて置きませうか」と申しますと「イヤ、成程さうだ、今の騒ぎでそれには氣が付かなかつた、其奴生して置けば面倒だ、今間違ふて我邦の者で有たにもせよ、何分怪しい所があるから、後日の虞がないやうに、疾く斬つて了ふて行け」と一聲高く申したから、林君「サア、モウ是迄だ」と決心を致しました、そこで二人の警衛の團匪は、怪しき太刀やうのものを提げて、繋ぎ止めたる林氏の邊り間近に進み来る、此の時遅く彼の時早くズドンと一發聞けたる其の大砲は、傍らに林長茂が繋がれし、右の柳の木にボンと打當て、ズドンと破裂をした爲に、今に林の首を斬らんと致す二人の團匪は、破裂の破片に身を打たれ、ワーツと一聲叫ぶと共に、一同に二人が倒れました、餘りの事に林君首を上げて、扱はどばかり驚きました、又一發ズドンと飛び来る砲彈は、天の祐けか神の救ひか、繋がれました林氏の、身体を去ること、三尺ばかり、柳の幹に砲彈は、ズドンとばかり當つてから、柳をボツキリ打折りました、それと同時に林氏は、一二間程此の勢ひに、畑の中に刎飛ばされて、一時無性となりました、そこで在合ふ團匪の奴等は、林氏早や死したりと見て取つたか、此處長居は刃呑だ、サア行け急げと、馳足してハヤと往つて了ひましたが、此

の騒ぎの足音で、林氏は一時悶絶して居つたけれども、フト気が付いて見ますると云ふと、柳がボツきり打折られて、繋ぎ止めたる其の繩は、切れたるなりに、一畑の中に其の身は一人轉んで居りました、「ヤー、是れは夢ではないか、未だ斬られては居ないかと、自分の頭を動して見て、確かに已は生命がある、して彼の警護の團匪の奴等は、何處に居るかと思返れば、先刻飛び來し砲彈の破片に打たれて二人の死骸、他には一人の團匪も居ない、是れ幸ひと林君、縛められし其の儘に、一生懸命此の所を、飛ぶが如く逃出しました、固より北京へ行く道は、屢々往來して居れば、大道小道の隔てなく、能く記憶して居られますから、本道よりも此の小道と、畑に添ひし側道を、夢中になつて飛出したが、日はボツソリと暮れましたので、道の様子も能く知れば、畑の中を無茶苦茶に、行くこと凡そ一里ばかり、さしもの林長茂氏も、身体疲れて行なりに、ハツたり其處へ倒れました、苦しい息をホツと吐き「ヤー、先づ命は取止めだが、實に酷い目に遭つた」と漸々其處に息を入れて、暫く思索して、どうか此の繩を一つ解かなければならぬかと、縛めの繩を解かうとすれども、左右の腕は後ろに廻つて居りますから、人頼みでないといふと云ふと解けない、それを暫く後手に解きかけましたが、先刻

大砲で柳の木を打折つて、刎飛された時分に、多少緩んだものと見えて、トウ／＼其の繩が好い塩梅に、抜けて了ひました、そこで始めて林君我れに返つて「ヤー、是れで有り難い、モウ斯うなつたら大丈夫、サア、モウ一辛抱して見やうと立つて見たが、森のお飯を食つたばかりで、夕の飯は未だ食べませぬ、それに以て來て纏て二里近う一生懸命素走りに走つて來たので、大變腹は空いて、眼が眞ッ闇になつて、ナカ／＼どうも思ふやうには、足が掛りませぬ、けれども命に替へる寶なしで、頻りに其處を急いで本道に出られますると云ふと、婆アの奴が子供を二三人引張つて、其の騒動を避けると云ふて定福莊とか、塔連坡とかに行くと言ふて居りますから、好い道連れだ、それと一緒になつて參られました、途中で一寸温飢見たやうな物を出した店があるから、それで漸く飢を凌いで北京を指して歸り懸けられました、所が宿屋にでも泊りたいが金がない、何としたり宜からうと思ふて居つた中に、ヒョツと気が付きまして、金着を探して見ると、未だ三四圓の金が這入つて残つて居りました、「ア、是れは忘れた、是れがわつたら好い塩梅だ、今宵は此處に泊まらうと、或る所に一夜を泊られますと、其の宿屋にも義和團の奴等が、泊つ

て居りました、そこで是りヤア此の義和團の奴等が泊つて居るに、隠れて居つては可けないと云ふので、自分の方から挨拶をして泊つて見たが、其處には今の二兄師連中が泊つて居つたから、普通の團匪とは違ふて、少しはおとなしうございませす、貴様は商人か「左様でございます、大變などうも騒ぎになりましたナ」「サア、吾々共は彼の外國の奴等を、片端から打拂つて了ふて、此の四百餘洲を太平にしやうと、思立つた者であるから、汝共は十分我邦の爲に、金を出し米を出して、商人ならば義和團に寄附を致せなと云つて、誇り顔に義和團の謂れなどを、語つて聞かせました、

そこで林君はそれ等に種々話をして、此處では旨く支那人に成りすまして、又明日の日出立を致されましたが、楊村で酷い目に遭された後は、先づ無事で北京に近く泰られました、モウ北京を去ること、稍々一里半ばかりの所まで来られますと云ふと、楊村で酷い目に遭ひ途中を素走りに走つて来られたので、旁々足は痛み、身体は疲れたと云ふので、僅かの道になつてから、どうも思ふ儘に足が掛りませぬ、そこで困つたものだと一人心配して居られる所に、向ふに馬方が荷も何も載せて居らぬ素馬を引いて、一生懸命北京の方から飛んで来る奴が居りました

「ヤ、是れは旨いと云ふので」「オイ、馬方どうだ、是れから一ツ北京まで、乗せて往つて呉れないか」と言ひますと、其の馬方が「北京の方は大變な騒ぎになつて、モウ其處にも此處にも戦争が始つてあるのに、お前を乗せて行かれるものか、ヤツと命を儲つて逃げて来る所だ」と云ふから「マア、サア言はないでも一寸乗せて呉れれば宜いのに」と馬方が引張つて居つた綱を取つて引留めて「已も北京の者がだが、女房子供が可愛さうであるから、縦ひ戦争が始つて居つても是非歸りたいと思ふのだ、どうか一ツ頼むから、馬に乗せて往つて呉れないか、足が痛んでどうも行けない」と言ひますと、其の馬方が首を捻つて「命がけでも金を餘計にやつたら乗せて行かうと云ふので」「幾らやつたら乗せるのだ」と尋ねられますと「サア、命がけだから五圓やつたら乗せて行かう」と言ひました、ところが林君は五圓どころか、モウ一圓もない、初め三四圓はあつたけれども、宿屋に泊り、彼れ是れでモウ此の時は何でも一圓の金が足りませぬ、所で林君が金着を出して振つて見せて、「五圓とは餘り高いちやアないか、モウ少し負けて呉れ、二圓位ぢやアどうだ」と云つたら「二圓や三圓で命がけに行かれたものか、ソナ事なら止しにしやう」と云つて、モウ逃出しさうになりましたから「好し

「五圓やるからそれぢやア乗せて行け」と云つて、モウ何も彼も構へなしに、其の馬にヒラリツと打乗りしました、そうすると馬方が五圓の金の欲しさに、其の網を取つて『それでは早く金をやつて置いて下さい』と云ふから『それでは之をやるから』と云つて、其の金をやりました、其の金を開いて見ると、一圓も還入つて居ないから、馬方がドンな事をするかも知れぬと思ふて、其の金を馬方が手に取るが早いから、馬の綱を自分で乗つて居りながら取上げて、馬の綱を持つて馬の鬣をバチ／＼と二ツ三ツ踏う打叩きましたから、馬はそれが爲にボーイと向ふへ飛出しました、爾うすると馬方は『汝れ人を旨く踏して一圓も還入つて居らぬ金を着をやつて、馬は唯乗ると云ふことがあるか、馬泥棒／＼と云つて後から一生懸命に飛んで來ました、追付かれては叶はぬと一生懸命飛んで往きました、トウ／＼東交民巷の入口まで参りました、そうすると其處に質屋が一軒あるのは、豫て林君が至つて心易い人でございませうから、其處で馬を止めて飛脚りて『イヤ實は斯う／＼だつた、けれどもマア大變なことで命を儲つて、今日は斯う云ふ工合で馬に乗つて歸つて來たから、どうか五圓貸して下さい』と行なり申しますると、質屋の亭主も一体に今日の有様は知つて居る、殊に林君とは至つて深

い交際でございませうから、元と林君は支那人ではないが、日本人であるけれども支那から女房も呼び子供も持つて、詰り支那に歸化するると云ふことは、此の質屋の亭主も能く知つて居るし、自分でも始終サウ云つて居られたから、日本嫌の支那好きで、詰り支那人になつて了ふ、縦ひ又支那人にならぬでも、モウ此の人は大丈夫と云ふことを豫て見て居りますので、一も二もなく五圓位のお金なら易いことだと云つて出してやりました、此の林君がお金の取れない人ならば、支那人だからソんな事もしますまいけれども、始終林君はボーイ長で、日本公使館で大分金の取れる人ではあるし、一体の様子平生の事まで知つて居るから、直ぐに出してやつたさうでございませう、彼れ是れする中に馬に遅れて居つた馬方がやつて來て、行なり棍棒を振上げて『汝れ馬盗人叩き殺して了ふ』と云ふから林君『五圓やつたら何事もしないので宜からう』五圓やれば何もないが、それでも此の金着には一圓も還入つて居らぬ』と云つて叫立てますから『そら之をやる』と云つて五圓丈を出してやつて見ると馬方は『アこれを取つたら何にもモウ言ふこともない』と云ふて、其の金を返さうとするから、『イヤ、先刻貴様を踏して、酷い目に遭せた替りにそれは酒代に増してやる』と言ひましたから、馬方は大變

悦んで初めの勢ひは何處へ往つて了つたか、ニコニコとして「旦那大きに有り難うございまする、トウシャヤー」と云つて厚く禮を云つて参りました、トウシャヤーとは日本で多謝と書きます、意味なさうでございます、斯様な工合で林君は、全く無事に右北京の都に歸つて参りました、是れは一寸林君の偵察談でございましたが、實は早やう此のお話をする都合でございましたけれども、歸つて來られる都合なり、北京の戦争なりに付ては、お話の順序は斯う致しませぬと云ふと、お讀みになる方にお分り悪うございまするから、一寸斯様なことに致しました、

十三

借て此の林君が歸つて來て、初めて天津の様子が分りましたから、先づ心配の中にも北京の方では、それでは屹度シーモア中將の率ゐる所の、聯合軍が來るは來るに相違ない、左すれば今暫くの間辛抱をすれば、或は吾々の一命も全うするところが出るかも知れない、公使館も無事に取止めることが出来るかも知れぬ、と云つて一同大悦び、林君萬歳を唱へて居りました、其翌翌日であつたか、又海

軍の森中佐と云ふ方が、天津に居られました、其の方から送られました手紙を、又支那人が使者になつて持つて参りました、ナカ／＼支那人は能う日本の使ひを致しますが、是がどうして支那人でありながら日本人の使ひやら、外國人の使ひやらするかと云ふて見ますと、是れは密使、所謂私に手紙を持つて行く者は多く、那蘇の信徒でございました、モウ此の時分は耶蘇教堂を焼き、耶蘇の宣教師を打殺し、其の耶蘇教に這入つて居る者は、支那人でも何でも一人も残らぬ、斬り殺して了まふ打殺して了ふと云ふ騒ぎになつて、現に澤山殺されて居りますから、此の耶蘇教に這入つて居つた者は、例へば一戸に一人にしても其の家の者は、爺も婆も息子も娘も殺すと云ふやうな騒ぎだから、何處の公使館内にも耶蘇教徒の爺とか婆とか、其の他耶蘇教に這入つて居る者等が、千人ばかり宛は這入つて居りました、そこで各國公使館に斯んな餘計な者が這入つて居つては、迷惑は申す迄もないことと云ふて見ますけれども、又此奴を防禦工事を施す時分には、手傳をさすには餘程便利を得たさうでございます、其の耶蘇教徒の奴等が多く手紙を持つて参る使ひを致しましたので、耶蘇教徒の面々は、支那の政府及び義和團を非常に恨んで居るのでございますから、使ひをするのも尤でございます、それに

付て一寸をかしいお話がございます、或る一人の支那人を使ひにやらうと思ふて、或る人が「貴様ア此の手紙を持つて行つて天津の方に届けて呉れるか」と尋ねますると「宜しうございます、必お届け申します」と云つたから「途中で若し義和團に生捕られるやうなことがあつて、此の手紙を取られたら大變だが、決して左様なことはないか」と尋ねますると云ふと「決して取られませぬ」と答へます「決して取られぬと云つても、若し取られた時にはどうするか、此の手紙を持つて居る者が、向ふから取上げる時は、取られぬと云ふことが出来るものか」と言ひますと、すまし返つて「イーエ、其の時には、口に丸めて呑んで了ひます」と答へます、そこで頼んだ人が「口に丸めて呑んで了ふなれば、使ひを立派に仕果せることは出来ぬぢやないか、それは手紙を持つて行くのぢやなくして、何の役にも立たぬぢやないか」と言はれますと「イーエ、呑んで了ふて、それから幾ら便所に行きたくても、それを辛抱して先きまで行付いて、先きで糞をたれて、其の中から洗ふて出しますと、手紙が出て参ります」と言ひました、實に支那人の話は驚いて了ひます、総て支那人は何事に依らせ斯んなものでございます、是れは一寸支那人の一斑を摘んでお話しした譯でございますが、六月十六日以来

は、毎日一日として敵の攻めて来ないと思ふことはなかつたのでございます、尤も其の中に朝攻て来る晝は格別の事もない、夜襲ふて来る、併しながら、斯う毎日戦つて防いで居られたお話を細かく申して見ますると云ふと、却つて皆さんが倦んで了ひなさるから、全じやうな話を斯う長くしないでも宜さうなものだと思ふお考が起つては宜しくございませぬから、是れから此の公使館に籠つて居られる所の面々の、非常な苦戦とか、或は真正に勇壯活潑と云ふやうな所丈を、摘んでお話し申上げます、が、若し籠城の日から福島將軍が、數多の騎兵を率ゐて、八月の十六日から五日でございしたらう、我が公使館に這入れましたまでの日々の事を、御覽になりたいと思ふお方があつたならば、北京籠城日記と云ふものを、文學士服部宇之吉と云ふ人が、書いたのがあるさうでございす、それには餘程詳しく出て居まする模様ですからそれを御覽になれば十分お分りになりませしやう、私は唯お客さんのお厭にならぬやうに、前申上げました通りにお話を致します、

六月の二十二三日の事でございますか、敵が焼打ちを始めましたので、日本の防禦線、前にも申上げました九龍親王府と云ふ所近くまで焼けて参りましたから、全

く日本の防禦線は、敵の爲に押縮められて、公使館に至つて近くなつて参りました、けれども未だ公使館の中に閉籠るまでには押縮められたものではございませぬ、翌の二十四日は早朝からピシ／＼と敵が押寄せて参りました、其の敵の押寄せて参りましたのは、肅親王府の東と北で、此の両面が最も烈しく攻めて参りました、所で日本の義勇隊水兵と云ふものは、其處を打破されると云ふと、公使館に引上げて公使館で戦はねばなりませぬから、成べく此の王府で喰止めて、公使館には近寄らせてはならぬと云ふので、必死となつてボン／＼彼に向つて打始められました、併し何を云ふても七十名には足らぬ、日本の義勇兵水兵、相手はどうかと云ふて見ますと、此の日は殆ど千近いのでございしますから、逆も勝れたものではございませぬ、けれども、我が日本國の公使館ばかりではなくして、彼等が相手にする所は、英國、米國、伊國、埃國、白牙義國、佛蘭西國、獨逸國、露國、我が日本國と、即ち九ヶ國相手でございしますに依つて、日本ばかりに攻懸かる譯には往かないから、それで割合に日本の兵數が少くしても持てたのでございします、けれども此の日は、モウ到底保てまいと思はれたのは、午後の事でございします、何

せかど云ふて見ますと、敵は其の王府の東北の方に、高い垣がございしました、其の垣の上に銃眼を拵へて、其處から筒先を差出して非常にマリ／＼打出す、そこで一時は味方の方に其の敵の彈が、雨霰と飛んで参りました、モウ是りやア此處は持てないかと思ふ中に、又此の敵の打つて居る真後の方から、公使館の方へ向つて、非常にマリ／＼と打始めました、だから、此の王府の東北の方から攻めて参つたばかりなら、其處に一同押寄つて、全力を注いで戦へば、防ぐ場所が狭いから五六十で十分防がれないこともございませぬが、前後左右に敵を受けては、七十足らぬ我が水兵義勇隊で、逆も防がれやう筈はない、それへ持つて来て今激戦をして居る真後の方から、頻りに打始めましたから、モウ此の日は到底此處持耐ると云ふことは出来ないと思つて、面々戦死の覺悟をして居られました、けれども誠に幸なことには、其の王府の東北面の高い垣に登つて、敵が我が軍を見下げ打ちに、打始めました其の彈が、後から打つて居る支那兵義和團の方に、始終越してボン／＼と飛んで往つて、前から打つた彈が後ろの支那兵に、大分當りましたから、見る間に十四五名／＼と倒れました、そこで敵は日本兵の少ないことを、初めから知つて居つたのであらうのに、其の

日は前から打つ弾が越して往つて、後の敵に當りましたので、日本兵が何時の間にか殖ゐて来た、何れ地から湧いたか天から降つたかに相違はないなと騒ぎ立て、自分の味方から打たれて居ることは知らせして、後から攻つて来た敵は、暫しの間には、ヤラ〜と八方へ散失せて了ひました、そこで敵が前ばかりになつたら、烈しく其處で義勇隊水兵の諸君が、打始めましたので、好い塩梅に立派に其處を喰留めて、トウ〜敵は引上げると云ふやうな事になりました、幸ひにして此の日は、我が味方には一人の死傷者もなくして相済みました、所が此の合戦が済むと同時に、又其處へ防禦線の工事が始まりました、工事と云つた所で、前にも申上げました通り、立派なことは工兵隊が居らぬから出来やう筈がない、工兵隊が居ないでも、何か他の職工を雇ふてやれば、やれないことはございませぬけれども、戦争半ばには支那の職工などを雇ひ得られやう筈はない、例へば近所近邊に居つた所で、我々日本の方からの依頼に一人も應ずる者はない、所が幸に此の四五日前に耶蘇教徒の面々が、助けて下さいと云つて老若男女、我が公使館の方へ逃げて参つた者が澤山居りました、何の位居つたかと云ふと、大概千人ばかりも居つたさうでございませす、そこで夫等に、サア来い、一ツ確かり敵の押寄せて

来ないやうに、障礙物を備へて、防禦を拵へないと、貴様達の命もなくなつて了ふぞ、加勢しう』と言はれますると、命に替る寶はなし、どんな事でも致しますと云つて、非常に彼奴等が働きました、そこで意外に防禦工事が捗りまして、随分多数の敵が来ても、一日やそこらでは破れないやうに、種々の物を持出して、其處に敵の這入つて来られないやうなことが出来ました、此の防禦の工事が捗つたのは實に仕合せで、教民の力與つて大なりでございまして、又一ツ宜ければ一ツが悪い、千人ばかり此の教徒が這入つて来ると云ふと、食せせに働かせる譯には往かないから、食物の少ないのですから之れに多少のものを食はせることには餘程の困難でございまして、併し助けて呉れと這入て来た者を見殺しにする譯には往かぬ、其の少ない食物の中を食はせて、之を助けねばならぬと云ふは、一方ならぬ難儀でございまして、其れから六月の二十五日、此の日も相變らぬ、敵は進んで参りまして、ボン〜と打出しましたが、防禦工事が大分出来ましたから、其處に一同打寄つて、一撃に非常に打出しました所が、午後になりますると云ふと、喇叭を吹いて皆引揚げて了ひました、ア、敵は引揚げたかと云ふと、纏て白旗を出しました、そら白旗

を出したから、先生達は降参をするか知らぬ、どうも妙だ、是れは奇怪だ、一同打寄つて、其の防禦線から出て見やうとする、段々柴中佐方が参られて「決して降参も其處を出てはならぬ、奴等ドンなことをするか知れぬ、此方から攻めたならば降参もしやうが、此方が唯向ふから攻めて来るのを待受けて、防ぐと云ふ位のことにて持て来て、白旗を立て降参をする」と云ふ、ソンの馬鹿なことのわらう筈がない、何分此方から出て来るやうに仕かけて、此處を出たならば、一撃に打うと云ふ、奴等が計畧かも知れないから、ソンの馬鹿なことをするな」と云つて、遂に一人も出る者はございませぬでした、後ちに聞くと云ふと、果して是は敵の計畧であつたらしうございます、

十四

一旦引揚げた所が又々其の近傍に進んで来て、火を付けて、モウ度々焼いたから格別家も残つて居りませぬけれども、多少残つて居つた、其の残りの家を皆焼かうと致しました、所が其の家と云ふのは、却つて味方の方には無い方が便利なのであるから、此方からでも焼かねばならぬ所を、向ふから焼かうとするから、是

は幸だに見て居つたが、馬鹿どもでも少し考がへたと思つて遂には焼きて其の家を寄つて、又打始めましたから守田大尉が、其處へやつて来られました「どうしても彼の家は、此方の方から焼いて置かないと云ふと、どうも工合が悪い、命の妨げだ、是非彼れを一ツ焼かう」と云つて、此度は此方の方から火を付けられました、

而して守田大尉が「兎も角も一ツ彼れを、モウ少し追散さない」と云ふと、彼の牆壁に頼つて居られては、甚だ不利益だ、味方の不利益だ、兎も角も今日は一ツ、彼れに突出して見やう、突出して見やう」と云ふので「サア、一同来い」と云つて守田大尉が呼ばれますから、義勇隊や水兵の面々やつて来られました、「何分向ふに彼の牆壁を築いて銃眼を拵へて居る、彼れに敵が集つて来るやうでは、味方は甚だ難儀だに依つて、是りやア一番彼れに突込んで、敵を追散らさうと思ふが、諸君どうだらう」と言はれますと、皆一同に「至極賛成でございます、ぢやア私も行きませう、拙者も行かう」と云ふやうな風になつて参りましたから、サウ餘計な人数の行くのは、却つて悪いから、ぢやア四五名來給へ」と云つて、守田大尉が十名足らぬ兵を引連れて、而して敵の籠りましたる所の牆壁を、打毀

さうと云ふので「サア、前へーだ、馳足だー、ワーツ」と云つて、其の塙壁を
 目がけて押寄せられました。僅か十人足らぬ味方の方が、飛んで行きます。か
 ら、残りの人々は其の塙壁を見かけて、味方の十名足らぬ人が、着するまでは援
 護をせにやア行かぬと云ふて、バラ／＼と打始める、其の味方が打始め
 るに乗じて、十名足らぬ守田大尉の一行は、何なく向ふに馳付けて、トウ／＼其
 の塙壁の一方の所丈を打毀されました。
 さうすると云ふと敵は一生懸命になつて、其の東の方に當る所から、頻りにバラ
 ーと打出しました。が、残念なことには中村秀次郎君は此の時「失つた、打たれ
 た」と一聲云つた儘、それなりにバツ／＼と倒れて戦死を致されました。此の人
 は全体日清貿易研究の志を有つて、北京に来て居られました。實に残念なこと
 を致されました。此の六月二十五日の戦ひは、マア斯んなものでございましたが、
 翌二十六日には佛蘭西國の方面が、餘程の激戦で、我が日本公使館の方には格別
 のことも無かつたのでございます。其の翌二十七日の日には、佛蘭西國の公使館
 又露西亞、亞米利加、此の貳ヶ國の公使館、それと我が日本の公使館と、四ヶ國
 の公使館を目當にして、餘程大勢の敵が押寄せて参りました。相變らぬ非常に打

出しましたから、敵の如く敵の弾が飛んで参りましたが、モウ小銃の戦争は、隨
 分此の中續いてやつて居るから、此の日は非常に敵が大勢で打つて掛りました。け
 れども、左まで驚きもしなかつたが、山砲を持つて来て、丁度王府の東北の方に
 据付けて、我が日本軍に向つて打始めました。ズドンと一發聞くと云ふと、
 日本公使館の方面に飛んで来たから「ヤー、是れは大變だ、小銃ばかりは宜かつ
 たが、サア、大砲まで持つて来た、此の大砲で打たれるれば、迎も我が方は敵する
 ことは出来ない、そら又打つた」と云ふ中に、我が兵の居る近傍にズドンと落
 ちて参りました。けれどもドン／＼とつるべ打ちに打つ弾が、僅か二三發我が兵の
 居る所に落ちた丈で、それも戦死負傷者も出来な、其の後と云ふものは照準が
 正しう無つたので、マア此の大砲の弾に我が日本兵の傷けられた者と云ふものは、
 一寸もなかつたのでございます。それだから一同打寄つて、此の山砲が悉く命中
 したら、暫らくも持てないが、一ツとして我が軍の居る所に當たらぬと云ふも
 のは、實に仕合せなことであると、大悦びをして居られました。處が、此の日の
 午後柴中佐首めとして、守田大尉に相談を致されました。「迎も山砲を彼れから打
 出されて、思ふやうに照準が正しうなくして當らなければ、幾ら打たれても結構

たけれども、斯うばかりは迎も無い、若し照準正しくして、此の守備線を打破ると云ふやうな事になつたら、夫れこそ大變だから、是非彼の山砲を据いた所丈を、踏潰さなくては可けない、彼の山砲は此方の方に一ツ取上げてやりたいものだ』と言はれますと、守田大尉も『至極御同感でございます、中佐殿、どうか一ツ彼れを取上げてやりたいものでございます、併し是れは我邦の兵ばかりでは、迎も目的を達することは出来ませぬから、英國と露西亞國と、伊太利國と此の三ヶ國の公使館にも交渉をして、サウして一ツ我が日本國と、共に四ヶ國の兵を集めて、サウして彼れに向つて突込で、彼の山砲を奪取ると云ふことにしたら、どうでございませう』成程それが宜からう、それではサア、直ぐに英國、露國、伊國に其の話をしてみやう』と云ふので、英國は我が日本公使館の隣になつて居りますから、英國に相談をし、英國から露西亞、露西亞から伊太利と、斯う相談をした所が、敵の打出す山砲は、日本公使館をのみ、目當てにするのではなくして、此の三國の公使館にも一寸一寸打掛くるのでございませぬから、伊國露國英國も我が日本の申出では、至極尤てある、御同感である、それでは多少の兵を出させうと云つて、少しばかりの兵を三ヶ國から出して呉ました。

それで我が日本の義勇兵水兵合せて二十名、敵の山砲を奪取りに、突出ると云ふ人数が揃へました、四ヶ國で二十名と云ふは實に情けないお話でございますが、是れが僅か一國から五名宛しか出されませぬ、モウ少し出しても宜さうなものだけれども、此の敵の山砲を奪取りに出て行くに云ふものは、無論三分の二は死ぬると云ふ決心でなくては、行かれたものではございませぬ、そこで餘り多數で出て行つて、それが萬一死ぬやうなことが出来て見ると云ふと、後どが守れないから、それで僅か此の四ヶ國から二十名の兵が出ることにになりました、それで此の人数が揃ふが否や、『サア、モウ人数は揃ふた、直ぐに是れから出る』と云ふので、我が公使館より乗出し、敵の備へたる山砲のズドンと打出すを、見當てにワーツと、一同に飛出しました、そうすると敵は頻りに我が軍の突出に恐れて、逃げ腰を以てバラバラと打出しましたが、半分は逃げかゝつて居るのでございませぬから、打出す弾も餘り當りませぬ、所でモウ僅かの所だ、サア進めと云つて、頻りに其處を進んで居る中に、我が日本の守備兵一名、其の所にボーンと飛來る弾が、眉間に當つてバツたり倒れて、物も言はずに戦死を致されました、ツイ其の横に居つた一名が、ヤー失敗たど一聲云ふと思ふと又バ

ツクリ倒れました、餘り激しく彈が来るから、頻りに其處に踏止つてバラ／＼と味方の方からも打出したが、凡そ十名ばかり敵を倒しました、サア、此の機に乗して進めよと云ふて、ワーツと進んだが、愈よ此の大砲の邊り間近になると云ふと、敵も砲を取られては叶はじと、必死となつて打出しました、聯合軍の十八名は首も振らせ斬込みまして、又其處で十二三の敵を倒すことは倒しましたけれど、トウ／＼山砲は取るまでには行きませぬ、此の戦ひの場所から未だ山砲のある所は少し距つて居ります、其の中に敵は群り來つて、バラ／＼と打始めましたから、モウ仕方がない、是れまでだ、無暗に進んだ所でない、サア退却と云ふので、トウ／＼志を得て退かれました、併し此の日の突撃と云ふものは、非常に敵が恐れて、膽を潰して我が兵が退却するのを、追ふても出さ却つて向ふもズン／＼と引上げて了ひました、其の日は夫れで其の後と云ふものは、別に戦争はなかつたのでございすが、翌二十八日相變らるる烈しく敵は、早朝から打かけました、けれども味方の方では大概にあしらふて居られたが、相變らるる又山砲を王府の今度は北面の方に移して、それから日本公使館の方に向つて、非常に打始めました、全体隊が此の山砲を、

他の方角に移して打出しましたのは、日本の守備線の中に家屋がある、其の家屋を此方は小楯に取つて、打つて居りましたから、それを焼かうと思ふたものと見て、其の家を目印に頻りに打始めました、そこで敵の打出す砲彈が飛んで來る中に王府の北東の隔の方に、一ツの祠堂がございしました、マア一寸祠堂と言へば小さい宮のやうなものでございす、其の北の方に一ツ垣がございしました、其の垣は随分堅固の塗壁見たやうなものでございしましたが、其處を打破りました所が、其の打破れた所へ、我が兵を集めて防ぎ譯には往かき、砲彈が非常に來るから味方は聊か後とへ退却すると云ふと、敵は其處より一人を入れたものと見えて、其の祠堂に火が起りました、驚てすると云ふと伊太利の兵が守つて居つた方面に、大きな楯が一ツございしました、其の楯にも又火が付いて二ヶ所に、サア火が起りましたから、是りやア大變だと云ふので、密つて懸つて火を消しにかゝりましたけれども、ナカ／＼と火を消す譯には往かぬ、何せであつたかと云ふて見ると、其の火の起つた方面に、益々奴等烈しく大砲を打かけました、サア義勇隊も教民も、此の時は生命限り魂限り働きましたけれども、トウ／＼火を消すと云ふことが出來ぬから、一歩

退いて、又守りの場所を別に拵へかけましたが、此の時は教民の働き、義勇隊水兵は申すに及ばず、必死となつてやりましたから一時の間に、此の垣のある所から少し退つて、又後とに立派に敵を防ぐ、防禦工事と云ふものが出来ました、此の時敵が一同に突込んで来たならば、持てなかつたかも知れないけれども、幸ひにしてそれ程に敵に勇氣はなかつたから、先づ仕合せでございまして、何分斯う云ふ工合であるから、どうしても一ツ山砲丈は取つて了はにやアいけないと云ふので、砲兵中佐の柴五郎殿が、今晚は是非夜に乗じて、敵に備へてある、彼の大砲丈を取らにやアいけないと云つて、英國の公使館に参られまして、是非今晚夜に乗じて、彼の敵の備へて居る山砲丈は、奪ひ取らないと云ふと、今日のやうな工合になるから、是非今晚は彼の山砲を取りたい、併し我邦の兵ばかりでは、逆も見込がないから、貴國の兵を少々拜借したいと云ふ相談をされた所が、至極御尤のこと、無論差上げますと云つて、約束が相済みましれ、

十五

そこで其の夜、早速柴砲兵中佐は英國の兵と、我が日本の兵と、若干名を連れて

其の砲を取りに行かうと仕度が出来て、モウ今にも出發をしやうとする矢先きに以て来て、英國公使館の方面に敵が、来たの來ぬのぢやアない、此の夜に限つて非常な大勢がバラ／＼と打出しました、是は酷い／＼と云ふが早いから、今にも英國公使館を指して、押寄せ來ると云ふやうな勢になりましたから、山砲を奪取りに行く所の騒ぎぢやアない、我邦の兵も多少英國公使館の方へ、加勢に出にやならぬと云ふやうになりましたから、直様日本の方からも、英國公使館に迫つて居る方面に向つて、バラ／＼と非常に打出しまして、援護射撃を始めました、所でどう／＼此の敵は夜半過ぎに引揚がることは、引揚げましたけれども、右様の都合でございまして、柴砲兵中佐の思立れた敵の山砲奪取りは、どう／＼遂ぐる事が出来まして止みました、爾うすると翌六月二十九日となりましたが、此の日も相變らぬ我が王府の守備線の方へ、敵は打出しましたけれども、格別のことではなかつたが、佛蘭西國の公使館の方が、餘程盛んでございまして、午後一時頃になつて又我が日本の守備線の方に、非常に打始めて、相變らぬ大砲まで打かけましたから、肅親王府の本殿に火が移つて、其の火が燃上ると同時に、喇叭の一聲が聞へました、ヤー彼の喇叭と云ふ間もあらせ一同に鬨の聲

をワーツと盛んに揚げて、今にも我が日本守備線の方へ、突込み来ると思はるゝ有様であつたから、借は奴等が突撃を始めるか、生意氣な奴だ、サ一此處一番死花の咲せ時だ、何れも揃つて大勢に向つて戦死せよと云つて、味方は覺悟をなして待受けましたが、其の鬨の聲は三度ばかりでございまして、全く奴等が虚勢を張つたので、一向突込んで来ませぬ、トウとそれなりに事は済んで了ふて、別に其の日も何事もなかつたのでございませぬ。

王府の本殿に火が付いたのは、三時間ばかりの後に火は消えました、けれども何分此の王府と云ふのが、我が日本の守備線であつた、其の本殿に火が移つた、火事後となつて見ると云ふと、最う其處には居れない、又日本軍は一步退かねばならぬやうになつて、又々防禦工事を施さなければならぬから、直ぐ耶穌教民に指圖をしてサウして、又別に退いて敵を防ぐの場所を拵へました。

サウすると敵は一日と進んで参りまして、モウ敵と味方の距離と云ふものは、至つて近くなりまして、此の日は非常の雷鳴に雨でございまして、此の雨中には必死敵がやつて来るに相違はないと思ふて、其の雨にビシヨ溜になつて一同守つて居られました、却つて敵の方では此の雷雨には日本軍から打つて出るかと

思ふて、向ふの方では無暗に大砲や小銃をドン／＼／＼打つて、我が軍の迫つて来るのを恐れて、防ぐやうな景氣であつて、別に何事もなかつたのでございませぬ、ますけれども、自ら滅法に打つた其の砲弾に、我が水兵の一名負傷致しました、併し幸ひにして死ぬるやうな創でもなかつたのでございまして、翌三十日前日の雷雨も晴れました、定めて今日も昨日同様であらうかと思つて居たが、此の日は別にさしたる事もなく、唯チヨイ／＼／＼と打つ位のこと、日本の守備線には格別のこともなかつた、他の方面にも同様でございまして、七月一日も同様で至つてマア穩かたでございまして、

所が七月二日の日のことで、朝からボチ／＼雨が降り出しましたが、此の雨にも拘らぬ、敵は相變らぬボン／＼／＼と打始める、相間には山砲を矢張りズドン／＼と打かけました、けれどもサウ烈しいと云ふのもなく、又敵が迫つて来ると云ふのでもないから、餘り澤山もない、味方の小銃弾を、無暗に費しちやア不可ないと思ふので、日本の方からは格別打出しませぬ、敵が迫つて来たら、其の時のことにしやうと云つて、相間にはボン／＼／＼と打つ人もございまして、先づ味方の方から一寸も打たないと云つて宜い位に静まり返つて居りました、初の中

は敵がボン／＼打出せば、直ぐ味方も打出すと云ふやうなことでございまして、これども、モウ大分義勇隊の諸君も慣れて来る、水兵諸君は申すに及ばせ、餘程もうも経験が積みまされたので、無駄に弾を費やすと云ふやうなことは、今日となつては決してございませぬ、公使館の内に居られる所の婦人方にも、ボン／＼鳴ると云ふと、そら又始つたぞ位のこと、飯でも食つて居る時分に、初めはボン／＼と鳴ると、直ぐに飯を食止めるやうでございしましたが、モウ今日となると云ふと、大砲の音がしても、飯を食止めると云ふやうなこともなく、飯でも食つて居ると、そら又始つた位のこと、誰も彼れも慣れて了ひましたから、容易なことでは銃を持つて打出すと云ふことは致しませぬ、

是は一寸と餘計なお話でございしましたが、今申上げました通り朝からボン／＼雨が降るのに、相變らぬ敵は山砲小銃を打出して居ります、と聽て伊太利國の士官のポリニーと云ふ人が來ました、砲兵中佐の柴五郎殿は是れに御面會になつて、どうして來られたかと尋ねますると云ふと、其のポリニーが言はれまするには「イヤ、モウ此の四五日前から敵が山砲を持つて來て、打出すには誠にどうも、我が軍に取つては甚だ難儀、どうしても彼の山砲を一ツ奪取つて了はないと云ふと、

彼の山砲の砲彈が、今のやうに命中しない中は宜いけれども、一度命中点が定つて、非常に打出される時には、半日も持てない道理であるから、今の中に一ツ彼れを奪ひ取ることにしては、どうでございませう』と云ふことを申出しました、固より柴中佐には、英國に相談をして此方から進んで、其の山砲を奪ひ取らうと云ふことは、前々日も思出された位のことであるから、『至極御同感だ、一時も早く之を奪ひ取つて了はないと、彼の山砲を以てやられては、たまつたものではない、此方よりこそ進んで御相談をしやうと思ふて居る矢先に、御出で下すつたのは、何よりの仕合せだ、それでは直ぐに是れから参りませう』と言はれますと『どうか、爾うして頂きたい、私の方でも餘計の兵は出されませぬから、僅かばかり兵を連れて参ります、日本の方からドの位出されませうか』と言はれますと『我邦の水兵義勇隊と雖も、僅かなものであるから、迎も多數は出されぬ』それではどうでございませう、英國の公使に一ツ援兵を請ふて、サウして英國の兵も少しく借りることにしては、どうでございませうか『至極宜しうございませう、ぢやア、先づ英國とそれから佛蘭西と、埃太利と、是れにも一ツ相談をして見やうではござらんか』成程それも宜しうございませう』夫れでは左うしやうと云ふ

ので、話が纏りましたから、此各國に相談をした所が、何處も援兵として少しばかりづゝの兵を出して呉れました。そこで皆合せた所が、十五名ばかりになりました。英國日本伊太利と、埃太利五ヶ國で十五名と云ふのは、實にどうも情けないお話で、一國に三人宛と云ふのは、之を以て見ても兵數の不足は、お分りになるでございませう。サア此の十五人の兵を右申上げました伊太利の士官のポリニ、是れが引連れて行かうと云ふことになりましたが、日本からも是非柴中佐が行かうと言はれましたから、それでは私も〜と、守田大尉も安藤大尉も出られることになりました。そこで日本の方から三人の中佐大尉と云ふ方が、お出でになりましたから、日本の方ではモウ少し兵を餘計に出さうと云ふので、又若干の兵を日本から出されることになりましたから、皆合せますと云ふと、彼れ是れ二十餘名となりました。サア、是れ丈けあつたら大丈夫だ、それでは午後四時に、喇叭を信号として、それと同時に出来ることにしやう、併し一緒に纏つて行つては敵の目當になつて、宜しくないから、東と西に分れて、両方から一緒に出やうと云ふことになつたから、至極それは宜しからうと云ふので、午後四時を廻しと待つて、それ〜の支

度か調へました、それで段々敵の様子を窺ひますると云ふと、一二度日本から敵の方に向つて、突込んだことがあるから、どうして敵もウツかりしては居りませぬ、始終突撃されはしないかと云ふて用心をして居るが、モウ今日あたりは用心に用心を加へて、餘程それ等の用意をして居るやうでございませう、けれども何に高の知れた相手は義和團匪、支那の官軍が居つた所が、僅かなものであるから、譯はないと云ふので、待ち設けたる時刻は來たり、午後の四時となるが早いか、サア突出と云ふ一聲に、待ち設けたる喇叭卒、早や喇叭と信号の一聲吹くと見わたるが、右と左に立別れたる、日本英吉利佛蘭西國、伊太利國に埃太利、此の五ヶ國の撰抜兵が、一同にワ〜と乗出す、敵の打出す山砲や、其の小銃の彈の中、物どもせせに駆込みしが、僅かに敵を隔つること、一百ヤードあるかなし、サア今一足と言ひさまに、進みかけたる其の時を、待ちに待つたる支那軍兵、其の兵凡そ五百に餘る、彼の義和團匪、支那の官軍一同に、バラ〜打出せば、哀れ日本の水兵三名、彼處にバラ〜倒れたり、伊太利國のポリニも、ヤー失つたと云ふ聲と、共にバツタリ倒れたが、其のポリニを助けんと、近寄る伊國の水兵も、又もや其處に

ハツタリ倒れ、隣りに進む英國の、義勇兵が又一名、埃太利の水兵一名、一度に
 ハツタリ倒るれば、残念なからモウ往けぬ、仕方がないと言ひさまに、砲兵中佐
 の一聲に、モウ駄目だ、無暗に此處を進まんとして、一人も残らぬ戦死をす
 るは、却て國に不忠ぞと、此處退却に極められて、引揚げられんとする一刹那、
 日本水兵又一名、重傷にハツタリ倒れました。
 そこで是等の戦死負傷者を、助けて歸らんと致しましたけれども、敵は烈しく打
 出しましたから、遂に伊太利國の水兵の戦死いたした一人丈は、取片付けること
 が出来ぬ、其の儘捨て退却をいたされました、けれども此の突込まれた時に、
 無二無三に敵の中に斬込んで、三十名ばかりの敵の死骸は其處に残つて居りまし
 た、幸ひにして先づ敵に追打ちを、されなかつたのは結構でございますが、引
 揚げる時に、追ふては参りませぬけれども、非常に打出しましたから、其の歸る
 途中にも二三名の負傷が出来ました、併し是等は至つて輕傷でございますましたから、
 無事に引揚げられました、残念なことには其の日もトウ、山砲を取ると云ふ
 ことは出来なかつたのでございます、斯様に度々の戦争に、大分義勇隊も戦死を
 し、水兵も戦死負傷者が出来ましたから、是れでは到底防ぎ切れないと云ふので、

例の耶蘇教徒で、一の義勇隊見たやうなものを、拵へやうと云ふことになりまし
 たが、至極それが宜からうと云ふ協議で、支那の耶蘇教徒の中で、老人子供は役
 に立ちませぬけれども、其の若い奴等を皆選つて、俄かに教民隊と云ふものが出
 来ました、併し是等は皆支那人で、耶蘇教徒でございますから、小銃など云
 ふものは一寸も握つたこともない者ばかりでございますけれども、支那の義和團
 匪官軍から、或は親を殺され、母を殺され、家を焼かれ、金を取られ、偶には何
 も彼も殺されて、タツク一人者になつた者も居ると云ふやうなものでございま
 るから、此の教民隊は悦んで戦争をしやうと云ふ氣になりました、けれども元と
 が申上げる通り、耶蘇教徒の上に支那人でございしますから、是ればかりに戦争
 を任せる譯にはいさせぬから、此の教民隊の間にも、我が日本の義勇隊が加は
 り、水兵が交わると云ふやうな事になつて、此の教民隊を率ゐるのは、野口多
 内と云ふ人が、受持たれました、そこで義勇隊と水兵と教民隊と種類が三ツにな
 つて、マア不完全ながら大分人数が殖ゑて参りました、

此の教民隊と云ふのは、全く我が日本軍の方から、勤めて組織をしたのではなくして、初め申し上げました通り、彼の教民の千餘名も我が公使館に這入つて、助けを請ひました、其の中の血氣壯年の男が一同揃ふて、私共も是非一命をかけて、御恩報じを致したいから、決死隊を拵へて、どうか御加勢をしたいと云ふことを申出たのでございまして、それを我が公使館の方で、奇特なる申し出で、之を許してやるが宜しからうと云ふことから、右の教民隊と云ふのが出来ましたのでございまして、所が七月の三日の日となりますると、此の日は朝からホチ／＼雨が降つて居ります、其の雨が降るにも拘らば、相變らば前日同様に、敵は頻りに各國公使館に向つて、攻撃を始めました、此の時我が日本公使館は前日から引續き、未だ防禦工事を施して居りましたが、それを目かけて敵はボン／＼打出し、それと同時に其の前に觀音堂がございまして、それへ以て来て火を付けましたが、忽ち焰々と燃上り、トウ／＼一寸の物もなく焼失せて了ひました、それで其の方面に我が日本の守もございまして、どうも其處を焼かれて了ふては、何も隠れ物がないやうになつて來ましたから、止を得る又一歩、我が日本の守備線と云ふものは、後に退らなければならぬやうなことになるつて参りました、

此の時其の火事の最中に、敵はボン／＼打ちながら火事と共に、追つて参りましたから、アア打てーと云ふので味方の義勇隊水兵諸君が、頻りにそれに向つて打始めましたが、傍らには火事、傍らには戦争と云ふので、然かも向ふから風が吹いて來て、味方の方に火が吹付けると云ふやうな都合で、甚だ不利益でございまして、けれども必死となつて味方の方から打出しましたから、トウ／＼敵が攻入ることが出来なかつたが、彼れ是れする中に外交官の兒島と云ふ人が負傷し、平野君も負傷をいたしました、其の東の方に壁のあつた所へ守りを付けて、頻りに打つて居りました水兵の人々が、又一名負傷し、ヤ／＼と一寸の間に三四名倒れました、此の時平野君は格別の負傷でもなかつたけれども、他の二人と云ふ者は餘程の重傷でございまして、其處で止を得る此の二ヶ所の味方の守備線と云ふものは、捨て退くことに致しまして、サウして少しく退つて又防禦工事を設けることに致されました、丁度此の時敵は佛蘭西國の公使館を、頻りに攻撃して居りましたが、どうも佛蘭西の公使館殊に危く見えました、それで若し此の佛蘭西國の公使館が、萬一敵の爲に奪はれるやうなことになるつて來ると云ふと、丁度我が日本軍は、敵を前と後に受け

る道理になつて來ますから、非常に心配をして、戦ひ半ばにも佛蘭西の方はどうであらうかと、幾度か人を遣つて見られました。幸ひにして佛蘭西が、敵に其の守備線を奪はれることはないと言ふことに、やつと喰止まりましたに依つて、先づこの日は無事で、日本の方も後ろに受けると言ふ丈の憂はないやうになりました。

所が相變らるる前日來の通り、山砲を以て頻りに打立てましたから、此の日は殊に砲彈が夥しく飛んで來つて、西賓旅館と言ふ所がございしました。其の家も打毀されて誠にどうも物凄うい様子になつて參りましたが、日が暮るれど、大砲の打方丈は止まりましたけれども、非常に敵は迫つて來て小銃を打立てました、けれどもモウ此の時は畧々防禦工事も、出來上つて居りますに依つて、敵が飛込んで來ると云ふことは出來なかつたから、夜半頃まで戦ふて居りましたけれども、夜半過ぎ頃から敵もポツ／＼退却を始めました。此の敵が退却を始めたのはどう云ふものであつたかと、後から段々様子を尋ねて見ますると云ふと、米國の兵が其の敵に向つて、二度程突撃をして、サウして四五十名の敵を倒したさうでございす、それが爲に退却をしたと云ふことが後で分りました。

翌七月四日の日は、別に敵が攻撃すると言ふやうなこともなく、二三度火矢を敵の方から打つて、王府の南門に火が付いた位のこと、別に烈しい合戦と云ふこともなかつたのでございす、丁度此の日兒島外交官補は、病院で死去致されましたが、實に残念なこととございす、翌五日もポツ／＼打つては居りました。王府の東北の方に敷いて、サウして日本公使館を打始めました、そこで彼れに砲を据ゑられては、たまるものぢやアない、サア、是非彼の山砲軍を打潰せと云ふので、味方の方から必死となつて、トウ／＼進んで敵の砲兵陣地に向つて、ポツ／＼と非常に打始めました。誠に宜い塩梅に其の大砲を据ゑて居る所へ、味方の小銃の彈が、能く當りましたから、一時間も持たずして、敵は直ぐに逃散つて了ひました。

所が其の砲の据ゑてある所と云ふものは、我が日本の守備線から、四十間はあるなしでございす、それをサリと日本の人が見て「ヤ、是りやア酷い、敵は退却をしたが、大砲は彼れに抛つてあるぞ」「成程是りやア、どうも好い塩梅だ、彼れを一ツ奪ひ取らうぢやないか」「彼れを此方へ奪取つたら、餘程の便利である

が』と其處にも此處にも發勇兵や、水兵の面々が言始めました、そこで安藤大尉が『成程さうだ、是りやア旨い、彼れを一ツ此方に取つて了つたならば、餘程仕合せだ、併し此の儘是れから、向ふに突込まうとした所で、餘り味方は人数が少ない、居る者が皆出て行けば、それで宜いけれども、一同出て行く譯にはいかぬから、コート、待て、兎角是りやア一ツ、柴中佐殿に相談をして見やう』と云つて、砲兵中佐柴五郎殿に『敵が今退却をしましたが、山砲丈は捨てて往て居りますから、彼の砲を一ツ奪ひ取ることにしては、さうでございませう』と言はれますと、『そりやア至極結構だ、是非それはやるべし』、『けれども人数が足りませぬが、さう致しませうか』イヤ、それは例の通り英國と、伊太利國と、佛蘭西國に相談をしたならば、屹度是も同様同意するに相違ないから、それと一緒に行けば、行けないことはない』ア、左様でございませうか、それは一ツ其の方に早く御相談を願ひたうございます、『宜しい、それでは直ぐに僕が行つて來やう』と柴砲兵中佐は直ぐに右英國と伊太利國と、佛蘭西國とに出て貰ひたいと云ふことを相談になりましたが、無論同意をいたしました、所で此の三ヶ國の兵を、日本國の兵と合せて行かうと云ふ、初めは計畫であつた

けれども、それから段々と話が變つて、サウ餘計に行くにも及ばぬから、先づ英國の兵丈と、我が日本兵と合して、伊太利國と佛蘭西國と、此の二ヶ國の兵は、二ヶ所から、日本と英國との兵が進む時分に、小銃を打出して、敵を牽制して貰ふ方が宜しからう、サウすると伊太利と佛蘭西と二ヶ國から敵に向つて小銃を打出し、今にも攻寄せるやうにして見せると、敵はそれに向つて全力を注いで、攻撃を始むるに相違はない、其の處に乗じて我が兵と英國の兵と飛込んだならば、屹度取れるに相違はない『成程それが宜しうございませう』と議はそれに決しました、そこで安藤大尉一人で行かれる筈でございませうけれども、守田大尉も柴中佐も、是非行きたいと言はれますから、都合將校三人、それに我が邦の水兵義勇兵の一部を率ゐて、サウして出られることになりました、此の時大砲を引いて、持つて戻らねばならないから、それに例の教民隊を少しばかり連れて行くこと、斯う云ふことになりました、愈よモウ諸事計畫が出来上りましたから、それではサウ行くぞと云ふので、直ちに其處を乗出し、ワーツと関の聲を發して、其の山砲を据ゐてある所に向つて、味方の面々突進致しました、

所がサウ餘計には敵が、居ない積りであつた所が、随分敵も居つてハツ／＼と打出しました、近寄つて見ると云ふと、餘程堅固な塙壁であつて容易に這入られない、其處から頻りに打出したから、例の教民、其の耶穌教徒の面々は、決死隊なと云ふて出て來ましたけれども、どうして非常に打たれて見ると云ふと、忽ち其處に踏留つて、向ふへ進み切れませぬ、ソんなざまぢア可けないから、サア行け——と手を引ッ張つて進んで見るけれども、偶には其處に匍ふ奴も居り、寝る奴も居ると云ふやうな工合で、ナカ／＼どうも進ませぬ、そこでソんな奴は抛つて置け——、サア、乃公が行くから來いと云つて、安藤大尉は水兵二名、それに教民の一名、是れ丈を引連れて、其の敵の砲を据ゑて居る方面に、無二無三に飛込まうとした所が、待ち設けたる支那兵が、一度に放つ銃聲は、左ながら豆を煎るが如く、ハツ／＼と飛んで來ますから、安藤大尉がハツ／＼倒れ、傍らに付いて居つたる水兵二名も亦た倒れ、教民の中で豪傑と云つて、一番に出て往つた其の一名も倒れました、そこで是れは可けない、斯うなつた以上は、モウ駄目だと云つて、残りの人々はトウ／＼進むことが出來ず、此處退却だ／＼、又やり直さないと云ふと、是れでは可かぬと云つて、残念ながらどうも其處を退却せに

やアならぬやうなことになるました、サア其處を退却し始めやうとしたが、モウ本統に敵の居る所とは、五六間でもございましたから、壁の下に喰つて居る、モウ敵は小銃は打たれないから、瓦の片扁とか石とかを以て無茶苦茶に抛り出しました、そこで其の砲を取らうと思ふた所で、其の砲のある所と、日本の兵の居る所とは僅か四五間でございましたけれども、其の間に持て來て、今の瓦とか石とかを無茶苦茶に抛りますから、其の砲のある所と、僅か日本人の居る所の間が往けないやうになつて來ました、そこでトウ／＼思を達することが出來ず、現在其の砲は見て居るけれ共、取る事が出來ずして、我が日本軍が退却を始めると、敵も一生懸命に周章して其の大砲を引いて逃げて了ひました、けれども此の突撃は餘程敵が恐れたものと見て、此の後ちと云ふものは其の大砲を此の方面に持出して來せして、英國の方に向つて打つやうにしましたから、此の後は山砲を以て我が日本軍が打たれることとは、先づないやうな都合になりました、唯惜ひらくは山砲を取ることが出來なかつたのでございましたが、安藤大尉の此の時の傷は、抜けて人の眼に立つやうでございましたが、トウ／＼小銃の爲に負傷を受け、治療の効を奏せず、名譽の戦死を致されました、前途有望の士官誠に惜しい

けない、好し〜吾輩がそれに代るから、君其處を退き給へ」と云つて檜原君が是れに代つて教民隊を指揮し、残念ながら野口多内君は負傷でございますから、此處を退却することになりました、けれども僅かの間の戦いで、何なく此の敵を打散しましたから、此の日は別に烈しい戦争はなしに済みました、明る八日も早朝から、其處此處に火を放つて敵は迫つて来て、前お話申上げました通り、觀音堂の近傍に小さい小屋が焼つて居りました、それにも火を放つた、其の近傍に小さい門があつた、それにも焼始めましたそこで其の近傍は大事な我が日本軍の守備線であつた所へ以て来て、其處にも此處にも火を放つ、それと一緒に王府の西側に一ツ建物がございました、それを敵が大砲でドン〜ドン〜打つて、打毀して了ふ、サウしてそれと正殿と二ヶ所に火を放ちましたから、其處等一面火となつて、南の方に二つの大門がございました、それに迄も火が移り、賊にどうも烈しき火事となりましたが、其の火事の中から奴等ボン〜ボン〜打出しましたけれども、火の盛んなる爲め、我が方面に迫つて来ると云ふことは出来ず、唯遠方からボン〜打つた丈でございますから、サア、今此方も打つてと云ふので、我が軍の方から其の教民隊を指揮してボン〜打たせて置いて、サ

ウして南の方の第一門の東の方に當つた所に、又防禦工事を施しました、斯様に火事があつた故に、我が軍の守備線は止を得退かねばならぬやうになつて来て、モウ先日前五歩も六歩も、敵の爲に締められて居る、丁度我が守備線と云ふものは、ズーツと出た所もあり、引ッ込んだ所もあり、犬の牙見たやうな工合に、鐵の形ちのやうになりました、賊にどうも守備することに付ては、非常に困難でございましたが、斯う云ふ工合に出て居る所もあり、引ッ込んで居る所もあるから、割に守備線が長い道理でございます、長くなつて来ると云ふと、人数か餘計に要る、其の人数が餘計に要るのに持て来て、戦死負傷者が日に〜出来すから、人は益々不足でございます、そこで例の教民隊などは、彼處此處へ配つてヤツと守備線を守つて居りましたが、此の一番出張つた所の守備線は、僅かに敵の進んで居る所とは、五六間しかない所もございました、そこで話し聲も敵味方の方から聞ゆるやうであるから、防禦工事をやる時分には、成べく物音をせぬやうに、話でも大きな聲はさせぬ、後にはモウ手真似ばかりで、何も彼もすると云ふやうにして防禦工事を施し、夜は固よりサウ近いから、燈火を付けられやう筈はなく、次第に困難を増しました、其の夜の十時過ぎから又敵が銃砲を一時に打出した、

ドーンと大砲が一發飛んで来るが早い、小銃は其の中にバチ／＼バチ／＼打つて居りましたから、夜中のことではあるし、決して油断がならぬから味方の者は十分氣を付けて、是れに應じて打つて居れど云ふやうな都合で、ボン／＼ボン／＼と味方の方も有らん限りの力を出して、打つて居りましたが、丁度午前二時頃になつて、四方から一時にワーツと鬨の聲を揚げて、烈しくバリ／＼バリ／＼打出しました。

サウすると我か水兵の守つて居つた方面に「ヤー打たれました、残念ながらやられた」など云ふ聲が聞ゆるから、其の方面に来て見ると、モウ水兵が三名負傷して、二名は大した瘡でもございませぬが、一名は餘程の重傷で、連も一命覺束ないやうでございます、其の中に義勇兵の加納君が負傷し、杉君が又負傷した、それだけさへも少ない我軍が、此の日の合戦に水兵三名義勇兵が二名、都合五人も死傷者が出来るど云ふやうなことになつて来たから、此の時は何れも餘程の決心をして、公使館に火を放つて死ぬるか、どうしやうかと云ふ評議をする位の有様であつたが、幸ひにして僅かの間の戦ひで、敵は退却をいたしましたから、幸ひにして先づ此の日は済みました。

明る七月の九日は朝から非常の熱さで、どうも其の年一番の熱さであらうと云ふ位であつたが、それにも構はせ、又例の通り敵はバチ／＼バチ／＼打つて来ました、そこで味方の方は「そろ又来た」と云ふので、モウ大分慣れて居りますから、格別驚きもせせに居た所が、敵と味方の間が至つて近いものでございしますから、朝から熱さに堪兼ねて、味方の方で「非常の熱さだ、今年一番の熱さぢやないか」と云ふて話を居つた、其の事を聞付けてやつて来たものと見えて、初めボン／＼と小銃を打つて居つたが、一番近い所に石を抛りかけるやら、瓦のかげを抛り込むやら、大變敵の方から叫き立てる物を抛込み始めました、そこで丁度日本が防禦工事をして居る所に、サウ石を投げられては、如何にも防禦工事を施すことが出来ないから、一同打寄つて「オイ／＼、此處を一同守つて居れ、サウして防禦工事をやつて居らぬ方から敵に向つて、此方からも投げやうぢやないか、サウすると其の方面に奴等集つて来て、石を投げるに相違ない、其の際に此處の防禦工事をやるのだ」と云つて飛でもない所へ往つて、敵の近い所に、此方からも石とか瓦とかを、無暗に投出しました。

サウすると我が計畧に乗つて、其の方面に防禦工事を施すだらうと思つて其の方

に、一生懸命敵が石やら瓦やらを投げかけました、其の際にやつと初めの處に、防禦工事を施しました、是等は餘程どうも旨く往つたのでございませうが、其の中に酷いことには材木を五六本、敵が投込みました、「ヤー、酷いことをし居るぞ、材木を投込んでどうするだらう」と云つて居ると、其の材木に石炭油が付いてございませう「何んだ、是やア、此の材木には石炭油が付けてあるぞ、どうするだらう」と云ふ中に、應て藁とか紙とかに火を付けて、其の材木を投込んだ方面に、抛り込み始めました、けれども其の材木に火が移るのを、片端から寄つて打消す、其の際に小銃を打出して、トウ／＼敵の計畧は水の泡になつて了ひました、けれども此の合戦が、随分近うございませうから、酷い戦ひではなかつたけれども、又水兵一名と小寺君と二人、此の時負傷を致しました、斯様に益々義勇隊の兵に、負傷者が殖ゐて来たから柴中佐は「是やア實に困つた、斯うどうも人数が不足しては、何分防禦は出来ぬ、兎角英國公使に一ツ相談をして、少々兵を借りて来やう」と云つて柴中佐が、直ぐに英國公使館まで参られました、此の戦争中に英國公使館に参られたと云ふて見ると、何だかお話がおかし

いやうでございませうが、英國公使館は日本の公使館からは、隣りになつて居つて、敵に見えない所を潜つて行かれる場所がございませう、そこで英國公使に参られて「實に我が公使館の方では、非常に死傷者が出来て、列國の中で一番兵數が少なかつた所へ以て来て、斯う死傷者が殖ゐたから、何分我が公使館は、どうも敵を防ぐに兵力が、甚だ薄弱になりました、斯うどうも人数が少なうしては、敵を防止めると云ふことは、此の後は見込がないから誠に願ひ兼ねますが、貴所の國の水兵を僅かばかりでも、貸して下さることは出来ませうまいか」と云ふことを相談されますると、英國公使は之を聞かれて「至極御尤のこととござる、誠に貴國の公使館には、激戦しば／＼で死傷者が殖ゐたことは、私も飽まで知つて居るのでございませう、貴國の公使館が持てないやうになれば、我が公使館も同様持てませぬ、御望に應じて十分の兵をお貸し申したいけれども、貴所も御承知の通り、我が邦の水兵と雖も、サウ餘計でもないから、實にお耻かしいけれども、水兵六名と義勇兵を四名上げませう、サウすると總て十名になるから、是れで間に合せて頂きたら」と云つて、非常に親切に援助の兵を出して呉れました、そこで日本人も居れば、英國人も居り、支那人の效民隊も居り、背丈の小さいのも居れば高い

のも居り、言葉は互に分らき、唯手様目様で戦争をすると云ふやうな感さで、
うも苦しい中にも屢々お笑がございました、

十八

越えて七月十日の早朝より王府東門及び北門の方より小銃大砲を、相變らき打始
めました、丁度是れと同時に佛蘭西國の公使館の方にも、同様激烈の攻撃を始め
ました、英國の方丈は左まで烈しくなかつたから、此の時は英吉利國の公使館
の方から、餘程援護射撃をして貰つて、我が日本公使館も佛蘭西公使館も、遂に
大激戦と云ふことにはならせして済みました、けれども相變らき、敵の打出す砲
弾と云ふものは、屢々我が公使館内にも落ちて参ります、誠に危険でございまし
たが、大概敵の砲弾の落下する場所が分りましたから、其處を避けて居りました
ので、それが故に戦死負傷者等は出来ませぬでした、唯水兵一名其の砲弾の爲に、
重傷を負ふて二十分間も経たない中に、戦死を致されました、先づ此の位のこと
で、別に大したこともなかつたのでございます、
其の翌十一日も同様銃砲で、屢々我が公使館に向つて攻撃を始めましたけれども、

別に激戦と云ふ程のこともございませぬでした、けれども先づ前日に比べると、
少し戦ひが烈しうございました、それで榎原君は教民隊の一部を率ゐて、之を非
常に奨励して、敵を防ぐことに努めて、始終飯食う暇もなくして、働いて居られ
ました、不幸にして敵の一弾が、其の榎原君が働いて居られる方面に来て、ズ
ーンと破裂をしました、そら来たど誰が言ふ間もなく、榎原君ハツタリ倒れま
した、『ヤー大變だ、是れは榎原君負傷だ』と皆一同に押寄つて様子を見ますと云
ふと、左の足に餘程の重傷でございました、けれども流石に榎原君は『何に此の
位のこと死ぬものぢやアない、心配をすな』と云ふては見られました、
さうも、逆もそれで指揮を執るなと云ふことは、萬々出来ない話でございます
から、榎原君は病院に直されました、病院と云へば深い立派なものがあるやうで
ございます、彼の中川十全と云ふ軍醫の方が、先づ治療をする場所を、拵へて
置いた醫室でございます、それに手傳人は妻君とか何んとか云ふ位のこと、決
して立派な病院ではございませぬ、此の榎原君が病院に這入りましたから、教民
隊の言は、隊長——其の隊長を勤むるのは鄭君が代りました、
全体此の鄭君と云ふ人は、糧食のことやら、炊事のことを監督して居られました、

けれども敵民隊の指揮官には、鄭君が一番適當と云ふので、檜原君の後を鄭君が引受けられましたから、其の炊事彼れ是れのことば、石井君が鄭君に代つて擔任し監督すると云ふことになりました、丁度此の檜原君が負傷をしたのと同時に、王府の東阿司門附近にも、追々破裂弾が飛んで参りました、其處は海軍大尉の原胤雄殿が、水兵等を率ゐて守備して居られる所でございまして、相變らば檜原君と同時に、水兵が一名負傷致しました、サウして負傷したばかりであれば宜かつたが、其の砲彈の爲に火事が起りました、サア兎も角も此の火を消さないで、大變だと云つて、寄つて懸つて非常の働きをいたされましたが、幸ひにして其の火は水兵義勇隊諸君の働きで、ヤツと消止めになりましたから、それではマア不幸の中の仕合せでございまして、是れが丁度盡過きでございまして、其の後は格別敵も攻めなかつた、なせかと云ふて見ますると、砲彈を打込んで火が起つたから、モウそれで宜いと云ふ考を起したものと見えて、其後と云ふものは戦かひも絶つて、其の日は砲彈も飛んで來て、小銃の彈も飛んで來ないと云ふやうな譯でございまして、日が暮れると云ふと、丁度此の夜は舊曆六月十五夜に當つて居るから、月が冴渡つて、誠にどうも奇麗な宵でございまして、何事もない時の

月夜と云ふものは、實に宜いものでございまして、孤城落日と云ふ有様の人々の身には、此の十五夜の月が、却つて種々の悲しみを誘ふの種でございまして、それで何れも月を眺めて「アー好い月だとは言ふものの其の後は絶つて言葉はな

い、
月見れば千々に物こそ悲しけれ

我身一の秋にはあらねど

と云ふ百人首の中に歌があるが、殊にどうも先づ秋に近い今宵の月と云ふものを見れば、何だか故郷が思はれる、故郷を思はないでも唯だ何となく悲しいと云ふて、寄り合ふて月を眺めて居りますと、又傍らから「イヤ、此の月はモウ再び見るまいと思ふたが、又此の明月を見ると云ふは、マアお互い生きて居るから、仕合せぢやアないか、月を見て泣くと云ふソンの男子に未練なことがあるものか、ソンの馬鹿なことがあるものか、吾輩は決して月を見て泣くものか、實に愉快に堪へない」と口では云ふて見るけれども、どうしてサウ云はれる人も、涙を浮かべて居られると云ふやうな有様でございまして、實に是れは尤なことばで、モウ彈も大概盡きんとする、糧食も盡きんとして、敵は次第に殖つて來る、味方は次第に

人数は戦死負傷で減じて来る、それに助けの兵はないから、此の月を見て哀れを催すは當然のごとでございませす、併し此の夜と云ふものは至つて穏か、敵は大砲も小銃も先づ一發も打たないやうな、模様でございませす、唯月見位のごとで済みませす、

翌十二日午前の五時からボン／＼と銃聲が聞けたから、相變らせやつて来たネ、と云つて僅かの敵であつたから日本公使館内では、格別取合もせきに居られませす、所が王府の北に大門が一ツございませす、其の大門の中に大きな家屋が一ツございませす、其處は全体日本の水兵義勇兵の人々が、言はゞ分衛のやうにして居られて、其處まで出て行つて敵を打つやうに、公使館内の人々が半ば別れて出て居られた所でございませす、前日前々日の火事の爲に、其處を退いて居られませす、今日は其處まで敵がやつて來ませす、爾うして其の門の右と左の方に一寸した土塀がございませす、其處に初め日本の方から小銃を打出すやうに、穴をはがして銃眼を拵へて、其處から打つて居られた所が其處まで敵が進んで來て、其の穴から内の方に向けて、差出してバラ／＼と打

な門に日本兵が立籠つて居つたから、それを打つたのでございませす、そこで日本公使館内の義勇兵水兵諸君は、生意氣な奴だ、昨日まで我が分衛として居つた處までやつて來て、此の生命知らせの蛆蟲めが、サアモウ、斯うなつた以上は仕方がない、奴等一人も残さず、打殺して了へ、打てと云ふので、バラ／＼と其の北の大門から、我が水兵義勇兵の面々が打出させませす、所が間敷が近いのに、敵の今銃眼から小銃を差出して居つた所は、餘り塀が厚うございませぬから、味方から打出すと同時に見る間に六七人バラ／＼と倒れて、妙な聲を出して騒立てませす、『そら今だ、モウ一辛抱と云ふのでバラ／＼と打出した所が、何も彼も抛

たらかして逃げて了ひませす、逃げて了つたは宜かつたが、其の逃げるに臨んで、其處の大家に火を一ツ付けませす、そこで其の火が起つて右左の大門に火が移り、誠にどうも非常の騒ぎになりませす、たけれども、日本兵の面々は、此の火事の中に飛込んで敵を突倒せ、サア突進せよと云ふて、餘り疝癪に障りましたから、其の火の中をも厭はせ、僅かに火の燃えて居ない場所があると、それから飛込んで突つけ——ワツと突出させませす、此處で十四五名も倒させませす、それが爲に意外に戦利品があつた、其の戦利品は小

銃とか或は彈藥とかでございましたが、是れまで長い間戦ひを毎日／＼やつて居つたけれども、戦利品と云ふものは一寸もない、なせかと云ふて見ると、此の度の合戦には能く／＼さうも上役から、此の支那の兵や義和團匪に注意を與へたものと見えて、何時も敵が逃げて行く時には小銃や何か打倒された兵が落ちて居ると、先づ一番に之れを持つて逃げ、死骸に彈藥でも括り付けた支那兵が居ると、それには石炭油を懸けて火を付けて、逃げて行くこと云ふやうな工合で、是迄の戦ひには只の一度も敵の小銃や、彈藥などを取つたことはなかつた、けれども此の月初めて二三十挺の小銃も分捕りし、彈藥も餘程餘計に取りました、それで北京龍城の戦争以來、先づ今日が初めて分捕りがあつたと云つて、其の彈を銃々に配り、或は教民隊に小銃の足りなかつたのも、俄かに小銃が手にのつたと云ふやうな工合で、此の日はさうも非常の悦びでございました、所が日暮れ時分から大分風が吹始めて雨が降出しました、夜半頃になると大風になつて来て、雨は格別のことは無つたけれども、其處の櫓を吹破つたとか、彼處の小屋を吹倒したと云ふやうな工合になつて來ましたから「是りやアさうも斯う云ふ工合なれば、明朝は必老敵が攻めて來るに相違ないから、油断は出來ないと云ふので、其

處此處を護りにかゝられました、さうも守備線が廣いから、日本の水兵教民隊義勇兵では足りない、そこで又々英吉利の公使館に相談に參つて、又英國から水兵五名ヤツとの事に借りて來られました、其の五名で一方口を防ぐと云ふやうなことになりました、そこで次第に夜が明けかゝつたが、即ち七月十三日果して敵がやつて來ました、けれども此方が十分に、注意に注意を加へて居つたから、格別のことはなくして敵は退却を始めて了ひました、此の時伊太利國の方にも随分戦争が始つた、けれども伊太利國の方も餘程堅固に守備が整ふて居つたから、格別のことはなかつたさうでございます、聽てこれが變じて佛蘭西國の公使館の方面に、非常に關の聲が起りました、ヤ一何でも是れは佛蘭西の公使館には攻入つたか知らんと云つて、味方の方は大變心配をして居られたが、何がさて唯だ關の聲ばかりで、トウ／＼攻入ることは出來ぬのでございました、けれども此の關の聲を三度ばかり揚げると同時に、非常に激烈に小銃を打出した、けれども此の佛蘭西國の公使館と、獨逸國の公使館とは近うございまして、兩國の公使館内にある所の兵が、力を盡して打出したから、是れ以て格別のことはなしに、トウ／＼引揚げました、其

處を引揚げたかと思ふと、英吉利公使館の方に向つて、又「バチ」と打始めまし

十九

そこで日本公使館の方では、イヤ隣りの英國公使館の方に、バチと打始めて來たネ、是れはどうも妙だと云ふと、一聲喇叭が嘯と鳴始めました、彼りやア何方の喇叭か、無論敵の喇叭だ、英國の公使館の方に聞ゆるが、彼りやア敵だくと云ふと、又圓の聲が「ツ」と起りました、敵の方に圓の聲が揚つたから「どうするだらう、突込むのかネ、何有に例の虚勢を取るのだ」「ア、さうだらう」「何様未だ這入つた様子はない」と頻りに日本公使館の方では唇をして居りましたがい、是れは全く我が日本軍の方から、打つて出ないやうに、我が軍に向つて牽制運動をやつたので、今の獨逸國佛蘭西國を攻むるに、若し日本國と英國の公使館から、打つて出られては堪らぬから、打つて出ないやうに、攻かくるやうな景色をして見せて、サウして佛蘭西と獨逸を攻取らうと云ふ、何でも考であつたらしうござ

使館の守備線を、堅固にして追つて來れば打ち、逃げれば追つては出ないと云ふやうな模様でございましてから、十分に目的を達することは出来て、支那兵義和團匪は、又少しばかり退却をいたしました、此の支那軍が目的を達せしに、退却するやうに見せかけましたのは、其の實佛蘭西公使の裏手の方に、地雷火を仕掛けて居つたさうでございまして、そこで其處を退却したならば、佛蘭西國の兵が打つて出るに相違はないと云ふ所で、目的を達せしに残念ながら引揚ると云ふやうな景色をして見せて、引揚げました、そこで佛國の公使館にある所の兵は、直ぐに打つて出るかと思ひの外、打つて出ないものだから、敵は又進んで來て「バチ」「バチ」「バチ」とやつて佛國と戦ひを始めた、佛蘭西は警戒に警戒を加へて、容易に打つて出なかつたのでございまして、餘りどうも子供の喧嘩のやうに、來るかと思へば引揚げるし、引揚げるかと思へば、又邪魔をするに云ふやうな風で、疝癪に障つて堪らないから、佛蘭西の兵が五六名、「此の命知らせめ、一人も残らね打取れ」と云ふので、「バチ」「バチ」と打出しなから五六名飛出して、其の支那兵を突散らさんと出て行きました、サウすると地雷火に佛蘭西兵を皆乗せてやらうと云ふので、「ツ」と支那兵は逃げ

始めた、逃げ始めたから、そら追へーと云つて佛蘭西兵が四五人飛出すと云ふと、直ぐ地雷火に火が付いたと見えて、實に大山も殺らんとする響きで、二三度ドンドノと鳴りました、何でも三四ヶ所に地雷火があつたものと見えました、此の地雷火に火が移ると同時に、佛蘭西兵は盛しかと思ひの外、出て行きました者は四五人でございますから、僅か二人彼の佛蘭西兵が、其の地雷火に落ちて戦死をし、他の人は負傷もせきに、後へ退きました、ところがどう間違つたのやら、支那兵が却つて其の地雷火の中に落込んで、七十餘名死んだと云ふは、實にどうも馬鹿くしい支那兵の仕方でございました、どう間違へば斯うも彼の味方を殺したのであるか知らぬ、佛蘭西の兵を引出して、地雷火に陥れやうと思ふて、佛蘭西兵は僅かに二名の戦死で、味方の支那兵が七十餘名も其の地雷火に落込んだと云ふは、何分馬鹿らしいの往留りでございます、其の地雷火をやつた後ちと云ふものは、支那兵七十餘名殺した爲であるか、ボンともドントも言はさき、其れなりに其の日は戦さは止て了ひました、けれども我が日本公使館の方には、其の後も多少ボンと打つて居りますから、英國公使館の方から心配をして、貴國の公使館に餘程の敵が迫つて来て居るやうだが、

何れ兵が不足であらうから、幸ひ露西亞國から十五六名水兵が、我が公使館内に接護に来たから、之を貴所の方にお貸し申すから、此の露西亞の兵十五六名を、日本水兵諸君の中に、お加へになつたが宜からうと云つて、英國の公使から親切に送つて呉れました、けれども此時はモウ格別の戦争もなく、我が日本軍の方では固より人数は少ないけれども、英國の水兵も多少加勢に来て居りますから、此の露西亞國の十五六名の兵、借る迄には及ばなかつたから、御好意有り難うございますけれども、モウ我が日本軍の方では是れ丈で宜しいから、此の露西亞國の水兵諸君は、佛國の方面に御出になるやうになすつたが宜からうと云ふて、禮を言ふて謝絶を致しましたから、それでは佛國の方が餘程難義であるから、其の方面にやらうと云つて、其の露西亞國の兵の十五六名は佛國の公使館の方に参られました、

明る七月十四日も相變らる雨は降り續いて居りましたが、午後になつて始めて天氣が好くなりました、所が此の天氣が好くなると、佛蘭西國の方面に向つて、又敵が随分烈しく攻撃を始めました、併し我が守備隊には、格別合戦と云ふ程のこともなく、偶にボンと小銃などを打かくる位のことと云ひました、此の日は

日本軍の方で、段々防禦工事を施して居つたのが、餘程出来上りましたから、更に其の方面に守備兵を進むることになつて、前日より一層嚴重に、守備を致して居りました。然るに此の日我が日本の方から教民の中に、金と云ふ姓で名は一寸分りませぬが、其の金某を天津の方に出して置きましたのが、其の日北京の城内を出されぬ中に、敵の方から生捕られましたと見えて、漸く其奴が歸つて参りました。どうして歸つて来たかと云ふて尋ねますと、城を出やうと致しますると、番兵共から生捕られて、トウ／＼出ることが出来なかつたのでございませぬ。其の上上官の側へ引ッ張り出されて、種々攻められました。それでも決して初は白状せせにどうかして、是非天津の方にお使ひに行かうと思ふて、色々申述べて見ましたけれども、九裸体にして何處も彼處も探された上、柱に括り付けて大變撲られました。それで仕方がなしに天津に日本の使ひに行くこと云ふことを白状しました所が、どう云ふ使に行くかと言ひましたので、此の北京の方に戦争のあつたことを、天津に知らせに行くのだと言ひました所が、それならば此の手紙を以て、モウ一遍日本の公使館に歸れと云つて、天津の方へはやらせに、此方の方に追返されました。斯様に手紙を持つて行けど云ふてやりました、どうぞ之を御覽

下さいと云つて、差出しましたから、一同公使館内では打寄つて、其の書状を出して見られますと云ふと、赤い紙に何か書いてございませぬ、其の中に此の手紙を書いてやつたのは、慶親王などの名前も書いてございませぬ、サウして其の宛はどうかと云ふて見ると、英國公使の他外國公使の宛でございませぬ、其の紙面の文面は、一寸一口申上げますと、久しく公使館内のことは、細かに分らなかつたけれども、此の生捕が白状する所に依つて、何も彼も好く分つた、各國の公使何れも御健在で何も變りのないことは誠に悦ばしい次第である、次は先日橋の上に貼出をしたことがあるのに、其の貼出は見られたのであらうが、それに何等の御答も各國公使からなくして、其の橋の上に貼出をした明けの日には、却つて小銃をボン／＼打出して、御返答をなすつたのは、甚だどうも遺憾千万のことである、又各國より此の北京の方に公使館を救ひの爲め進んで居る聯合軍は、義和團の爲に打退けられて、天津の方に逃げて往つて了ふたさうだ、斯様な有様であるから、先日各國公使に北京を引揚げて天津の方に早く歸られよと云ふことを、申送つたけれども、今日まで引上げられずに居られたのは、却つて幸ひのことと思ふ、我が政府は十分各公使館を、保護しやうと思ふて居るけれども、唯今の有

様では其の事が十分行届き兼ねる、それで願くならば各公使館に居られる人々、一人も残らぬ總理衙門の方に参られたいことを頻りに希望するのである、若し公使館の方に居られたる人々が皆總理衙門に這入られると云ふことであれば、十分保護を致すであらう、なほ云ふことか書いてございしました、是れは全く義和團匪が戦争を仕かけて、支那の官兵の方では、關係のないやうな紙面の趣き、頻りに恩を估つて他日義和團ばかりを潰して、已れ等が罪を免れやうと云ふやうな、實に人を馬鹿にした紙面の有様でございしました、サウして其の紙面に明日正午迄に何分の確かなる御返事を願ふと云ふことが書いてございしました、若し明日の正午迄に、何分の御返答が出来ないやうなれば、最早吾々が各公使其他の人の爲に、謀るの途はないやうになるから、能く御考へあれと云ふことが、又書添へてございしました、そこで一同打寄つて、其の紙面を見て、奴等が小刀細工は是れ位のものだと云つて、大笑ひになつたのでございしました、其の日は別に何事もなかつた、明日の日は斯う云ふ手紙を密越して居りながら、朝早くから山砲なぞをドン／＼打出し、諸所に焼残りの小家があれは、それに火を掛けると云ふやうな模様でございしました、けれども別に大したこともなく、此の

日は二三度敵が関の驛を揚げた位のことと相済みました、けれども此の砲彈の爲に英國から我が日本公使館に来て居つた、水兵義勇兵兩人共に負傷をして、餘程難儀を致しましたが、それより他には負傷した者はなかつたのでございします、所が昨日の紙面に英國公使が、何か紙面をやることはやつた方が宜いだらうと云ふお話がございしましたから、至極御尤と云ふことを返答しましたので、英國の公使が各國公使の代表者となつて、總理衙門に一週間の書面を送られました、其の書面の概要をお話し致しますと、先年東洋の某國と戦ひを開かれし時は、甚だ危窮に瀕したることありし支那が、今回吾々東西の諸國を、一時に相手として戦を開かれるに至りしは、其の勇歎せるの外、是れなく候との意味と、且つ支那政府に於て、誠心的商議せんとならば、須く責任ある官吏を派し、白旗を携へて來らしむべし、と云ふことを申送られました、此の書面を送られました、應て一道の上諭がございしました、此の支那の上諭と云ふのは、是まで度々ございしましたけれども、それは畧して一ツもお話をして居りませぬが、是丈は一す一口申上げます、其の支那の上諭と云ふ文章は、支那の俗文見たやうなもので、一寸御婦人方にお分り悪うございしますから、言葉を

變へてお話を申し上げます、どう書いてあつたかと言ふて見ると

義和團は國の爲め力を盡すものであつて、集つて居るが、其の義和團の名を藉りて、無頼の徒に力を盡すと云ふので集つたのを幸ひに、其の義和團に名を藉りて、無頼の徒が澤山集り、真正の義和團でないのが、義和團の眞似をして、而して副都統の慶恆と云ふ者の、親族一同を打殺し、剩へ其の慶恆を酷い目に遇はせて、トウ／＼後には死ぬるやうに至らしめた、是等不法のこのあるから、須く嚴重に取締るべし、又現在城を守つて居るの辨兵等、誠に力を盡して巡邏することを怠つて居る、真正に不規律なことである

と言つて、其れを戒しめたるやうな趣の上諭でございませした。

明治三十六年五月十五日印刷
 明治三十六年五月廿二日發行

定價壹冊金貳拾五錢 郵稅六錢

熊本縣熊本市北千反畑町廿四番地
 美當一調

編輯者 兼 發行所
 福岡縣福岡市下名島町五十三番地
 大隈壯太郎



印刷者
 福岡縣福岡市東職人町二十番地
 山崎卯之吉

印刷所
 福岡縣福岡市下名島町五十三番地
 大隈活版印刷所

發行所 集英堂
 同縣同所 (電話番六二)

大 販 賣 元

熊本市新町二丁目
 福岡市中島町
 久留米市米屋町
 長崎市酒屋町
 大阪市西區順慶町
 鹿兒島市仲町
 大分縣大分町
 廣島市大手町
 臺灣臺北
 大韓國釜山

長崎次郎
 博文社
 菊竹書店
 安中虎與號
 此村欽英堂
 吉田幸兵衛
 甲斐治平堂
 東西堂
 博文堂
 尾縣哲太郎

各縣下賣捌所

福岡市博多中島町 積善館支店
 同市西區口町 眞海書店
 同市西區橋口町 相川書店
 同市西區米屋町 久留米市米屋町 江藤書店
 同市西區米屋町 田中幸次郎
 筑前小倉市 石村國助
 筑前小倉市 中村卯助
 豐前小倉市 幸島信文堂

同市本町 門司市本町
 同市津市 中津市
 同市行橋町 同市行橋町
 同市飯塚町 同市飯塚町
 同市芦屋町 同市芦屋町

中島書店 豐前香春町
 中村近古堂 筑前大隈町
 久野新開舖 同甘木町
 野依曆三 三池大牟田町
 宮崎商會 肥前早岐
 飯野數吉 佐世保
 元野木次郎 同
 石田八郎 同

小林書店 大村國太郎
 平井新助 書館跡部萬藏
 山村書店 山田川書店
 五郎川書店 野口書店
 青雲堂

